

是也我作<sub>レ</sub>如<sub>レ</sub>是次第安置<sub>二</sub>說<sub>レ</sub>其法已<sub>レ</sub>汝等皆須<sub>二</sub>亦見亦聞<sub>一</sub>一切大衆於<sub>レ</sub>意云何我所<sub>レ</sub>置法其事是不<sub>二</sub>二十八宿及八大星所行諸業汝喜樂<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>是爲<sub>レ</sub>非宣<sub>二</sub>各宣說<sub>一</sub>爾時一切天人仙人阿修羅龍及緊那羅等皆悉合<sub>レ</sub>掌成<sub>レ</sub>作<sub>レ</sub>是言如<sub>レ</sub>今大仙於<sub>レ</sub>天人間最爲<sub>二</sub>尊重<sub>一</sub>乃至諸龍及阿修羅無<sub>レ</sub>能勝<sub>レ</sub>者智慧慈悲最爲<sub>二</sub>第一<sub>一</sub>於<sub>レ</sub>無量劫不<sub>レ</sub>忘憐<sub>二</sub>愍<sub>一</sub>一切衆生故獲<sub>二</sub>福報<sub>一</sub>誓願滿<sub>レ</sub>已功德如<sub>レ</sub>海能<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>過去現在當來一切諸事<sub>二</sub>天人之間無<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>如<sub>レ</sub>是<sub>一</sub>智慧之者如<sub>レ</sub>是法用<sub>二</sub>日夜刹那及迦羅時大小星宿月半月滿年滿<sub>一</sub>法用更<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>衆生能<sub>レ</sub>作<sub>レ</sub>是法皆悉隨喜安樂我等善哉大德安<sub>レ</sub>穩衆生是時<sub>二</sub>依盧虱吒仙人復作<sub>一</sub>是言此十二月一年始終如此方便大小星等刹那時法皆已說竟

【讀方】大乗大方等日藏經卷第八、寶王波旬星宿品第八の二にのたまはく。そのときに依盧虱吒、天衆につけていはく。是もろくの月等、おのく主<sub>レ</sub>露あり。なんぢ四種の衆生を救濟すべし。何者なか四とする。地上の人、諸龍、夜叉、乃至蠅等を救けん。斯のごときの類、みな悉く之を救けん。我もろ

くの衆生を安樂するを以てのゆへに星宿を布置す。おのく、分部乃至<sub>二</sub>摸呼羅の時等<sub>一</sub>あり。また皆具にとかん。その國土方面の處にしたがひて、所作の事業隨順し增長せん。依盧虱吒、大衆のまへにして、掌を合せて説きていはく。是のごとく、日月、年時、大小星宿を安置す。何者なか名けて六時ありとするや。正月二月を暄暖時となづく。三月四月を種作時となづく。五月六月は求降雨時なり。七月八月は物欲熱時なり。九月十月は寒凍の時なり。十一月十二月は合して大雪の時なり。これ十二月をわかつて六時とす。また大星宿のかす八あり。いはゆる<sub>二</sub>壽星、熒惑、鎮星、太白、辰星、日、月、宿羅殿星<sub>一</sub>なり。また小星宿二十八あり。いはゆる昂より胃にいたるまでの諸宿これなり。我かくのごときの次第安置をなす。その法を説きはんぬ。汝等みな須く亦見また聞くべし。一切大衆、意において云何ぞ。我置くとす。その法、その事是なるや否や。二十八宿および八大星の所行諸業、汝喜樂するや否や。是となすや非となすや。よろしくおのく宣説すべし。そのときに一切天人、仙人、阿修羅、龍および緊那羅等みな悉く掌を合せて咸くこの言をなさく。いま大仙のごときは、天人の間においてもとも尊重とす。乃至諸龍および阿修羅よく勝れたる者なけん。智慧慈悲もとも第一とす。無量劫において忘れず。一切衆生を憐愍するがゆへに、福報をえ、誓願みちをばりて功德、海のごとし。よく過去現在當來の一切諸事を知るに、天人の間、是のごときの智慧のものあることなし。是のごときの法用、日夜、刹那および迦羅時大小星宿、月半月滿、年滿の法用、さらに衆生よくこの法をなすことなけん。皆ことごとく隨喜し安樂ならん。われちよきかな大徳衆生を安穩す。このときに依盧虱吒仙人またこの言をなさく。この十二月一年始終かくのごとく方便す。

大小星等利那の時法、みな已にときをはんぬ。

【字解】一。大乘大方等日藏經 十卷。隋の世、印度三藏、那連提耶舍譯。『大方等大集經』中の日藏分の異譯である。

二。波旬 梵語パーピヤン (Pāpīya) の音譯。惡殺生者と譯す。魔王の名、常に惡意を懷き、惡法を具へ、修道者の心を擾し、慧命を斷つことを性とす。

三。依盧虱吒 仙人の名、梵語盧虱と譯す。『日藏經』第七によれば、劫初の時、某王の夫人姪蕩にして王の死後隨と交りて、頭耳口鼻眼等悉く驢馬に似たる子を生み、之を厩に棄てたが、運よく羅刹婦が来て雪山に連れゆき、そこに養育してゐると、この童子、天童と遊び、形相前と異りて光明を放つに至つたが、唯唇のみ腫であつた。そこで腫唇と呼ばれたといふのである。そして是は釋尊の前生であるといふ。

四。摸呼羅 梵語須臾と譯す。玄奘譯。『俱舍論』には摩呼羅多と音譯す。同論第十二には、百廿利那を一恒利那、六十恒利那を一臘縛、六十臘縛を一摩呼羅多、三大摩呼羅多を一晝夜としてあり。

五。歲星 木星のこと。熒星は火星のこと。鎮星は土星のこと。太白星は金星のこと。辰星は水星のこと。以上五星を五行星、又は五曜といふ。これに日月を加へて七曜といひ、更に羅喉星と計都星を加へて九曜といふ。

六。奇麗殿星 暗障星と譯す。時に日月の光を障ふる星と稱す。上の七曜の一。暗曜のこと。古

は日月蝕をもつて、この星の作用と考へたのである。

七。阿修羅 梵語アスラ (Asura)。非天と譯す。八部衆の一。衆相山中、又は大海の底に住みて、常に三十三天の諸天と戦ふ鬼神である。天部に似て天部でない爲めに非天の名あり。

八。龍 梵語ナーガ (Nāga)。八部衆の一。佛敎守護の龍神。もとは印度に住せる龍種族の蛇類崇拜の神話から起つたものらしい。人面身龍にして、頭に龍の冠を戴く。是に八大龍王 (難陀龍王、跋難陀龍王、沙伽羅龍王、和修吉龍王、徳叉迦龍王、阿那婆達多龍王、摩那斯龍王、優鉢羅龍王) あり。

九。緊那羅 梵語キンナラ (Kinnara)。擬人、擬神と譯す。八部衆の一。人とも神とも定め難き歌舞をなす妖鬼、歌神、歌樂神、音樂の象徴らしい。

【文科】『日藏經』星宿品の文を引いて天地星宿の運行を信仰的に解決し給ふ一段である。

【講義】『大乘大方等日藏經』卷第八、魔王波旬星宿品第八五二に言はく、爾時劫初に於いて佉盧虱吒仙ありて、諸の天衆に告げて云ふやう。

是等黒日白月等には各主として司る所がある。今夫を述べるに先ち、大體是等の星辰を何の爲めに配置したかを云ふであらう。即ち是れ衆生の爲めである。故に汝等、四種の衆生を救済るがよい。四種の衆生とは何んであるかと云へば、地上に棲める人間、諸の龍、夜叉、蛇蝎をいふ。是等の類を我は盡く救るであらう。我、是等の諸の衆生を安樂に

して道に入らしめんが爲めに、天の星宿を布置たのである。是等の星辰は各守るべき分野がある。乃至摸呼羅時等に至るまで、具に説き示すであらう。即ち其等星辰はその配屬せらるゝ國土及び夫々の方面の處に隨うて、其作す所の事業が夫相應に行はれ、又益増長てゆくのである。

かくして佉盧虱吒仙人は、大衆の前に於いて、掌を合はせ、意を調べて説いて云ふやう。かやうに日月年時、大小の星宿を安置した。其中六時とは何んであるかといふに正月二月の兩月を暄暖時と名け、三月四月の兩月を種作時と名け、五月六月の兩月は求降雨時七月八月は物欲熟時、九月十月は寒凍時、十一月十二月は大雪時と名ける。かやうに十二月を分つて、六時となすのである。

又大星宿の數は八つである。所謂木星、火星、土星、金星、水星、及び日月星、荷羅喉星である。又小星宿は所謂廿八宿にして昂から胃までの諸星である。

我、かやうに星宿の次第布列をなし、そして其法則を説き已つた。汝等須く夫等を、面前に見聞するがよい。此處に集れる一切の大衆よ、我布列せる是等の星宿の法則を是と思ふや不や、是等の廿八宿及び八大星の運行、諸業を、汝等は喜樂とすや不や、是とする

か、非とするか、各自が思ふ所を宣べるがよい。

爾時、一切天人、仙人、阿修羅、龍、及び緊那羅神等、皆一様に掌を合はせて云ふやう。大仙は良に天人の間に於いて尤も尊重御方にてゐらせられる。天人のみならず、諸龍、阿修羅にも大仙に勝れた者はない。其智慧も其慈悲も、第一に位し給ふ。無量劫の永い間一瞬間も一切衆生を憐愍み給ふことを御忘れになつたことはない。是智慧によりて福徳を獲給ひ、誓願は圓に成就して、備へ給ふ功徳は海の如く測り知ることが出来ない。又過去と現在と當來のあらゆる事柄を知り給ふことも、天人の間に智慧の較ぶべき者は一人もない。かやうに廣遠なる天の星宿の法則、運行、及び日夜、刹那、及び迦羅時、大小星宿、月半（十五日まで）、月滿（晦日まで）並に滿年（一年間）の法則、運行等は、大仙を外にしては誰も是等の法則を知る者はない。夫故に皆悉く大仙の設けられた法則に隨喜してをりまする。願くば吾等をして安樂ならしめよ。大徳の衆生を安穩ならしめ給ふことは、福なる哉。

是時、佉盧虱吒仙人復言ふやう。十二月一年の始終はかやうな方便によりて施設した。又大小星宿等の運行、刹那時等の時間の建立等皆すでに説き竟つた。

又復安置四天大王於須彌山、四方面所各置一王、是諸方所各領衆生、北方天王名毘沙門、是其界內多有夜叉、南方天王名毘留茶俱、是其界內多有鳩槃荼、西方天王名毘留博叉、是其界內多有諸龍、東方天王名題頭隸吒、是其界內多乾闥婆、四方四維皆悉擁護一切洲渚及諸城邑、亦置鬼神而守護之、爾時、依盧虱吒仙人爲於衆生演說法、已時、諸天龍夜叉阿修羅緊那羅摩睺羅伽人非人等一切大衆皆稱善哉、歡喜無量、是時天龍夜叉阿修羅等日夜供養、依盧虱吒。

【讀方】また、四天大王を須彌山の四方面所に安置す。おの、一の王をおく。この諸の方所にしておの、衆生を領す。北方天王を毘沙門となづく。これその界の内におほく夜叉あり。南方天王を毘留茶俱となづく。これその界の内におほく鳩槃荼あり。西方天王を毘留博叉となづく。これその界の内におほく、一の龍あり。東方天王を題頭隸吒となづく。これその界の内におほく乾闥婆おほし。四方四維みなことごとく一切洲渚およびもろゝの城邑を擁護す。また鬼神をおきてしかもこれを守護せしむ。そのとき、依盧虱吒仙人、衆生のために法を演説し已る。ときにもろゝの天、龍、夜叉、阿修羅、緊那羅、摩睺羅伽、人、非人等一切大衆

衆において、みな善哉と稱して歡喜無量なることをなす。このときに天、龍、夜叉、阿修羅等日夜に依盧虱吒を供養す。

【字解】一。四大天王 帝釋天王の外臣として四天王に居り、佛法を守護する四王の名、東方提頭頼吒天王（持國）、南方、毗留勒叉天王（增長）、西方、毗留博叉天王、（廣目）、北方、毗沙門天王（多聞）の稱。この四王の各に麾下の八將あり、合して、三十二將軍を四天下に派して出家を守護す。故に護世の諸天とも稱せらる。

二。鳩槃荼 厭眉鬼と名く、人の精氣を吸ふ。亦冬瓜鬼ともいふ。陰、蓋とも名けらる。蓋し其形陰、蓋状を呈し、冬瓜に似る故なり。或は曰く、此鬼の陰、蓋甚だ大きく、常に腕の上に擔いて歩く故に此名ありといふ。

三。摩睺羅 梵音、ホーラガ（Mahoraga）、大腹行、大蟒神と譯す。大蟒のこと。八部衆の一。

【講義】更に進んで説かむ。是等の外に四大天王を須彌山の四方面に安置した。即ち一方面に各一王を配置した。是等の諸王は、この四方所の各に於いて其衆生を統理するのである。北方の天王を毘沙門天（多聞天）と名く、其領分に多くの夜叉鬼がある。南方の天王を毘留茶俱（增長天）と名く、其領分に多くの鳩槃荼鬼がある。西方の天王を毘留博叉（廣目天）と名く、其領分内には多くの諸龍がある。東方の天王を題頭隸吒（持國天）

と名く、其領分内には乾闥婆神がある。かくの如く四方四維に互りて、一切の洲渚及び諸の城邑を擁護つてゐる。亦此外に鬼神を置いて守護せしめるのである。

爾時、佉盧虱吒仙人が衆の爲めに演説し已ると、是等の諸天、龍、夜叉、阿修羅、緊那羅、摩睺羅伽、人非人等の一切の大衆は、皆善哉と喜びの言葉を發して歡喜び極みなき有様であつた。かくて是等の天龍、夜叉、阿修羅等は、日夜に此威徳廣大なる佉盧虱吒を供養し奉つた。

次復於後過無量世更有仙人名伽伽出現於世復更別說置諸星宿小大月法時節要略

爾時諸龍在佉羅垢山聖人住處尊重恭敬光味仙人盡其龍力而供養之已上抄出

【讀方】次にまた後に無量世を過ぎてまた仙人あらん。伽伽伽となづく。世に出現してまたさらに別にしてもろくの星宿、小大月の法、時節要略をときおかん。

そのときに諸龍、佉羅垢山聖人の住處にありて、光味仙人を尊重し、恭敬せん。その龍力をつくして

しかもこれを供養せん。已上抄出

【文科】星宿品の文によりて未來の星宿等の配置を説き給ふ。

【講義】次に復、後の世無量世を過ぎて、伽伽伽と名くる仙人ありて出世し、更に復星宿、小大月の法則、時節の要略を説くであらう。

以上は釋迦佛の勅命によりて雪山の香味仙が、佛方によりて征伏せられたる諸龍に對する説法であるが、是等の説法を聞いた諸龍は、仙羅垢山聖人の住處にをつて、件の光味仙人を尊重び恭敬ひ、あらゆる龍力を傾けて供養し奉つた。

第二科 念佛品の文

日藏經卷第九念佛三昧品第十言爾時波旬說是偈已彼衆之中有一魔女名為離暗此魔女者曾於過去植衆徳本作是說言沙門瞿曇名稱福徳若有衆生得聞佛名一心歸依一切諸魔於彼衆生不能加惡何況見佛親聞法人種種方便慧解深廣至乃設千萬億一切魔軍終不能得須臾爲害如來今者開涅槃道女欲往彼歸依於佛即爲其父而說偈言至修學三世諸佛法度脫

一切苦衆生善於諸法得自在當來願我還如佛爾時離暗說是  
 偈已父王宮中五百魔女姊妹眷屬一切皆發菩提之心是時魔  
 王見其宮中五百諸女皆歸於佛發菩提心益大瞋忿怖畏憂愁  
 乃至時五百諸魔女等更爲波旬而說偈言若有衆生歸佛者彼  
 人不畏千億魔何況欲度生死流到於無爲涅槃岸若有能以一  
 香華持散三寶佛法僧於堅固勇猛心一切衆魔不能壞至乃  
 等過去無量惡一切亦滅無有餘至誠專心歸佛已決得阿耨  
 菩提果爾時魔王聞是偈已倍大瞋恚怖畏煎心憔悴憂愁獨坐  
 宮內

【讀方】 日藏經卷第九念佛三昧品第十にのたまはく。その時に波旬この偈をときをばるに、かの衆  
 の中にひとり魔女あり。なづけて離暗とす。この魔女はむかし過去において、もろくの徳本を植ふたりき。こ  
 の説をなしていはく、沙門羅漢はなづけて福徳と稱す。もし衆生ありて佛名を聞くことをえて、一心に歸  
 依せん。一切の諸魔、かの衆生において惡を加ふることあたはず。いかにいはんや佛を見たまつり、親たり  
 法をきかん人、種々に方便し懸解深廣なるをや。乃至とひ千萬億の一切衆軍、つるに須臾も善をなすことを得

ることあたはず。如來いま涅槃道をひらきたまへり。女がしに往きて佛に歸依せんと欲して、即ちその父の爲  
 にしかも偈をときていはく。乃至三世の諸佛の法を修學して、一切の苦の衆生を度脱せん。よく諸法において  
 自在をえ。當來に願くば我がへりて佛のごとくならんと。そのときに離暗この偈をときをばるに、父の王宮の中  
 の五百の魔女姊妹眷屬一切みな菩提の心を發せしむ。このときに魔王その宮のうちの五百の諸女みな佛に  
 歸して菩提心を發せしむるを見るに、益々おほきに瞋恚怖畏憂愁す。乃至このときに五百の魔女の  
 た波旬の爲にしかも偈をときていはく。もし衆生ありて佛に歸すれば、かの人千億の魔におそれず。何にい  
 はんや生死の流を度して、無爲涅槃の岸にいたらんと欲するをや。もしよく一香華をもて三寶佛法僧に持  
 散することありて、堅固勇猛の心をおこさん。一切の衆魔、壞することあたはず。乃至われら過去の無量の惡、一  
 切また滅して餘あることなけん。至誠專心に佛に歸してまつりをばらば、さだめて阿耨菩提の果をえんと。  
 そのときに魔王、この偈をきくをばりて、倍々大に瞋恚怖畏し、心をこがし、憔悴憂愁してひとり宮内に坐す。

【字解】 一。羅漢 梵音ローマ (Gotama or Gautama)。羅漢、喬答摩はその音譯である。地最勝と譯す。  
 釋尊の通稱。當時外道を初め一般の人々は、この名をもつて釋尊を呼んだ。もとこの名は釋迦種族の先祖  
 が奉仕したる仙人の名であつたのを、一族の姓としたのである。

【文科】 念佛品によりて魔女の歸佛乃至魔王懼怖を明す。惡魔外道の佛道に歸依することを示すのである。

【講義】 『大集日藏經』卷第九、念佛三昧品第十に言はく、爾時惡魔波旬が偈を説き已る

と、魔衆の中から一魔女が現はれた。彼女は魔波旬の娘で離暗と名けらる。此魔女は過去諸の功德を積んだのであるが、今や其宿善開發して歸佛の念を起した。進んで申すやう。沙門瞿曇（釋尊の通稱）の尊き名は四方に聞え、そして限りない福德を具へてゐらされる。若し衆生ありて、如來の御名を聞くことが出来て、一心に歸命し奉るならば、一切惡魔も其一人に對しては少しも害惡を加へることが出来ない。況んやまのあたり佛を見奉り、親しく教法を聞いた人が、種々の修行を積み、廣くして深い智慧を得てをる人に對しては尙更のことである。乃至即ちよしや千萬億の魔軍がどこ迄も障礙を加へても、ほんの須臾も害を與へることは出来ないのである。

其時、釋迦如來は菩提樹下に於いて涅槃の大道を知見せられた。件の魔女、彼處に赴きて如來に歸依し奉らんと欲ひ、即ち父の魔王の爲めに偈を説いて申すやう。乃至過去現在未來の諸佛の教法を修學めて、一切苦惱の衆生を度脱はむ。かくて我は善く心内心外一切の諸法を支配する自在力を獲るであらう。當來願くば我も如來の如く證りを得む。

魔女離暗の誓願はかやうな廣大なものであつた。この偈を説き了る時、父王の宮中にあ

る姉妹眷屬の五百の魔女達は、悉く共に大菩提心を發すに至つた。魔王は其等五百の魔女達が如來に歸依して、菩提心を發すを見て、大に瞋念り、怖畏れ、憂愁へた。乃至是時件の五百の魔女はまた魔波旬の爲めに偈を説いていふ。

若し衆生ありて、一度如來に歸命し奉る心起すならば彼人、如來と心を一にしてゐる爲めに、千億の魔も畏れることはない。況んや生死輪廻の流れを超えて、寂靜無爲の涅槃の岸に到らんと欲ふ大菩提心の人にありては尙更である。

故に若し一莖の香華を佛法僧の三寶に捧げてその四邊に散らし、堅固き勇猛しい求道の心を發すならば、一切衆魔もこの人の心を壞ることは出来ない。乃至我等が過去に作りし無量惡業も、この菩提心を發すことによりて一切消滅せ、少しも残ることはないであらう。至誠を籠め、心を專にして如來に歸命し奉つたことである。されば決定して無上正眞道を得るであらう。

爾時、魔王この偈を聞き倍大に瞋恚り大に怖畏れ心を煎し、憂愁へ憔悴れ孤影悄然として宮殿の中に坐した。

是時、光味菩薩摩訶薩、聞佛說法、一切衆生盡離攀緣、得四梵行。

【讀方】このときに光味菩薩摩訶薩、佛の説法をきいて一切衆生ことごとく攀緣をはなれ四梵行をえしむ。至乃

【字解】一。攀緣 煩惱の異名。鶴が木の枝を飛び廻りて暫も休むことなきやうに、外境に轉ぜられて靜平を保つことの出来ない精神作用をいふ。

二。四梵行 慈、悲、喜、捨の四淨行を指す。

【文科】星宿品により開法の得益を明し給ふ。

【講義】是時、光味菩薩（上に諸龍の供養を受けた光味仙人のこと）大菩薩が、眞實に

如來の説法を聞いたことによりて、一切の衆生は盡く煩惱を離れ、慈、悲、喜、捨の四淨行を體得するに至つた。至乃

應淨洗浴著鮮潔衣、菜食長齋、勿噉辛臭、於寂靜處、莊嚴道場、正念結跏、或行或坐、念佛身相、無使亂心、更莫他緣、念其餘事、或一日夜、或七日夜、不作餘業、至心念佛、乃至見佛、小念見小、大念見大、乃至無量念者、見佛色身無量無邊。

大乃至無量念者見佛色身無量無邊

【讀方】きよく洗浴し、鮮潔のころもを着て、菜食長齋して辛く臭きものを噉ふことなかるべし。寂靜處にして道場を莊嚴し、正念結跏し、あるひは行じあるひは坐して、佛身の相を念じて、亂心せしむることなかれ。さらに他緣し、その餘の事を念することなかれ。あるひは一日夜、あるひは七日夜、餘の業をなすべし。至心念佛すれば乃至佛をみたまつる。小念は小をみたまつり、大念は大をみたまつる。乃至無量の念は、佛の色身の無量無邊なるをみたまつる。抄

【字解】一。結跏 結跏趺座のこと。左の趾を右の股の上に、右の趾を左の股の上におく坐相。

【文科】念佛品によりて思惟修行の方軌を明し給ふ。

【講義】應に身體を洗浴し、煩惱の垢を除いた鮮潔衣（袈裟のこと）を纏ひ、菜食を取り長く齋を持ちて、五辛等の臭き食物を取る勿れ。寂靜なる山林に居を占めて、修道の場を莊嚴にし、念を正しくして結跏趺坐し、勞るれば經行み、歩みては坐し、如來の身相を觀念べて心を亂さず、他事を思ひ、餘事を念ふ勿れ。

かくの如くして一日一夜、或は七日七夜に亘りて餘業を作さず、心一つにして念佛し奉れば、やがて佛を見奉るであらう。小聲の念佛は小佛を見、大聲の念佛は大佛を見奉る。乃至無量の大念佛は無量廣大なる佛身を見奉るであらう。



第三科 護塔品

日藏經卷第十護塔品第十三言時魔波旬與其眷屬八十億衆前後圍遶往至佛所到已接足頂禮世尊說如是偈乃三世諸佛大慈悲受我禮懺一切殃法僧二寶亦復然至心歸依無有異願我今日所供養恭敬尊重世導師諸惡永盡不復生盡壽歸依如來法時魔波旬說是偈已白佛言世尊如來於我及諸衆生平等無二心常歡喜慈悲含忍佛言如是時魔波旬生大歡喜發清淨心重於佛前接足頂禮右遶三帀恭敬合掌却住一面瞻仰世尊心無厭足已上抄出

【讀方】日藏經卷第十護塔品第十三にのたまはく。ときに魔波旬、その眷屬の八十億衆と前後に圍繞して佛所に往至す。到りをはりて接足して世尊を頂禮したてまつり、是の如きの偈をとかく。乃三世の諸佛の大慈悲、わが一切の殃を懺悔するをうけたまへ。法僧二寶もまたくしかなり。至心歸依したてまつるに異あることなし。願くばわれ今日、世の導師を供養し恭敬し尊重したてまつる所なり。諸惡ながく盡してまた生ぜじ。壽をつくすまで如來の法に歸依せんと。ときに魔波旬、この偈をときをはりて、佛にまふして言さ

く。世尊如來、我および、もろくの衆生において平等無二の心にして、つれに歡喜し慈悲含忍したまへ。佛如是とのたまふ。時に魔波旬、大歡喜を生じて清淨心をおこして、かされて佛前にして接足頂禮し、右に繞ること三帀して、恭敬合掌して却きて一面に住して、世尊を瞻仰したてまつる。心に厭足なし。已上略出

【字解】一。含忍 含は含むこと、攝受すること。忍は堪へ忍ぶこと、罪を厭はず、慈悲をもつて忍受すること。故に含忍は攝受哀愍の意味である。

【文科】護塔品の文によりて魔王の歸佛乃至魔王生淨心を明し給ふ。

【講義】『日藏經』卷第十、護塔品第十三に言はく、その時に惡魔波旬は、八十億の魔の眷屬を吾前後に圍繞せしめ、釋迦牟尼佛の御許に詣で、頂をもつて世尊の御足に接けて禮拜し奉り、かくの如き偈を説いた。乃三世諸佛の大慈悲を心とし給ふ世尊よ、我心からなる禮拜を受けさせ給へ。我いま佛に對ひ奉りて一切の殃を懺悔し奉る。佛とも法僧二寶にも懺悔いたします。この三寶に至誠心をもつて歸依し奉るに、些の異心もありませぬ。我今日供養し奉り、恭敬し重びまつる人天の大導師世尊よ、願くば我あらゆる罪惡を永く滅盡して復と再び起らぬやうにせしめ給へ。永劫の末かけて如來の大法に歸依し奉る。

時に惡魔波旬、是の偈を説き了りて、更に世尊に申すやう。如來世尊は、私はじめ一切の衆生を平等にして變りなき心にて見はし給ふ。願くば常に歡喜と慈悲心をもつて吾等を攝受哀愍し給へ。

佛、如是々と魔波旬の申し出でを印可し給ふと、波旬大に歡喜びて、法悦に浸り、清淨心を起して重ねて佛前に進みて、頂を佛足に接けて敬禮し奉り、右に繞ること三度、更に恭敬の念をもつて掌を合はせ、却いて一方に坐し、子の母を愛念ふやうにしげくと世尊の容顏を仰ぎまつりて鑿くことを知らぬ有様であつた。已上抄出

第四項 『月藏經』の文

第一科 諸惡鬼神得敬品上の文

大方等大集月藏經卷第五諸惡鬼神得敬信品第八上言諸仁者於下彼遠離邪見因緣上獲十種功德何等爲十一者心性柔善伴侶賢良二者信有業報乃至奪命不起諸惡三者歸敬三寶不信天神四者得於正見不擇歲次日月吉凶五者常生人天離諸惡

道六者得賢善心明人讚譽七者棄於世俗常求聖道八者離斷常見信因緣法九者常與正信正行正發心人共相會遇十者得生善道以是遠離邪見善根上廻向阿耨多羅三藐三菩提是人速滿六波羅蜜於善淨佛土而成正覺得菩提已於彼佛土功德智慧一切善根莊嚴衆生來生其國不信天神離惡道長於彼命終還生善道抄略

【讀方】大方等大集月藏經卷第五、諸惡鬼神得敬信品第八のたまはく。もろくの仁者、かの邪見を遠離する因緣において十種の功德をえん。何等をか十とす。一には心性柔善にして伴侶賢良ならん。二には業報あることを信じて、乃至奪命にもろくの悪をおこさず。三には三寶を歸敬して天神を信ぜず。四には正見をえて歲次日月の吉凶をえらばず。五にはつれに人天に生じてもろくの惡道をはなる。六には賢善の心あきらかなることえ、人讚譽す。七には世俗をすて、つれに聖道をもとむ。八には斷常の見をばなれて因緣の法を信す。九にはつれに正信、正行、正發心の人といもにあひ會りあはん。十には善道に生ずることえ、この邪見を遠離する善根をもて、阿耨多羅三藐三菩提心に廻向せん。この人すみやかに六波羅蜜を滿せん。善淨佛土にしてしかも正覺をならん。菩提を得をばりて、かの佛土にして功德智慧一切善根衆生を莊嚴しその國に來生せしむ。天神を信ぜず、惡道の長を離れて、かしこ

にして命終して、かへりて善道に生ぜん。出略

【字解】一。斷常見 斷見、常見のこと。斷見とは、有情死すれば、斷滅して生ずることなしといふ見解にて、因果の理を知らぬ妄見である。常見とは、世界は永久不變、我身も死すれば再び生れて無窮に今の状態にて相續すと執する妄見。之を有(常)無(斷)の二見とも稱す。通常は上の如く解釋すれども、要するに人生觀上の謬れる積極、消極の兩極端主義にて、この二つの思想の範疇の中に、あらゆる内容を盛ることが出来るのである。

二。六波羅蜜 六度。大乘修道者の行。布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧。

【文科】 得敬品の文によりて、離邪の益を示し給ふ。

【講義】 『大方等大集月藏經』卷第五、諸惡鬼神得敬信品第八の上に言はく、釋尊大衆に告げ給ふやう、諸仁者よ、若し邪の見解を棄てるならば、十種の功徳を獲るであらう。十種の功徳とは何、

一には、心性おのづと柔軟になりて、善良思に滿され、從つて賢良なる伴侶と交るやうになる。二には、一切の事柄は因果の道理に從ふことを知る故に、我と業報に支配せらるることを信ずる。故に小は日常の些少事を慎むが、乃至命を奪はるとも、諸の罪惡を造ることはない、三には佛法僧の三寶を信じ敬ふ爲めに、天神を信じない。四には、佛法の因

果法に順ふ正しい見解をもつてゐる爲めに、年月日の吉凶禍福といふ如き迷信に煩はされることはない。五には、命終はるとも三惡道へ墮ちず、常に人間天上界に生を稟ける。六には、明かなる智慧と善良なる心をもつてゐる爲めに人々に讃譽られる。七には、心の行くべき眞實の一道が見える爲めに、人間天上の世俗事に執着せず、常に佛道を求めてやまぬやうになる。八には、思想の兩極端とも云ふべき、單なる否定の考へたる斷見、單なる肯定の考へたる常見の兩惡見を離れて、諸法因果の道理を信するに至る。九には、常に正しい信念と、正しい修道と、正しい見解の人々を友として、互に相集りて尊い會合をなす。十には、善良なる智慧を生むことが出来る。

衆生にして一度邪見を離るれば、かくの如き功徳を獲るのであるが。この善根を擧げて、賤しい欲情の満足等に須らずして、無上菩提を得んことを求めて、廻向すれば、此人は速に六度の行を圓に成就し、其住する國土は宛然にして善淨の佛土となり、そこに正覺を成じ、眞智を得るであらう。かくして其佛土に於いて如來の功徳智慧等のあらゆる善根を具へて、一切衆生を教化し、衆生をして其國に生れしめるであらう。彼等衆生は其教化に浴して、暴横なる偶像的な天神を信せず。又惡道に墮するの畏れを離れて、その國に命終る

とも、惡道に墮することなく、人天等の善趣に生じて、更に無上菩提に進むであらう。抄略

第二科 諸鬼神得敬品下の文

月藏經卷第六諸惡鬼神得敬信品第八下言佛出世甚難法僧亦復難衆生淨信難離諸難亦難哀愍衆生難知足第一難得聞正法難能修第一難得知難平等於世常受樂此十平等處智者常速知至乃爾時世尊於彼諸惡鬼神衆中說法時於彼諸惡鬼神衆中彼惡鬼神昔於佛法作決定信彼於後時近惡知識心見他過以是因緣生惡鬼神出略

【讀方】月藏經卷第六諸惡鬼神得敬信品第八の下にたまはく。佛の出世はなほ難し。法僧もまた難し。衆生の淨信もかたし。諸難を離るゝことまたかたし。衆生を哀愍することかたし。知足第一にかたし。正法をきくことを得ることかたし。よく修すること第一にかたし。難を知ることを得て、平等なれば、世において、つれに樂なう。この十平等處は智者つれに速にしらんと。至乃その時に世尊、かのもろくの惡鬼神衆の中にして、法を説きたまふ時に、彼の諸の惡鬼神衆の中においてか

の惡鬼神はむかし佛法において決定の信をなせしかども、彼のちの時に於て惡知識にちかづきて心に他の過をみる。この因縁をもて惡鬼神に生る。抄略

【字解】一、十平等 一は衆生平等、二は法平等、三は清淨平等、四は布施平等、三は戒平等、六、忍平等、七は精進平等、八は禪平等、九は智平等、十は一切法清淨平等。人もしこの十平等の心なうれば、生死海中にありて恒に勝報を享け、速に無畏の域に入ることを得ると説く。

【文科】得敬品の文によりて十平等法と惡鬼因を説き給ふ。

【講義】『大集月藏經』卷第六、諸惡鬼神得敬信品の第八下に言はく、如來世に出で給ふことは極めて難く、又眞實の法實僧寶の世にあることも六敷い。淨らかなる信仰を起すといふことも難ければ、佛道の妨げをなす様々の障礙を離れることも六敷い。衆生を心から哀愍することも難い。外物を追はず、我心に足ることを知りて満足することも難い。そして正しい教法を聞くことも難い。更に進んで其教へ通りに實修することは尙ほ困難である。修道上に於ける是等の困難を能く吞み込んで、而も極端の行動に出でず、偏頗の心を起さず。普通の法則に準じて道を修むれば、此惡縁多い世間に處しても、常に眞實の法樂を享受することが出来る。

是本經第五卷に説く所の十平等を重ねて廣説したる經文の一部であるが、この十平等處の至要なる所に就いては、道に進まんとする智者の、速に了知せねばならぬ所である。至爾時に大聖世尊は、其處に集れる諸の惡鬼神達の中にありて、法を説かれたが、其惡鬼神の中にゐた一惡鬼神は、昔佛法を深く信じてをつたのであるが、其後惡い知識（師友）に近いた爲めに、他人の罪惡を見るやうになつた。即ち他人の惡を心に見たといふことは他人の惡の中へ入つたのである。是が因縁となつて、惡鬼神界に生れたといふのである。惡教に従ふ時は、かくの如く惡果報を得る。惡知識には近いてはならぬことである。出略

第三科 諸天王護持品の一（問答）

大方等大集經卷第六月藏分中諸天王護持品第九言爾時世尊示世間故問娑婆世界主大梵天王言此四天下是誰能作護持養育時娑婆世界主大梵天王作如是言大德婆伽婆兜率陀天王共無量百千兜率陀天子護持養育北鬱單越他化自在天王共無量百千他化自在天子護持養育東弗婆提化樂天王共無量百千化樂天子護持養育南閻浮提須夜摩天王共無量百

千須夜摩天子護持養育西瞿陀尼

【讀方】大方等大集經卷第六、月藏分の中の諸天王護持品第九にのたまはく。そのときに世尊、世間を示すがゆへに、娑婆世界の主大梵天王に問てのたまはく。この四天下にこれ誰かよく御持養育をなすと、ときに娑婆世界の主大梵天王かくのこときの言をなさく。大德婆伽婆、兜率陀天王、無量百千の兜率陀天子とともに、北鬱單越を護持し養育せしむ。他化自在天王、無量百千の他化自在天子とともに、東弗婆提を護持し養育せしむ。化樂天王、無量百千の化樂天子とともに、南閻浮提を護持し養育せしむ。須夜摩天王、無量百千の須夜摩天子とともに、西瞿陀尼を護持し養育せしむ。

【字解】一。大梵天王 色界初禪天主、三界を司る。色界大梵天宮中の高樓閣中に住す。

二。婆伽婆 梵音ブハガワット (Bhagavat)、薄伽梵とも音譯す。世尊と譯す。佛は諸德を圓備して能く世間を利し、世間に尊重せらるゝ故に、この名あり。

三。兜率陀天王 欲界六欲天の第四兜率天主をいふ。兜率は梵音ツシマ (Tushita) 妙足、止足、知足等と譯す。

四。北鬱單越 梵音ウツマラクル (Uttarakuru) 北勝處と譯す。北鬱單越は梵漢並びあげたもの、北俱盧州と同じ。須彌四州の一。須彌山の北側にあり、形方座の如く、地盤他の三州に高出す。壽、一千年、中天なく、快樂極みなし。

五。他化自在天王 欲界六欲天の最高天主、故に第六天王ともいふ。即ち欲界の天主大梵王の、

とである。此界の天人は他人の變化する樂事を自分の樂とする能力ある故に此名あり。

六。東弗婆提 梵音ブールワーキデーハ (Puraviddha)、東勝身と譯す。須彌四州の一。東勝身州のこと。須彌山の東側にあり、地形は東狹西廣にして、縱廣九千由旬、人壽二百五十歳。

七。化樂天王 欲界六欲天の第五、樂變化天王のこと。この天界の特色とする所は、自ら五欲を變化して楽しむ所にある。故にこの名あり。

八。南閻浮提 梵音ガヤンブ、ドキーバ (Jambudvīpa) 穢樹城、勝金州、妙金土などと譯す。須彌山の南方に位し、地形南狹北廣にして縱廣七千由旬、樂は東北二州に劣るが、佛法を聞くに於いては本州を第一とすとせらる。もと印度に名けたものであるが、後、之を吾人の住する世界としたのである。

九。夜摩天王 欲界六欲天の第三夜摩天王のこと。須彌天王、熾覺天王、熾天王と稱せらる。梵音ヤ (Yama) 善時、時分と譯す。この天人は時々口に快樂を唱ふる故にこの名あり。

一〇。西瞿陀尼 梵音アパラゴデーナ、又はゴードハキヤ (Aparagodhana or Gোধanya) パラは西、他は牛貨、西牛貨と譯す。須彌四州の一。須彌山の西に位し、形滿月の如く、縱廣八百由旬、人壽五百歳。

【文科】護持品の文によりて、空居四天王の佛法の爲めに須彌四州を守護しつゝあることを明し給ふ。

【講義】【讀方】と等しきによりて略す。

大德婆伽婆毘沙門天王共無量百千諸夜叉衆護持養育北鬱單越提頭賴吒天王共無量百千乾闥婆衆護持養育東弗婆提毘樓勒又天王共無量百千鳩槃荼衆護持養育南閻浮提毘樓博又天王共無量百千龍衆護持養育西瞿陀尼

【讀方】大德婆伽婆、毘沙門天王、無量百千の諸夜叉衆とともに、北鬱單越を護持し養育せしむ。提頭賴吒天王、無量百千の乾闥婆衆とともに東弗婆提を護持し養育せしむ。毘樓勒又天王、無量百千の鳩槃荼衆とともに南閻浮提を護持し養育せしむ。毘樓博又天王、無量百千の龍衆とともに、西瞿陀尼を護持し養育せしむ。

【字解】一。夜叉 梵音ヤクシャ (Yakṣa) 勇健、暴惡と譯す。八部衆の一。虚空を飛行する天夜叉、地を行く地夜叉の別あり。

二。提頭賴吒天王 梵音ドフリタラシニムラ (Dhṛtarāṣṭra) 持國天王のこと。四天王の一。上五七三頁を看よ。

三。毘樓勒天王 梵音クムブハーンダス (Vīrūhaka) 增長天王のこと。四天王の一。上五七三頁を看よ。

四。鳩槃荼 梵音クムブハーンダス (Kumbhāṇḍas) 陰囊、形卵と譯し。厭眉鬼、冬瓜鬼と名く。人の精氣を吸ふ鬼の名。上五七三頁を看よ。

五。毘樓博又天王 梵音ワイルマクシヤ (Vīrūpakṣi) 廣目天王のこと。四天王の一。上五七三頁を看よ。

【講義】略

【文科】地居四天王の佛法の爲めに須彌四州を護持することを明す一段である。

大德婆伽婆天仙七宿三曜三天童女護持養育北鬱單越彼天  
 仙七宿者虛危室壁奎婁胃三曜者鎮星熒惑星三天童女  
 者鳩槃彌那迷沙大德婆伽婆彼天仙七宿中虛危室三宿是鎮  
 星土境鳩槃是辰壁奎二宿是熒惑星土境彌那是辰婁胃二宿是  
 熒惑土境迷沙是辰大德婆伽婆如是天仙七宿三曜三天童女  
 護持養育北鬱單越大德婆伽婆天仙七宿三曜三天童女護持  
 養育東弗婆提彼天仙七宿者昂畢皆參井鬼柳三曜者太白星  
 歲星月三天童女者毗利沙彌倫那羯迦吒迦大德婆伽婆彼天  
 仙七宿中昂畢二宿是太白土境毘利沙是辰皆參井三宿是歲  
 星土境彌倫那是辰鬼柳二宿是月土境羯迦吒迦是辰大德婆  
 伽婆如是天仙七宿三曜三天童女護持養育東弗婆提大德婆

伽婆天仙七宿三曜三天童女護持養育南閻浮提彼天仙七宿  
 者星張翼軫角亢氐三曜者日辰星太白星三天童女者線訶迦  
 若兜羅大德婆伽婆彼天仙七宿中星張翼是日土境線訶是辰  
 軫角二宿是辰星土境迦若是辰亢氐二宿是太白土境兜羅是  
 辰大德婆伽婆如是天仙七宿三曜三天童女護持養育南閻浮  
 提大德婆伽婆彼天仙七宿三曜三天童女護持養育西瞿陀尼  
 彼天仙七宿者房心尾箕斗牛女三曜者熒惑星鎮星三天  
 童女者毘離支迦檀兜婆摩伽羅大德婆伽婆彼天仙七宿中房  
 心二宿是熒惑土境毘離支迦是辰尾箕斗三宿是熒惑星土境檀  
 兜婆是辰牛女二宿是鎮星土境摩迦羅是辰大德婆伽婆如  
 是天仙七宿三曜三天童女護持養育西瞿陀尼

【讀方】大德婆伽婆、天仙の七宿、三曜、三天童女、北鬱單越を護持し養育せしむ。か得天仙の七宿は虛危室壁奎婁胃なり。三曜は鎮星熒惑星なり。三天童女は鳩槃彌那迷沙なり。大德婆伽婆、か得天仙の七宿のなかに、虛危室の三宿はこれ鎮星の土境なり。鳩槃はこれ辰なり。壁奎

の二宿はこれ歳星の土境なり。彌那はこれ辰なり。婁胃の二宿はこれ癸惑の土境なり。速沙はこれ辰なり。大徳婆伽婆、かくのごとき天の七宿、三曜、三天童女、北魁單越を護持し養育せしむ。大徳婆伽婆、天の七宿、三曜、三天童女、東弗菩提を護持し養育せしむ。かの天の七宿は、昴、畢、觜、參、井、鬼、柳なり。三曜は太白、星、歳、星、月なり。三天童女は毗利沙、彌那、羯迦吒迦なり。大徳婆伽婆、かの天の七宿のなかに、昴畢の二宿はこれ太白の土境なり。毗利沙はこれ辰なり。觜參井の三宿はこれ歳星の土境なり。彌那は、これ辰なり。鬼柳の二宿はこれ月の土境なり。羯迦吒迦はこれ辰なり。大徳婆伽婆、かくのごとき天の七宿、三曜、三天童女、東弗菩提を護持し養育せしむ。大徳婆伽婆、天の七宿、三曜、三天童女、南閻浮提を護持し養育せしむ。かの天の七宿は、星、張、翼、軫、角、亢、氐なり。三曜は日辰星太白星なり。三天童女は線訶、迦若、兜羅なり。大徳婆伽婆、かの天の七宿のなかに、星張翼はこれ日の土境なり。線訶はこれ辰なり。軫角の二宿はこれ辰星の土境なり。迦若はこれ辰なり。亢氐の二宿はこれ太白の土境なり。兜羅はこれ辰なり。大徳婆伽婆、かくのごとき天の七宿、三曜、三天童女、西瞿陀尼を護持し養育せしむ。大徳婆伽婆、かの天の七宿、三曜、三天童女、四瞿陀尼を護持し養育せしむ。かの天の七宿は、房、心、尾、箕、斗、牛、女なり。三曜は癸惑星、歳星、鎮星なり。三天童女は毗離支迦、檀婆婆、摩迦羅なり。大徳婆伽婆、かの天の七宿のなかに房心の二宿はこれ癸惑の土境なり。女は毗離支迦、檀婆婆、摩迦羅なり。大徳婆伽婆、かの天の七宿のなかに房心の二宿はこれ癸惑の土境なり。毗利支迦はこれ辰なり。尾箕斗の三宿はこれ歳星の土境なり。檀婆婆はこれ辰なり。牛女の二宿はこれ鎮星の土境なり。摩迦羅はこれ辰なり。大徳婆伽婆、かくのごとき天の七宿、三曜、三天童女、四瞿陀尼を護持し養育せしむ。

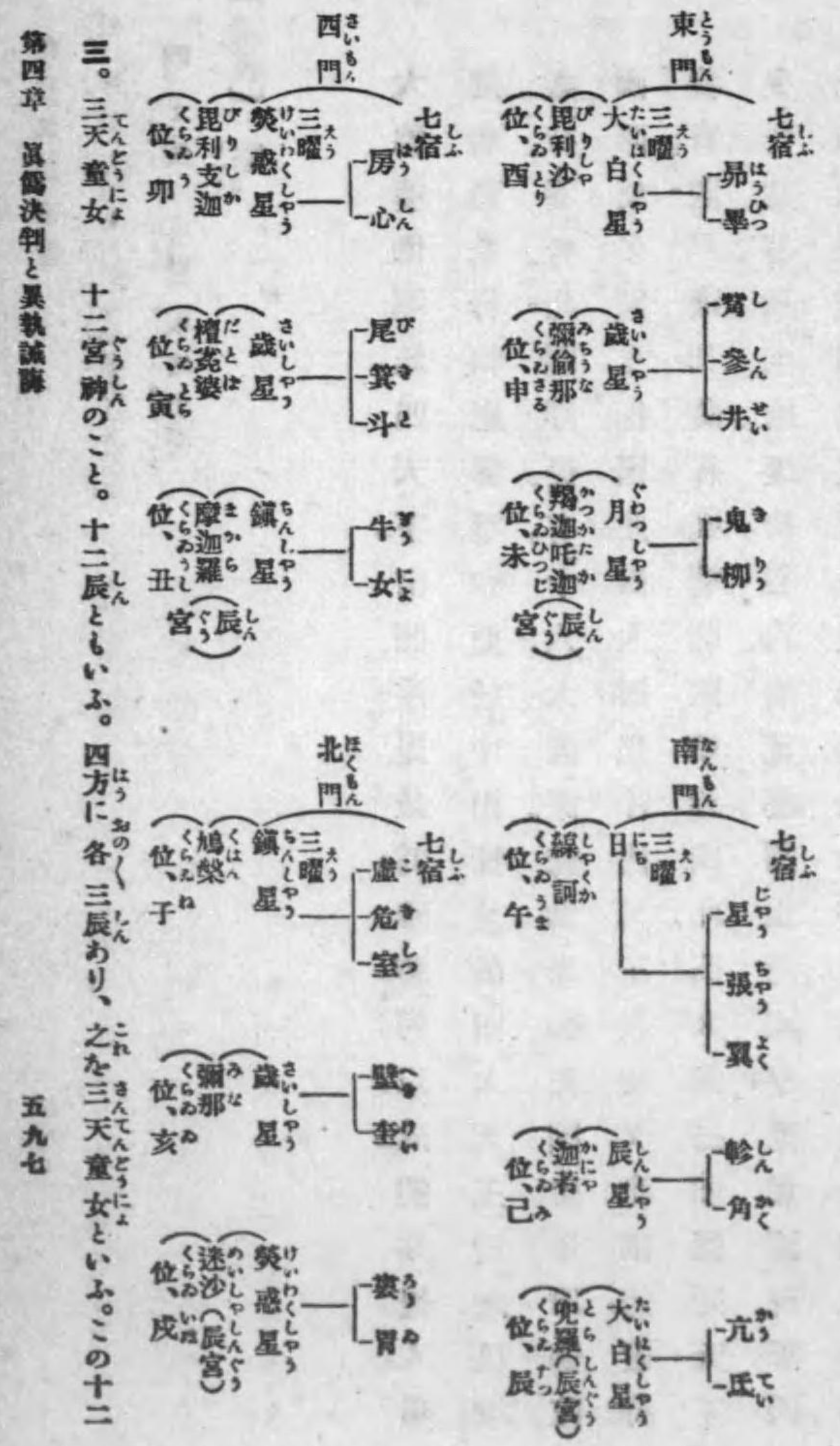
護持し養育せしむ。

【字解】一。天仙

味盧風吒仙人をいふ。此仙人が初めて是等の星宿辰を配置したるにより「天仙

の七宿」といふ。

二。三曜、七宿、三天童女の四方配置の圖。



三。三天童女

十二宮神のこと。十二辰ともいふ。四方に各三辰あり、之を三天童女といふ。この十二



長は皆天女であるから此名あり。

四。土境 分野、境域の意。

【講義】 略

大德婆伽婆此四天下南閻浮提最爲殊勝何以故閻浮提人勇健聰慧梵行相應佛婆伽婆於中出世是故四大天王於此倍增護持養育此閻浮提有十六大國謂憍伽摩伽陀國傍伽摩伽陀國阿槃多國支提國此四大國毘沙門天王與夜叉衆圍遼護持養育迦尸國都薩羅國婆蹉國摩羅國此四大國提頭賴吒天王與乾闥婆衆圍遼護持養育鳩羅婆國毘時國槃遮羅國疎那國此四大國毘樓勒叉天王與鳩槃荼衆圍遼護持養育阿濕婆國蘇摩國蘇羅吒國甘滿闍國此四大國毘樓博叉天王與諸龍衆圍遼護持養育

【讀方】大德婆伽婆、この四天下に南閻浮提はとも殊勝なりとす。何を以てのゆへに、閻浮提の人は勇健

聰慧にして、梵行相應す。婆伽婆、なかにおいて出世したまふ。このゆへに四大天王に倍増してこの閻浮提を護持し養育せしむ。十六の大國あり。いはく憍伽摩伽陀國、傍伽摩伽陀國、阿槃多國、支提國、この四の大國をば毘沙門天王、夜叉衆と圍繞して護持し養育せしむ。迦尸國、都薩羅國、婆蹉國、摩羅國、この四の大國をば提頭賴吒天王、乾闥婆衆と圍繞して護持し養育せしむ。鳩羅婆國、毘時國、槃遮羅國、疎那國、この四の大國をば毘樓勒叉天王、鳩槃荼衆と圍繞して護持し養育せしむ。阿濕婆國、蘇摩國、蘇羅吒國、甘滿闍國、この四の大國をば毘樓博叉天王、もろくの龍衆と圍繞して護持し養育せしむ。

【文科】 四天王が南閻浮提を佛法流通の地として特別に護持することを明し給ふ一段。

【講義】 大德世尊よ、此東西南北の須彌四州の中に南閻浮提は一番勝れてをります。何故かと申しますれば、閻浮提の人々は其性勇健にして智慧聰し、淨行を修めるに適してをります。即ち如來はこの國に御出世になりて衆生を化益し給ふものである。夫でありますから、四方の大天王も一層力を籠めて此閻浮提の人々を護持し、養育することでありま

す(以下略)  
大德婆伽婆過去、天仙護持養育此四天下故亦皆如是分布安置於後隨其國土城邑村落塔寺園林樹下塚間山谷曠野河泉

波泊乃至海中寶洲天祠於彼卵生胎生濕生化生諸龍夜叉羅  
利餓鬼毘舍遮富單那迦吒富單那等生於彼中還住彼處無所  
繫屬不受他教是故願佛於此閻浮提一切國土彼諸鬼神分布  
安置爲護持故爲護護一切諸衆生故我等於此說欲隨喜

【讀方】大德婆伽婆、過去の天仙この四天下を護持し養育せしむ。かるがゆへに亦かくの如く分布安置せしむ。後においてその國土、城邑、村落、塔寺、園林、樹下、塚間、山谷、曠野、河泉、波泊、乃至海中寶洲天祠にしたがひて、かの卵生、胎生、濕生、化生においてもろゝの龍、夜叉、羅刹、餓鬼、毘舍遮、富單那、迦吒富單那等、かの中に生じて、かのところに遷住して、繫屬するところなし。他の教をうけず、このゆへにねがはくは佛、この閻浮提の一切國土において、かのもろゝの鬼神分布し安置して、護持のための故に、一切のもろゝの衆生を護らんがための故に、我等この説において隨喜せんとおもふと。

【字解】一。羅刹 梵音ラークシヤサ (Rakshasa) 可畏、護者、食人鬼と譯す。惡鬼の通名。  
二。餓鬼 三途、三惡趣、六道の一。此界の有情は、常に飢饉に苦む故に此名あり。地下五百由旬の餓鬼の界邊を本處とす。  
三。毘舍遮 敵人精氣鬼と譯す。東方天王の領する鬼神。  
四。富單那 臭餓鬼と譯す。熱病を司る鬼神。

五。迦吒富單那 奇臭餓鬼と譯す。

【文科】新に生れた有情を護持することを、梵王が世尊に請ひ奉る一段である。かくの如く有情は無窮に産れ、諸天は無窮に護りて佛法を信ぜしむるのである。

【講義】大德、世尊よ、過去の天仙法盧虱叱は此四天下を護持し養育して、人々に佛法を信せしめんが爲めに、かやうに星宿、諸天、鬼神を分布し、配置したことでありますが其後、卵生、胎生等の四生から生れたる諸龍、夜叉等の類が、國土、城邑、乃至海中の寶島、天祠等に再び住ふことになつたが、何の天神等にも屬してをらないので、他から指導を受け又は保護を受けるといふことはありませぬ故、どうぞ世尊よ、此閻浮提のあらゆる國土に行き亘るやうな、諸の善鬼神を適宜に配屬して下さい。其一切の有情を護持る爲めに。私共は夫が宜しいと存じてをりまする。

佛言如是、大梵如汝所說、爾時世尊欲三重明此義、而說偈言、示現世間、故導師問梵王於此、四天下誰護持養育如是、天師梵諸天王爲首、兜率他化天化樂須夜摩能護持養育如是、四天下四王

及眷屬亦復能護持二十八宿等及以十二辰十二天童女護持四天下隨其所生處龍鬼羅刹等不受他教者還於彼作護天神等差別願佛令分布憐愍眾生故熾然正法燈

【讀方】佛のたまはく。是の如し、大梵、なんぢが所説のこととす。その時に世尊、重れてこの義を明さんとおぼして、しかも偈をときてのたまはく。

世間に示現するがゆへに、導師梵王にとはま。この四天下において、たれか護持し養育せん。是のとき天師梵諸天王を首として、兜率、他化天、化樂、須夜摩、よくかくの如きの四天下を護持し養育せしむ。四王および眷屬、またよく護持せしむ。二十八宿等および十二辰、十二天童女、四天下を護持せしむ。その所生のところに隨ひて、龍、鬼、羅刹等他の教をうけずば、彼にかへりて護をなさしめん。天神等、差別して願じて佛分布せしめたまへり。衆生を憐愍するがゆへに正法の燈を熾然ならしむと。

【文科】佛、梵王の請を印可し、重れて偈を説き給ふ。

【講義】佛宜給はく、其通りである。大梵天よ、汝の云ふ通りに相違ない。

爾時、釋迦牟尼世尊は、重ねて上の事柄を明かさんが爲めに偈を説かれた。

我、佛としてこの世に示現れた爲めに、梵王に問ふ、此四天下を護持り長養ふ者は誰ぞや。曰く天界の師たる梵王諸天王を初め、兜率、他化、化樂、須夜摩等の諸天王ぞ、四王

天主及び其眷屬、進んでは二十八宿、十二辰、十二天童女と共に四天下を護持り且つ長養ふ。更に其生れた處により、他に配屬せず他の指導を受けない諸龍鬼神の類についても、また其處に於いて、上の諸天部は護持りをなす。是れ即ち天神等の願ひにして、如來の適宜に應じて分布配屬し給ふ所である。そは衆生を洩れなく憐愍みて遺憾なきやうに、又熾なる正法の燈びを高くかゝげて、濁世の迷暗を拂はんが爲めに。

第四科 諸天王護持品の二(付囑)

爾時佛告二月藏菩薩摩訶薩言了知清淨土此賢劫初人壽四萬歲時鳩留孫佛出與於世彼佛爲無量阿僧祇億那由他百千衆生廻生死輪轉正法輪追廻惡道安置善道及解脫果彼佛以此四大天下付囑娑婆世界主大梵天王他化自在天王化樂天王兜率陀天王須夜摩天王等護持故養育故憐愍他衆生故令三種不斷絕故燃然地精氣衆生精氣正法精氣久住增長故令諸衆生休息三惡道故趣向三善道故以四天下付囑大梵及諸天王如是漸次劫盡諸天人盡一切善業白法盡滅增長大惡

諸煩惱濁

人壽三萬歲時拘那含牟尼佛出興於世彼佛以此四大天下付囑娑婆世界主大梵天王他化自在天王乃至四大天王及諸眷屬護持養育故乃至令一切衆生休息三惡道趣向三善道故此四大天下付囑大梵及諸天王如是次第劫盡諸天人盡白法亦盡增長大惡諸煩惱濁

人壽二萬歲時迦葉如來出興於世彼佛以此四大天下付囑娑婆世界主大梵天王他化自在天王化樂天王兜率陀天王須夜摩天王憍尸迦帝釋四天王等及諸眷屬護持養育故乃至令一切衆生休息三惡道趣向三善道故彼迦葉佛以此四大天下付囑大梵四天王等及付諸天仙衆七曜十二天童女二十八宿等護持故養育故

了知清淨土如是次第至今劫濁煩惱濁衆生濁大惡煩惱濁聞淨惡世時人壽百歲一切白法盡一切諸惡闍翳世間譬如海水

一味大鹹大煩惱味遍滿於世集會惡黨手執鬪體血塗其掌共相殺害如是惡衆生中我今出世菩提樹下初成正覺受提謂波利諸商人食爲彼等故以此閻浮提分布天龍乾闥婆鳩槃荼夜叉等護持養育故

以是大集十方所有佛土一切無餘菩薩摩訶薩等悉來集此乃至於此娑婆佛土其處百億日月百億四天下百億四大海百億鐵圍山大鐵圍山百億須彌山百億四阿修羅城百億四大天王百億三十三天乃至百億非想非非想處如是略數娑婆佛土我於是處而作佛事乃至於娑婆佛土所有諸梵天王及諸眷屬魔王他化自在天王化樂天王兜率陀天王須夜摩天王帝釋天王四大天王阿修羅王龍王夜叉王羅刹王乾闥婆王緊那羅王迦樓羅王摩睺羅伽王鳩槃荼王餓鬼王毘舍遮王富單那王迦吒富單那王等悉將眷屬於此大集爲聞法故乃至於此娑婆佛土所有諸菩薩摩訶薩等及諸聲聞一切無餘悉來集此爲聞法

故我今爲此所集大衆、顯示甚深佛法、復爲護世間、故以此閻浮提所集鬼神分布安置、護持養育。

【讀方】そのとき、佛、月滿菩薩摩訶薩につけてのたまはく。清淨土を了知するに、この賢劫のはじめ人壽四萬歳のとき、鳩留孫佛世に出興したまひき。かの佛、無量阿僧祇億那由他百千の衆生のために、生死に廻して正法輪を輪轉せしむ。追うて惡道に廻して、善道および解脱の果を安置せしむ。かの佛、この四大天下をもて、娑婆世界の主大梵天王、他化自在天王、化樂天王、兜率陀天王、須夜摩天王等に付屬せしむ。護持のゆへに、養育のゆへに、他の衆生を憐愍するがゆへに、三寶の種をして斷絶せざらしめんがゆへに、熾然ならんがゆへに、地の精氣、衆生の精氣、正法の精氣、ひさしく住し增長せんがゆへに、もろくの衆生をして三惡道を休息せしめんがゆへに、三善道に趣向せんがゆへに、四天下をもて大梵およびもろくの天王に付屬せしむ。かくのごとく漸次に切つき、もろくの天人つき、一切の善業白法つき滅して、大惡もろくの煩惱濁を増長せん。

人壽三萬歳のとき、拘那含牟尼佛世に出興したまふ。かの佛、この四天下をもて、娑婆世界の主大梵天王、他化自在天王、乃至四大天王およびもろくの眷屬に付屬したまふ。護持養育のゆへに、乃至一切衆生をして三惡道を休息して、三善道に趣向せしめんがゆへに、この四天下をもて、大梵およびもろくの天王に付屬したまへり。かくのごとく次第に切つき、もろくの天人つき、白法またつき、大惡もろくの煩惱濁を増長せん。

を増長せん。

人壽二萬歳のとき、迦葉如来世に出興したまふ。かの佛、この四天下をもて、娑婆世界の主大梵天王、他化自在天王、化樂天王、兜率陀天王、須夜摩天王、憍尸迦帝釋、四天王等、およびもろくの眷屬に付屬したまへり。護持養育のゆへに、乃至一切衆生をして三惡道を休息して、三善道に趣向せしめんがゆへに、かの迦葉佛よく四天下をもて、大梵四天王等に付屬し、およびもろくの天仙衆、七曜、十二天童女、二十八宿等につけたまへり。護持のゆへに、養育のゆへに。

清淨土を了知するに、かくのごとく次第に、初濁、煩惱濁、衆生濁、大惡煩惱濁、閻浮惡世の時、人壽百歲にいたりて、一切の白法つき、一切の諸惡闍難ならん。世間はたとへば海水の一味にして、大鹹なるがごとし。大煩惱の味はひ世に遍滿せん。集會の惡黨、手に觸體をとり、血をその掌にぬらん。ともにあひ殺害せん。かくのごとく惡衆生の中に、われいま菩提樹下に出世して、はじめて正覺をなれり。提謂波利、もろくの商人の食を受けて、彼等がためのゆへに、この閻浮提をもて天、龍、乾闥婆、鳩槃荼、夜叉等に分布せしむ。護持養育のゆへに。

これをもちて大いに十方所有の佛土一切無餘の菩薩摩訶薩等を集めて、ことごとくに來集せしめ、乃至この娑婆佛土にして、そのと、そのの百億の日月、百億の四天下、百億の四大海、百億の鐵圍山、大鐵圍山、百億の須彌山、百億の四阿修羅城、百億の四大天王、百億の三十三天、乃至百億の非想非非想處、是のごとく數を略せり。娑婆佛土われこのと、このにしてしかも佛事をなす。乃至娑婆佛土の諸有のもろくの梵

天王おまびよろくの眷屬、覺天王、他化自在天王、化樂天王、兜率陀天王、須夜摩天王、帝釋天王、四大天王、阿修羅王、龍王、夜叉王、羅刹王、乾闥婆王、緊那羅王、迦樓羅王、摩睺羅伽王、鳩槃荼王、餓鬼王、毗舍遮王、富單那王、迦吒富單那王等、ことごとくまさしく眷屬を將めて、こゝに大集せり。法を聞かんがためゆへに。乃至こゝに娑婆佛土に所有のよろくの菩薩摩訶薩等、おまびよろくの聲聞、一切餘なくことごとくこゝに來集せり。聞法のためゆへに。我いまこの所集の大衆のために、甚深の佛法を顯示せしむ。また世間を護らんがためゆへに、この閻浮提所集の鬼神をもて分布安置し、護持養育せん。

【字解】一。鳩留孫佛 梵音クラクナエマムダ (Kṛakucānta) 所應闍已闍と譯す。賢劫千佛の第一過去七佛の第四。人壽四萬歳の時、安和城に生れ、尸利沙樹下に成道して説法度生す。

二。善道 ことごとく人間、天上のこと。

三。地精氣 五穀のこと。

四。衆生精氣 衆生の福力のこと。

五。正法精氣 三寶のこと。

六。拘那含牟尼佛 梵音カナカムニ (Kanakamuni) 金山人と譯す。賢劫千佛の第二、過去七佛の第五。人壽三萬歳の時、清淨城に生れ、優曇鉢羅樹下に成道して説法度生せらる。

七。迦葉如來 梵音カーシヤマ (Kāśyapa) 欽光と譯す。賢劫千佛の第三。過去七佛の第六。人壽二萬歳の時、波羅奈城に生れ、尼拘樓陀樹下に成道して説法度生す。

八。橋尸迦 梵音カーウシカ (Kāśika) 帝釋天の姓。

九。提謂波利 村名。

一〇。乾闥婆 梵音ガンドハマ (Gandharva) 健達縛、彦達縛とも音譯す。尋香神、食香神等と稱す。帝釋の俗樂神にして須彌山の南、金剛窟中に居り、酒肉を喰はず、唯香のみを取りて食とす。

【文科】過去の四佛が娑婆世界護持の付囑をなせる歴史を説き給ふ。

【講義】爾時、佛、月藏菩薩大菩薩に告げ給ふやう。今この清淨なる國土（如來は御心清きが故に其國土も清し、故に此名なり）の歴史を考へて見るに、此賢劫の初め人壽四萬歳の時に、賢劫千佛の第一拘留孫佛が御出世になり、阿僧祇億、那由他百千といふ無量の衆生の爲めに正法の輪を轉らして邪見を摧き、惡道に赴く衆生を導いて、人天の果報或は三乘の聖果を獲せしめ給ふ。更に此み佛は、此四天下をあげて、大梵天王乃至須夜摩天王等に依託せられた。夫は外の事ではない。佛世に生れられたる他の衆生を護持り養育ひ、憐み給ふ爲めである。即ち佛法僧三寶の種をして彼等の胸に植ゑしめ、長へに絶えぬやうにし、長へに熾んならしめ、地の精氣たる五穀、衆生の精氣たる聞法の福力、正法の精氣たる三法をして、長へに此地に住せしめ彌榮えに榮えしめ、かくて一切衆生の心より三

惡道の因種を奪ひ取りて、再び此等惡道の門を塞ぎ、常に人天修羅の三善道に生せしめて佛道を修めしめんが爲めに、此四天下をあげて大梵天王等に付屬し給ふものである。されば衆生は唯三寶を念じて道を修むるがよい。一切の鬼神は佛の依託を受けて居る爲めに、祈らずとも獲ることである。

かくて次第に切時移り、諸天人の果報衰へ、あらゆる善業の力盡き、日没みて暗黒の世を覆うやうに、諸の大惡業、煩惱の劫水は、澎湃として一切世間の人々を溺らすやうになつた。(下略)

更に熟この清淨なる國土の歴史を考へ見るに、劫波幾度も移りて、今や時代(劫)は濁り、衆生の煩惱は増し、衆生の機根は衰へ、驚くべき罪惡は到る處に起り、鬪諍は惡獸の如く烈しくなるの時、即ち人壽の百歳の時代に至つてあらゆる善といふ善は滅び盡され、あらゆる惡業の間は擴りて此世を覆うであらう。そはかの四大海水の何處を嘗めても鹹いやうに、此大煩惱の力も一の強大なるものとなつて世界に満ちみち、集れる人々は惡鬼に魅かれたやうに狂ひまわり、手に／＼生血したる敵の鬪體を提げて、兩手を紅に染め、さながら羅刹のやうに人を見れば互に殺し合ふであらう。

我は實にかやうな濁惡の衆生の中に出世して、菩提樹下に正覺を開き、提謂波利村の商人達の供養によりて心身の力を増し、進んで一切衆生の爲めに此閻浮提をあげて、天龍、乾闥婆、鳩槃荼、夜叉に依屬して夫々配屬し、長へに護持らしめ、懇に養育はしむることである。(下略)

爾時世尊復問娑婆世界主大梵天王言過去諸佛以此四大天下曾付囑誰令作護持養育時娑婆世界主大梵天王言過去諸佛以此四天下曾付囑我及憍尸迦令作護持而我有所失不彰己名及帝釋名但稱諸餘天王及宿曜辰護持養育爾時娑婆世界主大梵天王及憍尸迦帝釋頂禮佛足而作是言大德婆伽婆大德修伽陀我今謝過我如小兒愚癡無智於如來前不自稱名大德婆伽婆唯願容恕大德修伽陀唯願容恕諸來大衆亦願容恕我於境界言說教令得自在處護持養育乃至令諸衆生趣善道故我等曾於鳩留孫佛已受教勅乃至令三寶種已作熾然拘那

含牟尼佛迦葉佛所我受教勅亦如是於三寶種已勤熾然地精  
 氣衆生精氣正法味醍醐精氣久住增長故亦如我今於世尊所  
 頂受教勅於己境界言說教令得自在處休息一切闍諍飢饉乃  
 至令三寶種不斷絕故三種精氣久住增長故遮障惡行衆生護  
 養行法衆生故休息衆生三惡道趣向三善道故爲令佛法得久  
 住故勤作護持

【讀方】そのときに世尊、また娑婆世界の主大梵天王に問てのたまはく、過去の諸佛、この四大天下をもつて曾て誰に付屬してか、讀持養育をなさしめたまふ。ときに娑婆世界の主大梵天王まふさく、過去の諸佛この四天下をもつて曾てわれおよび憍尸迦に付屬したまへりき。讀持をなさしめて、而もわれ失ありや。己が名および帝釋の名をあらはさす。たゞ諸餘の天王および宿曜辰を稱せしむ。讀持養育すべしと。そのときに娑婆世界の主大梵天王および憍尸迦帝釋、佛足を頂禮して、しかもこの言をなさく、大德婆伽婆、大德修伽陀、われ今過を謝すべし。われ小兒のごとくして愚痴無智にして、如來の前にして自ら稱名せざらんや。大德婆伽婆、や、願はくば容恕したまへ。大德修伽陀、や、願はくば容恕したまへ。諸來の大衆また願はくば容恕したまへ。われ境界において言說教令す。自在のころをえて讀持養育すべし。乃至もろくの衆生をして善道に趣かしめんが故に、我等むかし地留孫佛のみもとにして、すでに教勅をうけたまはり、乃至三寶の種をしてすでに熾然ならしむ。拘那含牟尼佛、迦葉佛のみもとにして、われ教勅をうけたまはりしこと、亦かくの如し。三寶の種においてすでに勤にして熾然ならしむ。地の精氣、衆生の精氣、正法の味ひ、醍醐の精氣、ひさしく住し、增長せしむるが故に、亦わが如きもいま世尊の所にして教勅を頂受し、おのれが境界において言說教令す。自在のころをえて一切闍諍飢饉を休息せしめ、乃至三寶の種をして斷絶せざらしむるがゆへに、三種の精氣ひさしく住して增長せしむるが故に、惡行の衆生を遮障して行法の衆生を護養するが故に、衆生の三惡道を休息せしめ、三善道に趣向するがゆへに、佛法をしてひさしく住することを得しめんがための故に、ねんころに讀持をなすと。

【字解】一、修迦陀 梵音スカマ(Siddhi)。佛十號の一。善逝、好去、妙往と譯す。佛は無量の智慧を以つて諸々の惑を斷じ、善妙に果上に趣く故に此名あり。

二、醍醐精氣 醍醐は五味の最上、牛乳を最も精製したるもの、こゝでは眞實純一の意にして佛法をいふ。

【文科】梵王、世尊の御前に進み自ら佛法の爲め此國土を護らんことを誓ふ。

【講義】爾時、世尊復重ねて娑婆世界の主大梵天王に問はる、やう、梵王よ、過去の諸佛は、此四天下を何人に護持すること、養育することを付屬したのであるか。大梵王答へて「過去の諸佛は、嘗つて私と帝釋天に、此四天下を護るやうにと御依託になりました。然るに



今世尊は此天下を付囑したまふに、何か私達に過失があるとお思召してか、私と帝釋天を指定し給ふことなく、餘の天王、宿曜等の名をあげて、護持、養育を委ね給ふかやうに申し上げて、梵王、帝釋の兩人は起つて佛足を頂禮し上り、申し上げるやう

大徳世尊善逝の佛陀よ、若し私共に過失がありますならば、此處に御詫び申します。世尊よ、吾等は小兒の如く愚癡にして智慧なきが爲めに、此付囑に預ることを得ず、如來の御前に於いて、自ら「私共は此處に居ります。仰せ下さる御仕事あらば、いつにても」と申すことが出来ないのでありますか。どうして私共は他の天王と等しく御付囑に選ばれることが出来ないのでしょうか。

大徳世尊よ、願くば此禮しらぬ愚なる者の申出でを容恕して下さい。世尊よ、願くば容恕して下さい。此處に集られた大衆の方々も亦御容恕して下さい。申すも嗚呼がましいことであるが、私共は自分々の自在に支配する領分に於いては、よく言説をても教令を垂れ常に護持り養育うことを疎にいたしては居りませぬ。乃至、夫は畢竟諸の衆生を導いて惡道を離れて、修道の便宜ある人天等の善道に生れさせたいといふ願望の外はありませぬ。私共は曾し拘留孫佛の許にありて、已に教敎を受けまつり、四天下を護り、乃至三寶の種を

して益熾然ならしむるやうに力を盡しました。又拘那含牟尼佛、迦葉佛の許にあつても等しく教敎を受け奉り、勤に三寶の種を長養うて熾然ならしめ、五穀を豊かにし、衆生の福力を増し、正法の味ひたる佛法の眞精神をして、長へに榮えゆくやうに力を致したことです。夫でありますから、今亦不肖の身をもつて、大徳世尊の御出世に逢ひ、其御前にありて過去の諸佛に於ける如く教敎を頂きたいことでもあります。かくて私共の權力の及ぶ境地に於いて、言説をもつて教令を垂れ、自在に其教を實現せしめ、一切の闘諍と飢饉の恐れを除き、乃至三寶の因種を養うて斷絶しめることなく、地の精氣等の三種の精氣をして長へに榮えしめる爲めに、又惡を行ふ衆生を制して其惡行を遮障め、教法の如く實修する衆生を護り育てんが爲めに、又衆生をして三惡道に墮する恐れを除き、天上人間修羅の三善道に趣かしむる爲めに、かくして此世尊の御教へをして長へに此世界に流布せしめんが爲めに、私共も大法護持の重任を忝うして、どこ迄も修道の人々を護り育てんことを願うて已まぬものであります。

佛言善哉善哉妙丈夫汝應如是爾時佛告三百億大梵天王言所

有行法住法順法厭捨惡者今悉付囑汝等手中汝等賢首於百億四天下各境界言說教令得自在處所有衆生弊惡癩瘡惱害於他無有慈愍不觀後世畏觸惱利利心及婆羅門毘舍首陀心乃至觸惱畜生心如是一作殺生因緣乃至作邪見因緣隨其所作非時風雨乃至令地精氣衆生精氣正法精氣作損減因緣者汝應遮止令住善法若有衆生欲得善者欲得法者欲度生死彼岸者所有修行檀波羅蜜者乃至修行般若波羅蜜者所有行法住法衆生及爲行法營事者彼諸衆生汝等應當護持養育若有衆生受持讀誦爲他演說種種解說經論汝等當與彼諸衆生念持方便得堅固力入所聞不忘智信諸法相令離生死修八聖道三昧根相應若有衆生於汝境界住法奢摩他毘婆舍那次第方便與諸三昧相應勤求修習三種菩提者汝等應當遮護攝受勸作捨施勿令乏少若有衆生施其飲食衣服臥具病患因緣施湯藥者汝等應當令彼施主五利增長何等爲五一者壽增長二者

財增長三者樂增長四者善行增長五者慧增長汝等長夜得三利益安樂以是因緣汝等能滿六波羅蜜不久得成一切種智

【讀方】佛のたまはく。善哉よいか。妙丈夫なんぢ是のことなるべしと。そのときに佛、百億の大梵天王につけてのたまはく。所有の行法、法に住し法に順じて惡を厭捨せんものは、いま悉く汝等が手のうちに附屬す。なんぢら賢首、百億の四天下各々の境界において言說教令す。自在のこころをえて、所有の衆生弊惡癩瘡惱害他において慈愍あることなし。後生の長を觀ぜずして、利利の心および婆羅門毘舍首陀の心を觸惱せん。乃至畜生の心を觸惱せん。かくのごとし。殺生をなす因縁、乃至邪見をなす因縁、その所作にしたがひて非時の風雨あらん。乃至地の精氣、衆生の精氣、正法の精氣、損減の因縁をなさしめば、なんぢ遮止して善法に住せしむべし。もし衆生ありて善を得んと欲はんもの、法を得んと欲はんもの、生死の彼岸に度せんと欲はんもの、檀波羅蜜を修行すること有らん所のもの、乃至般若波羅蜜を修行せんもの、所有の行法、法に住せん。衆生および行法のために事を營まんもの、かのもの、の衆生、なんぢにまさきに護持養育すべし。もし衆生ありて受持讀誦して、他のために演說種種々に經論を解説せん。なんぢに當にかのもろくの衆生と、念持方便して堅固力をうべし。所聞にいりて忘れず、諸法の相を智信して生死をばなれしめ、八聖道を修して三昧の根相應せん。もし衆生ありて、なんぢが境界において法に住せん。奢摩他、毗婆舍那次第に方便して、もろくの三昧と相應して、ねんごろに三種の菩提を修習せん」と求め

人者、汝等まさに遮護し攝受して、れんころに捨施をなして乏少せしむることなるべし。もし衆生ありて、その飲食衣服臥具をほどこし、病患の因縁に湯薬をほどこさんもの、汝等まさにかの施主をして五利増長せしむべし。何等をか五とす。一には壽増長せん。二には財増長せん。三には樂増長せん。四には善行増長せん。五には慧増長するなり。汝等一長夜に利益安樂をえん。この因縁をもて汝等よく六波羅蜜を満てん。久しからずして一切種智を成ずることなえん。

【文科】 世尊則ち梵王の請を印可し更に懇ろに護持を勸し教示し給ふ。

【講義】 かやうに佛法護持について、誠意燃ゆるが如き梵天帝釋の申し出でを聞かれて釋尊言はく、善哉々々、勇しき大法護持の丈夫よ、今や汝等の願望の如く許すであらう。更に百億の大梵天王を顧みて仰せらるやう。汝等、我仰せを受けて大法を護持するに當り、其行ふ所、如來の法に基き、如來の法に順ひ、惡を厭ひ捨つる者あらば、今盡く汝等の掌中に付賜するであらう。

汝等賢首よ、各自の境界たる其百億の四天下に對して自在に教へ導くがよい。多くの衆生は狂犬の如く惡心猛く、心竊びて他人を惱害ひ、慈愍の心なく、因果の法を知らざれば、後世の畏れを思はず、刹利、婆羅門、毘舍、首陀等のあらゆる階級の人々の心を觸惱し、

延いては畜生の心までも觸惱すであらう。是等の殺生が因縁となり、邪見が因縁となり、即ち其所作の如何に従ひて、時ならざる風雨の害があるであらう。かくて地の精氣たる五穀、衆生の福力正法の精氣を損滅すの因縁となるであらう。かくの如き惡衆生の所作を遮り、長へに善法を榮えしめよ。

若し衆生ありて、善を得んと心掛け、正法を會得して、生死の海を渡り、涅槃の彼岸に到らんと念じ、布施乃至智慧等の六度の行を修むるに當り、其修むる所のあらゆる行法が凡て如來の法に基き、更に其行法を修むる方便として、何かの事柄を企てるやうな場合には、汝等力を盡して是等の道に進む衆生を護持り、養育て、修道の外護者となるがよい。若し衆生ありて、經典を受持ち、之を讀みて他人の爲めに演説し、又種々に經論の意義を解釋することあらば、汝等、彼の衆生の爲めに、其心の亂れないやうに念をかけ、方便を盡し、彼等をして何物にも妨げられぬ堅固の力を得さしめよ。さすれば彼等修道者は、其聞く所を忘れず、一切萬物の真相を解了して深く其意義を信じ、是により、生死の因を斷ち、八聖道を修めるであらう。即ち信、精進、念、定、慧の五根は圓に心中に其力を現すであらう。

若し又衆生ありて、汝等が支配する境界に於いて、禪定、觀法を修めてよく法に叶ひ、其進趣に従うて諸の三昧を會得し、勤に聲聞、緣覺、菩薩の三種の菩提心を修習するならば、汝等は直ちに其修道の魔障を遮め、よく攝め守りて、修道に必要なる衣服飲食等の財施を缺くる所なく給與するがよい。

若し又衆生ありて、是等修道者の爲めに、其飲食、衣服、臥具を施し、又病患者には湯藥を施さんとするならば、汝等、まさに其施主の爲めに、五種功德を獲さしめよ。五つの利益とは、一には壽延びること。二には財物増すこと。三には樂み増すこと。四には善行増すこと。五には解脱の正因たる智慧の増すことである。

上の如く四天下の衆生を守り、修道の外護者として力を盡すならば、汝等は長き夜の寢覺にも心ゆたかに、大なる利益と樂みを覺えるであらう。良に是等外護の因縁によりて、汝等は遂に解脱の正因たる六度の行を満し、やがては、一切(種智)佛智を獲、證りに至るであらう。

時、娑婆世界主大梵天王爲首、共三百億諸梵天王、咸作是言、如是

如是大德婆伽婆我等各各於己境界弊惡麤穢惱害於他、無慈愍心、不觀後世、畏乃至我當遮障與彼施主增長五事、佛言善哉善哉、汝應如是、爾時復有一切菩薩摩訶薩一切諸大聲聞一切天龍乃至一切人非人等、讚言善哉善哉、大雄猛士、汝等如是法得久住、令諸衆主得離惡道、速趣善道。

【讀方】 ときに娑婆世界の主大梵天王を首として、百億のよろ／＼の梵天王とともに、咸くこの言をなさく。是の如し、是の如し。大德婆伽婆、われら各々におのれが境界において、弊惡麤穢他を惱害し、慈愍の心なく、後世の畏を觀ぜざらん。乃至我まさに遮障しかの施主のために五事を增長すべしと。佛のたまはく、善哉々々、汝かくの如くなるべしと。そのときにまた一切の菩薩摩訶薩、一切の諸大聲聞、一切の天龍、乃至一切の人非人等ありて讚てまふさく。善哉々々、大雄猛士、汝等、かくの如きの法ひさしく住することを得、よろ／＼の衆生をして惡道を離るゝことを得、すみやかに善道に趣かしめんと。

【字解】 大雄猛士 佛世尊の異名。煩惱の賊を夷けたる靈界の雄猛士の意。  
【文科】 梵王佛勅を受領し、佛德を讃じ奉る一段。

【講義】 爾時、娑婆世界の主大梵天王をはじめ、百億の諸の天王は異口同音に申すやう。誠に世尊の宣給ふ如く教敎を守るであります。大德世尊よ、我等は仰せの如く、各自の

境界にありて、心邪惡にして羸弱く、慈愍の心なく、後世の畏れもなき愚痴の衆生に對して、能く其惡を遮障め、善を助け、又彼等施主の爲めに五つの福利を増さしむるであらう。

佛宣給はく、善哉々々、汝等其言葉の如く行ふがよろしい。

爾時、復其處に集れる一切の菩薩大菩薩、一切の諸の大聲聞、一切の天龍乃至一切の緊那羅、阿修羅等の入非人等は、一様に讚じて云はく、世尊大雄猛士よ、是の如きの汝等(下の法を人格的に見て指すと覺ゆ)大法は、世尊の威徳によりて、長へに此世に榮え、諸の衆生を導いて、惡道を離れて、善道に趣かしむることである。

爾時世尊欲三重明此義而説偈言、

我告二月藏言、	入此賢劫初、	鳩留佛付囑、	梵等四天下、
遮障諸惡故、	熾然正法眼、	捨離諸惡事、	護持行法者、
不斷三寶種、	增長三精氣、	休息諸惡趣、	令向諸善道、
拘那含牟尼、	復囑大梵王、	他化化樂天、	乃至四天王、
次後迦葉佛、	復囑梵天王、	化樂等四天、	帝釋護世王、

過去諸天仙、	爲諸世間故、	安置諸曜宿、	令護持養育、
至於濁惡世、	白法盡滅時、	我獨覺無上、	安置護人民、
今於大衆前、	數數惱亂我、	應當捨說法、	置我令護持、
十方諸菩薩、	一切悉來集、	天王亦來此、	娑婆佛國土、
我問大梵王、	誰昔護持者、	帝釋大梵天、	指示餘天王、
於時釋梵王、	謝過導師言、	我等所王處、	遮障一切惡、
熾然三寶種、	增長三精氣、	遮障諸惡朋、	護持善朋黨、

【讀方】 その時に世尊、かされてこの義を明さんとおぼして、しかも偈を説きてのたまはく。われ月藏に告ていはく、この賢劫の初に在りて、鳩留佛、梵等に四天下を付屬したまふ。諸惡を遮障するがゆへに、正法の眼を熾然ならしむ。もろくの惡事を捨離し。行法者(修道者)を護持し、三寶の種を斷ぜず、三精氣を増長し、もろくの惡趣を休息し、もろくの善道にむかはしむ。拘那含牟尼また大梵王、他化、化樂天乃至四天王に囑したまふ。つぎのちに迦葉佛また梵天王、化樂等の四天、帝釋、護世王、過去のもろくの天仙に囑したまふ。もろくの世間のための故に、もろくの曜宿を安置して護持し養育せしめたまへり。濁惡世に在りて白法盡滅せんとき、われ獨覺無上にして人民を安置しまらん。いま大衆の前にして數々われを惱亂せん。まさに說法を捨すべし。我を置ちて護持せしめよ。

十方のもろ／＼の菩薩一切ことごとく來集せん。天王もまたこの婆娑佛國土に來らしめん。われ大梵王に問はく。誰かむかし護持するものと。帝釋、大梵天、餘の天王をさししめす。時に釋、梵王過を導師に謝していはく。われら所王の處、一切の惡を遮却し、三寶の種を熾然ならしめ、三精氣を増長せん。諸惡朋を遮障して善朋黨を護持せしめんと。抄出

【字解】一。正法眼 眼は智慧を影はす。正法の智慧、即ち證りを獲の正因たる智慧のこと。是は正法によりて開發せらるゝものなる故に、正法眼といふ。

二。曜宿 三曜、七宿等の天體をいふ。

三。捨說法 此時の捨は捨施の意、說法を施すこと、教を垂れること。

四。所王處 王として君臨する土地。支配する境界。

五。諸惡朋 惡人の伴侶、惡人の團體。

六。善朋黨 善人の伴侶、善人の團體。即ち道を修むる人々の團體。眞實の僧伽のこと。

【文科】 世尊、上來宣說せられし所を重けて偽説し給ふ。

【講義】(上略)：此五濁惡世に至り、一切善法盡く消え失せんとする時、我師なくして獨り無上菩提の證りを開き、一切の人民を護りて一子の如く安らかならしめた。今この集まれる大衆の前に立つに、是等の衆生は病める子の其親を惱ますやうに、數々我心を惱

亂すことである。夫故に我はまさに法を捨施すであらう。汝等我意を置ちて、衆生を護持れ。(下略)

第五科 諸魔得敬信品

月藏經卷第七、諸魔得敬信品第十言爾時復有二百億諸魔俱共同時從坐而起合掌向佛頂禮佛足而白佛言世尊我等亦當發大勇猛護持養育佛之正法熾然三寶種久住於世間令地精氣衆生精氣法精氣皆悉增長若有世尊聲聞弟子住法順法三業相應而修行者我等皆悉護持養育一切所須令無所乏至於此娑婆界初入賢劫時拘樓孫如來已囑於四天帝釋梵天王護持令養育熾然三寶種增長三精氣拘那含牟尼亦囑四天下梵釋諸天王護持令養育迦葉亦如是已囑四天下梵釋護世王護持行法者過去諸仙衆及以諸天仙星辰諸宿曜亦囑令分布我出五濁世降伏諸魔怨而作大集會顯現佛正法

乃一切諸天衆 咸共白佛言 我等所王處 皆護持正法  
熾然三寶種 增長三精氣 令息諸病疫 飢饉及鬪諍 略出

【讀方】 月藏經 卷第七、諸覺得敬信品第十にたまはく。その時にまた百億の諸覺あり。ともに同時に座よりして起ちて、合掌して佛にむかひたてまつり、佛足を頂禮して、しかも佛にまふして言ふさく。世尊、我等またまさに大勇猛をおこして、佛の正法を護持し養育して、三寶の種を熾然ならしめて、ひさしく世間に住せしめ、いま地の精氣衆生の精氣法の精氣、みなことごとく增長せしむべし。もし世尊聲聞の弟子ありて、法に住し法に順じ、三業相應してしかも修行せば、我等みなことごとく護持し養育して一切の所須乏しきところならしめん。至この娑婆界にしてはじめ賢劫にいりしとき、拘樓孫如來すでに四天下を、帝釋梵天王に囑せしめて護持し養育せしめ、三寶の種を熾然ならしめ、三精氣を增長せしめたまひき。拘那含牟尼また四天下を、釋諸天王に囑せしめて護持し養育せしむ。迦葉もまた是のことし。すでに四天下を梵釋世王に囑して行法の者を護持せしめて、過去の諸仙衆および諸天仙星辰、もろくの宿曜また囉し分布せしめき。われ五濁世にいでもろくの覺の怨を降伏して、しかも大集會をなして佛の正法を顯現せしむ。至一切のもろくの天衆、ことごとくともに佛にまふして言さく。われら所王の處、みな正法を護持し三寶の種を熾然ならしめ、三精氣を增長せしめ、もろくの病疫飢饉および鬪諍をやめ

しめん。乃至略出

【字解】 一。百億諸覺 百億の多様な惡覺ども。

二。大勇猛 大勇猛心。勇ましい奮發心。

三。熾然 盛んなる貌。猛火の天を焦す勢をもつて三寶の弘まりゆくを形容したのである。

四。梵釋 梵王と帝釋の稱。

五。護世王 世間守護の王。四天王を指す。

六。過去諸仙衆 過去世にありし佛法守護の仙人達。仙人とは學道によりて神力を體得せる隱遁者

七。諸天仙 上にいでし佉盧虱吒仙人の如き、天體を布列せし人々をいふ。

八。所王處 王として命令を施行する土地。自分の支配する境土を指す。

【文科】 諸覺得敬信品によりて、諸覺の發心、諸天の發願を説き給ふ。

【講義】 略。

【餘義】 「指三示餘天王」は上の『大集經』卷六、月藏分、諸天王護持品(上五九〇頁)の初の文を指す。彼處には帝釋梵天が佛の間に對して餘の天王等の護持を廣く説いてある。夫を一括して此一句に攝めたのである。「謝三過導師」は、帝釋梵天二王に過失があつたの

ではなく、二王が自分等にも此四天下の護持の任を仰せつけて頂きたいと強く願ふ時に、私達に過失があつて仰せつけて下さらぬことでありまするか、若し過失があらば謝ります」と云ひしことを指す。

第六科 提頭頼吒天王護持品

提頭頼吒天王護持品云、佛言、日天子月天子汝於我法護持養育令汝長壽無諸衰患爾時復有百億提頭頼吒天王百億毘樓勒又天王百億毘樓博又天王百億毘沙門天王彼等同時及與眷屬從座而起整理衣服合掌敬禮作如是言大德婆伽婆我等各各於已天下勤作護持養育佛法令三寶種熾然久住三種精氣皆悉增長至我今亦與上首毘沙門天王同心護持此閻浮提北方諸佛法略抄

【讀方】 提頭頼吒天王護持品にはく、佛のたまはく、日天子、月天子、汝の法において護持し養育せば汝にして長壽にして諸の衰患なからしめんと。そのときにまた百億の提頭頼吒天王、百億の毘樓勒又天王、百億の毘樓博又天王、百億の毘沙門天王あり。かれら同時におよび眷屬と座よりしてたちて衣服略出

を整理し、合掌し敬禮して是のときの言をなまなく。大德婆伽婆、われら各々、己が天下にして、れんごろに佛法を護持し養育することをなまさん。三寶の種をして、熾然として、ひさしく住し、三種の精氣かなことくく增長せしめん。乃至我にまた上首毘沙門天王と同心に、この閻浮提と北方との諸佛法を護持す。

略出

【字解】 一。日天子 日宮天子、寶光天子、寶意天子とも云ふ。帝釋の内臣にして四天王に隸屬す。日輪は其宮殿である。この天子は他行する時には、七寶車に乗じ、八頭の馬を御して是を牽かせ、二妃左右に侍り、七曜九宿の星宿其護衛として之なめぐり、摩利支天は其前を行くといふ。

二。月天子 月宮殿に住する天王にして、日天子と同じく四天王に屬す。月天を領し、多くの天女を侍らして歡樂を盡すといふ。壽命五百歳。

三。諸衰患 種々の衰へる患ひ。例せば老、病、死、天災等の無常轉變の患ひをいふ。

四。提頭頼吒天王 提頭頼吒に同じ。持國天王をいふ。東方天王である。

五。毘樓勒又天王 毘留茶俱に同じ。増上天王をいふ。南方天王である。

六。毘樓博又天王 毘留博又に同じ。廣目天王をいふ。四方天王である。

七。毘沙門天王 多門天王のこと。北方天王である。

八。眷屬 從伴者。つき従ふ者共。

【文科】 大法護持の佛勅と諸天の受領を明し給ふ。

第四章 眞偽決判と異執誅



【講義】略。

第七科 忍辱品

月藏經卷第八忍辱品第十六言佛言如是如是如汝所言若有  
 愛已厭苦求樂應當護持諸佛正法從此當得無量福報若有衆  
 生爲我出家剃除鬚髮被服袈裟設不持戒彼等悉已爲涅槃印  
 之所印也若復出家不持戒者有以非法而作惱亂罵辱毀皆以  
 手刀杖打縛斫截若奪衣鉢及奪種種資生具者是人則壞三世  
 諸佛眞實報身則排一切天人眼目是人爲欲隱沒諸佛所有正  
 法三寶種故令諸天人不得利益墮地獄故爲三惡道增長盈滿  
 上已

又言爾時復有一切天龍乃至一切迦吒富單那人非人等皆悉  
 合掌作如是言我等於佛一切聲聞弟子乃至若復不持禁戒剃  
 除鬚髮著袈裟片者作師長想護持養育與諸所須令無乏少若  
 餘天龍乃至迦吒富單那等作其惱亂乃至惡心以眼視之我等

悉共令彼天龍富單那等所有諸根缺減醜陋令彼不復得與我等  
 等共住共食亦復不得同處戲笑如是擯罰上已

【讀方】 月藏經卷第八、忍辱品第十六にのたまはく。佛のたまはく是のごとし。汝かいふ所の  
 ごとし。若おのれを愛し、苦を厭ひ、樂を求むることあらん。まさに諸佛の正法を護持すべし。此よりまさに  
 無量の福報をうべし。もし衆生ありて我ために出家し、鬚髮を剃除し袈裟を被服せん。たとひ戒を保たざら  
 んも、彼等ことごとくすでに涅槃の印のために印せらるゝなり。もしまた出家して戒を持たざらんもの、非法を  
 もてしかも惱亂をなし、罵辱し、毀皆せん。手をもて刀杖打縛し、斫截することあらん。もし衣鉢を奪ひ  
 および種々の資生の具を奪はんもの、この人はすなはち三世の諸佛の眞實の報身を壞するなり。すなはち一  
 切天人の眼目を排ふなり。この人、諸佛所有の正法三寶の種を隱没せんと欲ふが爲のゆへに、もろくの  
 天人をして利益をえず、地獄に墮せしむるがゆへに、三惡道增長し盈滿することをなすなり。上已

又のたまはく。その時にまた一切天、龍乃至一切迦吒富單那、人非人等ありて、皆ことごとく合掌して是  
 のごときの言をなさく。我等、佛一切聲聞弟子、乃至もした禁戒を保たざれども、鬚髮を剃除し袈裟の  
 片を著ん者において師長の想をなさん。護持養育してもろくの所須をあたへて、乏少なることなからしめ  
 ん。もし餘の天、龍乃至迦吒富單那等、その惱亂をなし、乃至惡心をもて眼をもて之をみば、我等ことごとく  
 ともにかの天、龍、富單那等をして所有の諸相缺減し、醜陋ならしめん。彼をしてまた我等とともに住し、共

に食することを得ざらしめん。またく同處にして戲笑することを得じ。是のごとく擯罰せん。上

【字解】 一。人非人 人にして人に非らざるもの。天、龍、夜叉等の八部衆の率ある眷族の妖鬼。

【文科】 末世無戒比丘の功德と諸天の修業者護持を明す一段。

【講義】 『大集月藏經』第八、忍辱品第十六に言はく、釋迦牟尼佛宣給ふやう。其通り、其通り、汝の云ふ通りである。若し眞に自分といふものを愛し、苦みを厭うて眞の樂を求めらば、當に三世諸佛の正法を護りて、外難を除くが宜しい。此佛法外護の役を務めることからは、無量福德を得るであらう。即ちもし衆生ありて我教を信奉して出家し、鬚髮を剃り、袈裟を纏ふならば、其人がよしや教の如く戒行を持つことが出来なにしても、此人は此形ばかりの出家の爲めに、はや涅槃をうる所の印を印づけられるのである。出家の徳はかくの如く偉いなるものである。

然るに若し人ありて、此戒を持たぬ比丘に對して、非法の振舞ひをもつて、迫害を加へ、罵辱かじめ毀咎り、進んでは手に刀杖を取りて、打縛し、斫截むに至り、又は夫程でなくとも其比丘の衣鉢を奪ひ、其他資生に必要な器具を奪ふならば、是人は實に三世諸佛の眞實の報身を傷ひ奉ると同じい罪を犯すのである。云はく一切の天上人間の眼目を排り

出すやうなものである。そは如來は眞の意味に於いて天人の眼目にて在すからである。即ち無戒の比丘に對してかやうな迫害を加へる人は、自分では夫が大した罪惡とも思つてをらぬかも知れぬが、深く此惡心の底を掘つてゆくと、正に一切諸佛の所有正法と、三寶の田種を此世界から隠没して仕舞う考へが本となつてゐるのである。故に是を結果から云へば、一切の天上人間に對して教の泉を塞ぎ、眞實の利益を獲せしめないやうにしやうと云ふ企てとなるのである。かやうに佛法の流れに浴することの出来ない衆生は、凡て地獄に墜ちるの外はない。かやうな有様であるから、無戒の比丘に迫害を加へるといふことは人天三界の衆生を毒し、一切の善法を破壊し、三惡道を増長ならしめて、一切處に盈満しめんとするに外ならぬことである。

又言はく、爾時復あらゆる天人、諸龍はじめ奇臭餓鬼(疫病神)、人非人等の八部衆ありて、皆掌を合はせて申上ぐるやう、私共一同は如來の教を受けまして、如來のあらゆる聖弟子方は申すまでもなく、よしや無戒にして、單に鬚髮を剃り、袈裟の片端を纏ふやうな比丘に對しても、師長に奉持へまつる思ひをいたして、護持り養育ひ。修道に必要なものを捧げて、乏少といふことのないやうに致すであります。若し又私共以外の天人、

諸龍乃至奇臭餓鬼などが、弟子達の修道心を煙すやうな妨げをしたり、或は悪心をもつて恐しい眼で睨みつけるやうなことを致すならば、私共は總掛りで夫等の惡天龍等の奴原の眼鼻四肢等の肉體を傷けて、醜陋者となし、もう已後は決して彼等とともに生活したり、食事したりすることをやめ、亦同處には戲笑を共とせぬ迄に排斥し、打懲すでありませう。

第八科 忍辱品の文（或云北本『華嚴經』第二十四文）

又言離於占相修習正見決定深信罪福因緣出抄

【讀方】 又のたまはく。占相をはなれて、正見を修習せしめ、決定してふかく罪福の因縁を信すべし。出【文科】 邪道を離れて、正道に歸することを勧むる文である。

【講義】 又『華嚴經』には、占相の邪道を離れて、正しい見解に住り、必ず善惡因果の法則によりて、罪福の結果が獲られるといふ諸法因縁の理を深く信するであらう。

第五項 『首楞嚴經』の文

首楞嚴經言彼等諸魔彼諸鬼神彼等群邪亦有徒衆各各自謂

成無上道我滅度後末法之中多此魔民多此鬼神多此妖邪熾盛世間稱善知識令諸衆生落愛見坑失菩提路該惑無識恐令失心所過之處其家耗散成愛見魔失如來種上巳

【讀方】 首楞嚴經にのたまはく。彼等の諸魔、彼諸鬼神、彼等の群邪また徒衆ありて、各々に自らいはん。无上道を成すと。わが滅度のち、末法の中に、この魔民おほからん。この鬼神おほからん。この妖邪おほからん。世間に熾盛にして善知識となりて、もろくの衆生をして愛見の坑におとさしめん。菩提の路をうしなひ、該惑無識にして恐らくは心を失はしめん。所過の處にその家耗散して、愛見の魔となりて、如來の種を失せん。上巳

【字解】 一。首楞嚴經 十卷。具には「大佛頂如來密因修證了義諸菩薩萬行首楞嚴經」唐天竺沙門般刺密帝の譯。外に異譯として羅什譯の「首楞嚴三昧經」三卷あり。今の引用の經は十卷の經である。

二。諸魔 本經に説く所によれば、若し修道者にして淫欲を斷せずして禪定を修むれば、凡人に勝れた定力をうれども、皆魔道に墮す。上品は魔王、中品は魔民、下品は魔女になる。そして其等の人々は自ら魔道にありながら正道にあると思つてゐる。

三。諸鬼神 修道者にして若し殺生を離れずして禪定を修むれば、凡人に勝れた通力はうれども、其本に惡業ある爲めに皆鬼神に墮す。上品は大力の鬼神となり、中品は飛行の鬼神となり、下品は鬼神の眷族

四。群邪 修道者にして若し盗心を捨てやらすして禪定を修むれば、皆邪道に墮つ。上品は精量、中品は妖魅、下品は邪人となりて覺慧に濁かる。

【文科】『首楞嚴』によりて、修道上の魔障をときたまふ一段である。

【講義】『首楞嚴經』には、彼等惡魔達、惡鬼神達、及び妖邪共に、亦夫々從ふ徒衆があつて、各々に云ふであらう。自分はもう此上もない眞實の證を開いたと。

こゝに惡魔等といつたのは、修道者が嫉欲、殺生、盗心を離れずして禪定等を修めるとそこに凡夫の至り難い邪定力を獲るので、そこに鋭い反省を加へないと、其通力を恃んで、もう悟りを得たと思ひ込むのをいふたものである。是は實に恐るべきもので、良に佛魔一紙である。即ち修道者は其煩惱に從うて魔となり、鬼神となり、又は妖邪となるのである。我（釋尊御自身を指す）滅度の後、末法の時代に及んでは、上の魔民、鬼神、妖邪が多く、世に蔓延りて社會の先覺者と自稱し、かくして衆生をして、恐ろしい享樂（愛見）の坑へ陥れて眞の道を失はしめ、全く其心を惑惑して物の辨別さへも出來ないやうにし、本心を奪うに至るであらう。かくて是等魔民共の過ぐる所には、烈風の草木を仆すやうに、彼

等に誑される人々の一家は離散して肉樂の淵に耽溺し、遂に證りを開くべき如來の因種をも失ふに至るであらう。

### 第二項 『灌頂經』の文

灌頂經言三十六部神王萬億恒沙鬼神爲眷屬陰相番代護受

三歸者上巳

【讀方】灌頂經にのたまはく。三十六部の神王、萬億恒沙の鬼神を眷屬として、相をかくし番にかはりて三歸を受くる人を護る。上巳

【字解】一。灌頂經 十二卷。具に『佛說灌頂三歸五戒帶佩護身呪經』といふ。又は『大灌頂神呪經』とも稱す。東晋天竺三藏帛尸梨蜜多羅の譯。

二。三十六部神王 『灌頂經』にいづ。この諸神王は恒河沙の鬼神を眷屬として、三歸戒を受けし男女を護る。その名は、彌栗頭不羅婆（善光主疾病と譯す）、彌栗頭婆羅婆（善明主頭痛）、彌栗頭婆羅婆（善方主寒熱）、彌栗頭稱陀羅（善日主腹滿）、彌栗頭陀利者（善見主癱腫）、彌栗頭阿樓呵（善供主癡狂）、彌栗頭伽婆婆帝（善捨主愚痴）、彌栗頭悉抵哆（善寂主瞋恚）、彌栗頭菩提薩（善覺主淫欲）、彌栗頭提婆婆（善天主邪鬼）、彌栗頭阿波帝（善住主傷亡）、彌栗頭不若羅（善福主塚墓）、彌栗頭慈闍伽（善術主四方）、彌栗頭伽婆婆（善帝主怨家）、

彌栗頭羅閣遮(善王主偷盜)、彌栗頭修乾陀(善香主債主)、彌栗頭檀那波(善施主劫賊)、彌栗頭支多那(善意主疫毒)、彌栗頭羅婆那(善吉主五蘊)、彌栗頭鉢婆駄(善山主善尸)、彌栗頭三摩陀(善調主注連)、彌栗頭展鉢駄(善備主往復)、彌栗頭波利陀(善敬主相引)、彌栗頭波利那(善淨主惡黨)、彌栗頭度伽地(善品主蠱毒)、彌栗頭毘梨駄(善結主恐怖)、彌栗頭支陀那(善壽主危難)、彌栗頭伽林摩(善遇主產乳)、彌栗頭阿留伽(善願主懸官)、彌栗頭闍利駄(善因主口舌)、彌栗頭阿伽駄(善照主憂腦)、彌栗頭阿訶婆(善生主不妄)、彌栗頭婆和羅(善至主百怪)、彌栗頭波利那(善藏主嫉妬)、彌栗頭周陀那(善音主呪咀)、彌栗頭章陀羅(善妙主厭勝)の稱、

【文科】 神王鬼神が眞の修道者を護持りたまふことを明す。

【講義】 『大灌頂神咒經』には、三十六部の神王が、萬億恒沙の鬼神共を眷屬と從へて、相を陰して、番代三寶に歸依する者をつねに護持りて休むことはない。上巳

第七項 『地藏十輪經』

地藏十輪經言、具正歸依、遠離一切妄執、吉凶終不歸依、邪神外道、又言、或執種種若少若多、吉凶之相、祠祭鬼神、而生極重大罪惡業、近無間罪、如是之人、若未懺悔、除滅如是、大罪惡業、不令出家及受具戒、若令出家、或受具戒、即便得罪。上巳

【讀方】 地藏十輪經にのたまはく、具にまさしく歸依して一切の妄執、吉凶を遠離せんものは、つゝに邪神外道に歸依せじと。上又のたまはく、あるひは種々に、もしは少しは多、吉凶の相を執して鬼神をまつりて、至而うして極重大の罪惡業を生じ、无間罪にちかづかん。是の如きの人、もし未だかくの如きの大罪惡業を懺悔し、除滅せずば、出家しおよび具戒を受けしめざらんも、もしは出家しあるひは具戒を受けしめんも、即ち罪をえん。上巳

【字解】 一。地藏十輪經 十卷。具には『大乗大集地藏十輪經』。唐玄奘三藏譯。『大方廣十輪經』の異譯。(十五四五頁參照)

二。具戒 具足戒のこと。比丘の二百五十戒、比丘尼の三百四十八戒をいふ。此戒を持てば無量の戒徳具足する故に名く。

【文科】 修福穢災の妄執と吉凶禍福を占ふ心を誠め給ふ一段

【講義】 『地藏十輪經』には、正しく三寶に歸依し奉りて、あらゆる妄執と吉凶禍福を占ふことを遠離たもの者ならば、決して邪神や外道に歸依することはない。

又言はく、或者は少しばかり、或者は非常に強く吉凶禍福の相に執着し、そして自分の穢い欲望を満さんが爲めに鬼神を祭り、乃至かくして極めて重大なる惡業を造りて、無間の業火に焼かるべき罪に近くのである。かくの如き人は、若しも其邪鬼神を祭るとから起

つてくる大罪惡業を懺悔し除滅して仕舞はなければ、出家を許し具足戒を授けるとは出来ない。然るに若し強いて出家せしめ具足戒を受けしむるならば、却つて罪を得るであらう。

第八項 『集一切福德三昧經』の文

集一切福德三昧經中言不向餘乘不禮餘天。上巳

【讀方】 集一切福德三昧經の中にたまはく。餘乘にむかはざれ、餘天を禮せざれ。上巳

【字解】 一。集一切福德三昧經 三卷。姚秦鳩摩羅什三藏譯。大乘菩薩の修道、及び其福德等を廣説す。

【文科】 外道天神に歸依することを戒めたまふ一段。

【講義】 『集一切福德三昧經』の中に言はく、苟も佛教を信じて道を修めるものならば、佛教以外の餘の教に心を向けてはならぬ。又佛教以外の大自在天のやうな天神を禮拜してはならぬ。

第九項 『藥師經』の文

本願藥師經言若有淨信善男子善女人等乃至盡形不事餘天

又言又信三世間邪魔外道妖孽之師妄說禍福便生恐動心不自正ト問覓禍殺種種衆生解奏神明呼諸魍魎請乞福祐欲冀延年終不能得愚癡迷惑信邪倒見遂令橫死入於地獄無有出期至乃八者橫爲毒藥厭禱呪咀起屍鬼等之所中害。上巳抄出

【讀方】 本願藥師經にのたまはく。もし淨信の善男子善女人等ありて、乃至盡形までに餘天につかへざれ。又のたまはく。また世間の邪魔、外道、妖孽の師の妄に禍福を説くを信じて、すなはち恐動を生ぜん。心みづから正しからず。ト問して禍をもとめ、種々の衆生を殺し、神明に解奏し、もろくの魍魎をよばうて、福祐を請乞し、延年を冀んとするに、終に得ることあたはず。愚癡迷惑して邪を信じ、倒見してつゝに横死せしめ、地獄にいりていづる期あることなけん。乃至八には横に毒藥、厭禱、呪咀、起死鬼等のために中害せらる。上巳抄出

【字解】 一。本願藥師經 一卷。具には『藥師瓔珞光如來本願功德經』といふ。他に異譯四本あり。藥師如來の本願功德を宣説せる經典。

二。妖孽之師 妖とは衣服、歌謠、草木之怪をいひ。孽とは禽獸、蟲蛇之怪をいふと、『說文』に見ゆ。今は病氣災難等に罹つてゐる人に對つて、神木を祈つた崇りだとか、死猫の祟りだとかいふて人を誑す妖僧等を云ふ。

三。魘ウツ 山川の精を指す。或は「木石之妖變」ともいふ。「淮南子」には、「狀如三歲小兒、赤黒色、赤目長耳、美髮」とあり。一言にして云へば妖鬼である。「左傳」宣公三年、杜氏注に「罔兩水神、説文云罔兩山川之精物也」と。

四。厭禱ウツク 厭は飽くこと、故にこゝでは鬼神に犠牲を供へて夫に飽かしめ、自分の福祉等を祈ること。周の伯溫といふ人曰く、厭禱の厭は、正しくば厭とせればならぬ云々。

五。起屍鬼ウツク 屍鬼とは死體中にある一種の氣にて是は精神と肉體に關せずに残るといふ。故に呪術をもつて其死屍に加ふれば、其氣鬼は活きたす。即ち呪術に應じて屍を起す鬼といふこと。呪術から云へば屍中の鬼を活かせる術といふことである。

「十誦律」第二に起屍鬼の例を載す。比丘あり。怨みある人を呪ひ殺さん爲めに、二十九日以内に全身缺くる所なき死屍を求め、鬼を呼び出し、尸を呪うて起たしめ、水に洗ひ衣を着せ、刀を手中に握らせて、心口に其怨みある人を呪咀すれば、其比丘は直ちに死す。然るに其比丘禪定に入るか、慈心三昧にあるか、又は他の大力呪師の護念を受けてなれば、害せらるゝ憂へなし。其代りに呪を企てた比丘が却つて死ななければならぬ。此を免るゝには、羊を殺し、芭蕉樹を介せば、助かることが出来る云々。

要するに起屍鬼とは、かやうな怪しい妖術に現はるゝもの一つである。

【文科】 迷信邪道の禍悪を示したまふ一段。

【講義】 『本願樂師經』に言はく、若し善男子、善女人等にして、如來の教法を信奉するならば、身終るまで、外道の崇める所の天神等に心を寄せてはならぬ。

又言はく、世間に正道に仇をする邪魔神あり。又は外道や妖孽魔道に仕へてゐる妖師等があつて、妄りに無智の人達の弱點につけ込んで、様々の吉凶禍福を説いてゐる。多くの人は、此説を信じて、心の權衡を失ひ、全く運命邪神の恐れを抱き、卜ひを頼みて却つて禍を醸すことを知らず、其等の邪神や卜師の言を信じて禍を恐れんが爲めに、牛馬等の様々の衆生を殺して、犠牲に供へ、夫によりて災禍の繋を解かんことを神明に祈願し、又は諸の妖神を呼んで現世の福祐を請乞め、延年を願うてゐるけれども、是等の邪道に陥りては、どうして其願を満すことが出来やうぞ。かやうに愚痴の爲めに迷惑され邪道を信じ倒しまの見解に墮ち、其行きつく所は非常の最期を遂げ、死して地獄に入り、いつ迄たつても浮む時がないのである。乃至

横死に九種ある中の第八には邪見に陥つてゐる者は、毒藥、厭禱、呪咀、起屍鬼の妖魔の爲めに非業の最期を遂げることである。

第十項 『菩薩戒經』の文

菩薩戒經言、出家人、法不向國王禮拜、不向父母禮拜、六親不敬、鬼神不禮、上巳。

【讀方】菩薩戒經にのたまはく、出家の人の法は、國王に向ひて禮拜せず。父母にむかひて禮拜せず。六親につかへず。鬼神を禮せず。上巳。

【字解】一、菩薩戒經 『梵網經』のこと。具には『梵網經盧舍那佛說菩薩心地戒品第十』の經は大乗菩薩の戒を説く故に『菩薩戒經』の異名ある所以である。

【文科】『菩薩戒經』によりて根柢なき道義を排し給ふ一段である。

【講義】『菩薩戒經』には、佛教を奉じて出家した者の法として、國王を禮拜してはならぬ。父母を禮拜してはならぬ。六親眷族等に務めをしてはならぬ。天魔鬼神等の邪神を拜んではならぬ。

【餘義】一、出家といふことは、是迄もつてゐた思念を棄てることである。言ひ換れば今迄は生活の眞の意義を知らず。眞の力を有せず、唯客觀の出來事に動かされて浮草のやうに生活して來たのである。左様な心にて王を拜し父母眷族を拜しても何の所詮もない。然るに家を捨て、道を修めるに當り、未だ眞道に入らざる中に稍もすれば、此世俗の習

眞諦なき俗諦を排す

慣に従つて道を棄てんとする。今は夫を戒しめたのである。即ち眞に道の生命を我生命とすれば、そこに自然の俗諦が流れて來る。この境地に達せねばならぬ。然るに多くの修道者は片手に世間の道を握り、片手に佛道を握つてゐる。そして此二段に立ち縮んで、二鬼を追ふ愚人のやうに、一鬼も得ることが出來ないのである。

二、先師曰く「如來の奴隸となれ、其他の奴隸となる勿れ」。道に進む人は、是等の文字を平淡に解せず、深く其奥旨を知らねばならぬ。

第十一項 『佛本行集經』の文

佛本行集經第四十二卷優婆塞那品言、爾時彼三迦葉兄弟有一、外甥螺髻梵志、其梵志名優婆塞那、至恆共二百五十螺髻梵志弟子、修學仙道、彼聞其舅迦葉三人、諸弟子往詣於彼、大沙門邊、阿舅剃除鬚髮、著袈裟衣、見已向舅而說、偈言、舅等虛祀火百年、亦復空修、彼苦行、今日同捨、於此法、猶如蛇脫、於故皮、爾時彼舅迦葉三人、同共、以偈報其、外甥優婆塞那、作如是言、我等昔空、



祀<sup>マツリ</sup>火<sup>カ</sup>神<sup>カミ</sup>亦<sup>モ</sup>復<sup>マシ</sup>徒<sup>ニ</sup>修<sup>シ</sup>於<sup>テ</sup>苦<sup>ク</sup>行<sup>ニ</sup>我<sup>ガ</sup>等<sup>ガ</sup>今<sup>ノ</sup>日<sup>ニ</sup>捨<sup>テ</sup>此<sup>ノ</sup>法<sup>ヲ</sup>實<sup>ニ</sup>如<sup>ク</sup>蛇<sup>ノ</sup>脱<sup>ス</sup>於<sup>テ</sup>故<sup>ノ</sup>皮<sup>ニ</sup>出<sup>ス</sup>

【設方】佛本行集經の第四十二卷、優婆斯那品にのたまはく。闍那曠そのときにかの三迦葉兄弟に、ひとり外甥の螺髻梵志といふものあり。その梵志を優婆斯那となづく。乃つれに二百五十の螺髻梵志弟子とともに仙道を修學しき。かれその舅迦葉三人をきくに、もろくの弟子とかの大沙門の邊に往詣して、阿舅鬚髮を剃除して袈裟衣をきるを見をばりて舅に向ひてしかも偈を説きていはく。舅等むなく火を祀ること百年、またく空かか苦行を修しき。今日おなじくこの法を捨ること猶し蛇のふるき皮を脱ぐごとくするをや。その時にかの舅迦葉三人、おなじくとも偈をもて、その外甥優婆斯那に報じて、是のこときの言をなまく。我等むかし空しく火神を祀りてまたく徒に苦行を修しき。われら今日この法を捨つることまことに蛇の故き皮を脱ぐごとくす。出抄

【字解】一。佛本行集經 六十卷 隋、闍那曠多譯。釋尊一代の傳。並び諸大弟子の傳記を詳述す。漢譯佛傳中尤も詳密のものである。

二。三迦葉兄弟 釋尊成道第二年に弟子となる事火外道兄弟。長兄は優樓頻螺迦葉、中兄は伽耶迦葉、弟は那提迦葉。各多くの弟子を率ゐて摩竭陀國の尼連禪河の畔に住し、名聲國內に轟いた人々であつた。山邊者「佛弟子傳」二七頁以下に委し。

三。螺髻梵志 髻を螺のやうに束れてゐる婆羅門。こゝでは事火外道を指すらしい。

四。仙道 俗を捨て、山林に入りて道を修むること。こゝでは苦行を指す。

【文科】三迦葉の外道を捨て、佛道に歸依した實例を擧げて上來説き來つた經證を事實の上に教示したまふ一段である。

【講義】『佛本行集經』第四十二卷、優婆斯那品（隋の闍那曠多譯）に言はく、爾時に釋尊に歸依した三迦葉兄弟に一人の外甥があつた。優婆斯那といひ、螺髻婆羅門であつた。彼は恒に二百五十人の弟子とも仙道を修めてをつたが、其舅の三迦葉や弟子達が打ち連れて、大沙門瞿曇の許に往きて、鬚髮を剃り、袈裟を着けて、佛陀の弟子になつたといふことを聞いて、舅達を訪れ、正しく其歸佛の状態を見て、云ふやう。かうなつて見れば、舅等はこれまで百年の長い間、徒らに火神を祀り、亦徒らに苦行を修めたといふものである。夫は餘りに思ひ切りがよ過ぎるではありませぬか。云はく蛇が故皮を脱ぎ捨てるやうなものと思ひます。

爾時、舅の三迦葉は異口同音に外甥の優婆斯那に答へるやう。良に汝のいふ通りである。吾等今日まで邪見に陥り、長い間空しく火神を祀り、空しく苦行を修めたことである。今や世尊の御教へによりて其迷ひが醒めて見ると、從來の法を捨てることは、蛇の故皮を脱ぐやうなものである。出抄

第三節 論文證

第一項 『起信論』の文

起信論曰、或有衆生、無善根力、則爲諸魔、外道鬼神、所誑惑、若於坐中、現形恐怖、或現端正男女等相、當念唯心境界、則滅終不爲惱、或現天像菩薩像、亦作如來像、相好具足、若說陀羅尼、若說布施持戒忍辱精進禪定智慧、或說平等空無相無願無怨無親無因、無果畢竟空寂是真、涅槃、或令人知宿命過去之事、亦知未來之事、得他心智、辨才無礙、能令衆生貪著世間名利之事、又令人數瞋、數喜、性無常、准或多慈愛、多睡多宿、多病、其心懈怠、或率起精進、後便休廢、生於不信、多疑慮、或捨本勝行、更修雜業、若著世事、種種牽纏、亦能使三人得三昧、少分相似、皆是外道所得、非真三昧、或復令人若一日若二日若三日乃至七日住於定中、

得自然香美飲食、身心適悅、不飢不渴、使人愛著、或亦令人食無分齊、乍多乍少、顔色變異、以是義故、行者常應智慧觀察、勿令此心墮於邪網、當勤正念、不取不著、則能遠離是諸業障、應知外道所有三昧、皆不離見愛我慢之心、貪著世間名利恭敬、故上已

【讀方】起信論にいはく。あるひは衆生ありて善根力なければ。則ちよろ／＼の魔、外道、鬼神のために誑惑せらる。もしは坐中にして形を現じて恐怖せしむ。あるひは端正の男女等の相を現す。まさに唯心を念すべし。境界すなはち滅してつゝに惱をなさす。あるひは天像、菩薩像を現じ。また如來像の相好具足せるをなして、もしは陀羅尼をとき、もしは布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧をとき、あるひは平等、空、無相、無願、無怨、無親、無因、無果、畢竟空寂、これ眞の涅槃なりととかん。或は人をして宿命過去の事をしらしめん。また未來の事をして他心智をえ、辨才無礙ならしむ。よく衆生をして世間の名利の事に貪著せしむ。また人をして、數々瞋り、しはしば喜ばしめ、性常准ならしむ。或はおほく慈愛し、おほく睡り、おほく宿し、おほく病す。その心懈怠なり。或はにはかに精進をおこして、後にはすなはち休廢す。不信を生じて疑ひおほく、慮りおほし。或はもとの勝行をすて、さらに雜業を修せしめ、もしは世事に著せしめ、種々に牽纏せらる。また能く人をしてよろ／＼の三昧の少分相似するを得しむ。みなこれ外道の所得なり。眞の三昧にあらず。或はまた人をしてもしは一日、もしは二日、もしは三日、乃至七日、定中に住し

て自然香味の飲食をえ、身心適悦して飢せず、渴せざらしむ。人をして愛著せしむ。或はまた人をして食に分齊なからしむ。たちまちに多きたちまちに少くして顔色變異す。この義をもてのゆへに、行者つれに智慧をもて觀察して、この心をして邪網に墮せしむることなるべし。まさに勤めて正念にして取著せずして則ちよく是もろの業郭を遠離すべし。しるべし。外道の所有の三昧は、みな見愛我慢の心をはなれず。世間の名利恭敬に貪著するがゆへなり。上巳

【字解】一。起信論 具に『大乘起信論』馬鳴菩薩著。真諦三藏譯一卷。實又羅陀譯二卷。衆生一心の上へ眞如、生滅の二門を開き、眞如門には一心の本體的方面を説き、生滅門には一心の現象的方面たる眞如縁起を廣説し、更に一心の義理を辨述して體、相、用の三大とした。次に實踐の行法に移り、眞如、三寶を信する四信と、布施、持戒、忍辱、精進、止觀の五行によりて迷界を解脱することを説く。大に大乘の信を鼓吹せるをもつてこの名あり。其教義が大乗の諸教理に通ずる故に大乘通申論とも稱せらる。

二。陀羅尼 梵音ドハーラニー (Dhāraṇī) 總持、能遮等と譯す。種々の善法を集めて散失せしめざることを。又衆徳を具足せる經文及び名號をいふ。又支那の禁呪法に似たるが故に呪とも稱す。

【文科】『起信論』を引いて、修道上の障礙を説き、外道の三昧を斥けたまふ一段。

【講義】『起信論』に曰はく、過去の善根力を有たない衆生が道を修むる際には、様々の惡魔や、外道魔や、鬼神等の爲めに、心を誑惑はされる。其一例を擧ぐれば、坐つてゐた

前に、恐ろしい形相を現はして脅したり。或は美しい男女の相を現はして、色に托つて誘惑したりする。かゝる場合には、唯三界唯一心と念するがよい。一切は心の所作である。この心を離れて何物もないと觀するのである。かやうに客觀の境界が滅びて仕舞へば、心は靜かになりてもう惱されることはない。

又或時には天人の像、菩薩の像を現はす。時には相好圓滿なる如來世尊の像を作すこともある。そしてこの如來の陀羅尼を説き示したり。布施、持戒等の六波羅蜜の行を説いたり、或は亦諸法は平等にして凡夫の見るやうな差別あるものでない。そして唯空である。様々に見ゆる現像も幻に過ぎないので全く無相である。願望すべきものもなければ、怨むべきものもなく、親愛すべきものもない。夫等は皆な凡夫の心にある迷にして、實の法は怨親を離れた平等のものである。又其天地は因果の力の及ばぬ所である。即ち大海の底の湛然平靜たるが如く、畢竟空寂にして、何物にも擾さるゝことはない。是ぞ眞の涅槃の境界であると説くであらう。

或は亦修道者をして、宿命過去を知らしめたり。未來に起ることを豫知せしめ、よく他人の心を知る智慧を得せしめて、才辯流るゝが如く、法を説いて人々を隨喜せしめる。か

やうにして修道者は、俗世間の名譽や利益を貪りて道を棄てるやうになる。  
 又或時は、人の感情を煽りて、忽ちにして瞋らしめ、忽ちにして喜ばしめ常の權衡をとりしめない。或は又人を慈愛むことが度を超へたり、睡り過ぎ、夕に多く喰ひ過ぎて朝まで食物が腹の中に停滞してゐたり。又無暗に病氣する。従つて元氣が衰へて心は懈怠ける。又或時は突然精進むが、後はぐつたりして休廢て仕舞ふ。  
 かやうに修道生活に狂ひがでてくると、清淨に正法を受け込む所の信が缺けて、事々に狐疑逡巡し、或は爲めに從來修めて来た結構な行を抛つて、餘の雜り氣のある行業を修めたりして、心は常に動搖して定まらない。或は世間の事に執著を起して、種々の出來事に牽纏つたりする。又は諸の禪定の一部分の味を得させたりするが、是等は皆な外道の人々の得る結果であつて、眞の禪定ではないのである。  
 或は復修道者をして、一日若くば七日の間、定の中に於いて、さながら夢に飲食するやうに、自然に香ばしい美食を食して、身も心も爽かに心地よく、飢うることなく、渴くことなく、そらるに修道者を耽溺せしめる。  
 又或時は、食事に制限なからしめ、時には多く、時には少く取る爲めに、身體の營養惡

しくなり、顔色が變異てくる。

かやうな義であるから、道を修める者は、常に智慧の光りをもつて、よく修道中の様々の出來事を冷靜に觀察へ、此心をして邪道の網に罹らぬやうにせねばならぬ。即ち勤め勵みて念を正しくして流水の如く滯ることなく、執着の念を離れて、上に擧げた様々の業障を遠離ねばならぬ。是によりて外道の火々が道を修めて得る所は皆邪まの見解と我愛、我慢の心を離れてをらぬことを知ることが出来る。そは彼等が根本に於いて、眞に道に進むのではなく、世間の名聞や、利養や、恭敬に執着して離れないからである。上巳

第四節 釋文證

第一項 『辯正論』

【大意】 眞偽決判の釋文證として本論を引用せらるゝに就いて、初め第二、第三科の十喻篇は重に釋尊と老子の傳記の上に優劣を論じ、第四科第九篇篇には佛教信仰の奇蹟を辯正し、菩提涅槃の意義を論じ、第五科氣爲道本には引文『正法念經』の文を擧げて持戒破戒の得否を決し、第六科出道篇篇には道教の妄誕を難じ、第七科歸心有地篇には道書の偽謬を指摘し、武帝の捨老歸佛の文を引いて結ぶ。支那に於ける

外道と佛敎の眞偽決判には好個の證文である。そして又會に夫のみならず、道敎の思想は稍もすれば大乘佛敎に似て非なるものなれば、これに對して、嚴正なる批判を加へなければならぬ。即ち老子の敎は、後世大に誤られて迷信を加へ、一面佛敎の宗敎的方面と混する恐があるとも、他方には其虛無恬淡の思想が超人間的な非現實主義となりて、俗人をして佛敎の根本思想と等しいやうな見解を起さしめる恐がある。これは歴史的に支那に於ける道敎と佛敎の關係たるのみならず、眞道に趣かんとする人士が、稍もすれば道敎風の邪路に陥るのである。本論引用文は是等の點に對して嚴正なる批判を加へてゐるのである。

第一科 總標

辯正論曰(二)法琳 十喻九箴篇 答李道士十異九迷

【字解】一。辯正論 唐の沙門法琳師が當時の道敎の攻撃に對して、破邪顯正せる書。八卷。十二篇に分つ。三教治道篇第一(上)、十代奉佛篇第二(上)、佛道先後篇第三(卷第五)、釋李師實篇第四、十喻九箴篇第五(卷第六)、氣爲道本篇第九、出道偽謬篇第十(卷第七)、品藻衆書篇第九、出道偽謬篇第十(卷第八)、歷世相承篇第十一、歸心有道篇第十二。この中引用の文は、第五、第六、第七、第十、第十一の各篇である。

二。法琳 姓は陳氏、支那、潁川の人。少時出家して釋儒二道に精通す。適唐の武德四年(西曆六百廿一年)黃巾の徒なる太史令傅奕が十一ヶ條を立て、佛敎打破斥の意見を上奏するに會し、大に之

を駁撃し、更に傅奕の友李仲卿の佛敎打破斥の書に對して堂々たる反論を加へた、上の「辯正論」が夫である。當時、道敎の徒朝に列して佛敎を破斥せんとしたのであるから、師の殉敎的の奮闘は目醒しいものであつた。百牢關の菩提寺に寂す。歳六十九。「續高僧傳」第廿四に委し、

第二科 十喻篇第五

外一異曰、太上老君託神玄妙玉女、剖左腋而生釋迦牟尼、寄胎摩耶夫人、開右脇而出、至乃內一喻曰、老君逆常託牧女、而左出世尊順化、因聖母而右生開士、曰案慮景裕、戴洗韋處、玄等集解五千文及梁元帝周弘政等考義類云、太上有四謂三皇及堯舜是也、言上古有此大德之君、臨萬民之上、故云太上也、郭莊云、時之所賢者爲君材、不稱世者爲臣、老子非帝、非皇、不在四種之限、有何典據、輒稱太上耶、檢道家玄妙及中台朱韜玉机等經、并出塞記云、老母所生不云有玄妙玉女、既非正說、尤假謬談也、仙人玉籙云、仙人無妻、玉女無夫、雖受女形、畢竟不產、若有茲瑞、誠

曰可嘉何爲史記無文周書不載求虛責實信篤妄者之言耳禮云退官無位者左遷論語云左衽者非禮也若以左勝右者道士行道何不左旋而還右轉耶國之詔書皆云如右竝順三天之常也至乃

【讀方】外の一異にいはいはく。太上老君は、神を玄妙玉女に託して、左腋を割て生まれた。釋迦牟尼は、胎を摩耶夫人によせて、右脇を開きていでたり。乃内の一喻にいはいはく。老君は常に遊んで、牧女に託して左よりいづ。世尊は化にしたがひて、聖母によりて右より生じたまふ。

開士のいはく。虛景裕、戴説、韋處玄等か集解五千文、および梁の元帝周弘政等が考義類を案するに、いはく、太上に四あり。いはく三皇および堯舜これなり。言ふこゝろは上古にこの大徳の君あり。萬民の上のそめり。かるがゆへに太上といふ。郭莊がいはいはく。時の賢とするところのものな君とす。村、世に稱せられざるものを臣とす。老子帝にあらず。皇にあらず。四種の限にあらず。なんの典據ありてかたやすく太上と稱するや。道家の玄妙および申胎、朱船、玉机等の經、ならびに出塞記をかんがふるに、いはく、老はこれ李母が生めるところ、玄妙玉女ありといはず。すでに正説にあらず。尤も假の譚談なり。仙人玉録にいはいはく。仙人は妻なし。玉女は夫なし。女形を受けたりといへどもつるに産せず。もしこの端あらばまことに嘉とすべしといふ。何爲ぞ史記にも文なし、周書にもせず、虚をもとめて實をせめば、瞞盲者の言を信

すならくのみ。禮にいはいはく、官を退きて位なきは左遷せらる。論語にいはいはく、左衽は禮にあらずと。もし左をもて右にすぐれたりとせば、道士行道するに何ぞ左に旋すして、而もかへりて右にめぐるや。國の詔書に皆いはく、右のごとしと。竝に天の常に順うなり。至乃

【字解】一。太上老君 老子の尊稱。姓は李、名は耳、字は聃、伯陽と號す。楚國苦縣の人。周の柱下史となり、後函谷關を超えて跡を晦ますに際し關の令尹喜の請ひにより道徳五千餘言を残す。所謂老子上下二篇八十章が即ち其である。

二。玄妙玉女 玄妙は實美の言葉。玉女は人間界を離れたる仙女のこと。即ち神祕の色深き、妙に美しい仙女といふこと。

三。開士 菩薩の異名。こゝでは道を修める人の意。開は開達、又は明の意。業主符聖が有徳の沙門を尊重して呼んだところである。

四。虛景裕等 『國史經籍志』によれば、虛景裕は、『老子註』二卷を作りし人。『佛藏統記』第三十八によれば、虛景裕は佛法に通ぜし爲め人彼を呼んで居士と稱した。嘗つて從兄仲禮の亂に坐して禁獄せられたが、經を誦して枷を脱れ爲めに免されたとある。戴説は『老子義疏』九卷、『莊子義疏』九卷の著者、韋處玄は『老子疏』四卷の著者。

五。梁元帝 梁の武帝の第七子、孝元帝のこと。

六。周弘政 北周の人、老莊の疏を作りし人。

七。三皇 支那上古の三君主、伏羲、神農、黃帝。

八。上古 古々々久しき意。伏羲は上古、周の文王は中古、孔子は後古、他の一説には、上古は三皇、中古は五帝（少昊、顓頊、高辛、唐虞、虞舜）、下古は三王（夏后、殷湯、周姫）。以上二説にて、大體上支那上古の意義を知ることが出来る。

九。郭莊 字は子玄、莊子の注をもつて有名であるから、この名あり。

一〇。【史記】 百三十卷。司馬遷の著。本紀十二、年表十、世家三十、列傳七十、本邦刻八尾版にて合冊二十五、本紀は五帝に始まり漢の孝武帝に終る。年表、世家、列傳等も元より此範圍を出づることはない。一一。【周書】 五十卷。本紀八、列傳四十二。北周の史であるから「後周書」ともいふ。唐の令狐德棻が勅を奉じて撰する所。但し殊缺あり。後人之を補ふ。又竄入多しと稱せらる。

【文科】 一異一喻の文、老子と釋尊の出生上の優劣論。

【講義】 外論には、道教佛敎の第一異として、初めに二敎敎祖の傳記に就いて佛敎を貶し道教を賞揚して曰く、道教の開祖たる太上老君即ち老子は、神を絶妙なる仙女に宿し、其左の腋を割いて生れられたが、釋尊は摩耶夫人の胎内に宿りて、其右脇を開いて胎内から出られた。

内道たる佛敎の見解から、上の外の一異に對して、内の一喻を立て、曰く。汝の言を真

とすれば、老子は實に常理に違つてゐるのである。即ち其母は玉女ではなくして李氏の娘たる牧女で、其左腋から生れたといふではないか。其左といふことが左道（邪道）の證據である。然るに釋迦牟尼世尊は、天地化育の法則に順じて、聖母摩耶夫人の右脇より誕生せられた。右は正道を顯はしてゐるのである。

こゝに於いてか開士説をなしていふ。盧景裕、戴詵、韋處玄等の『老子』の解釋、及び梁元帝、周弘政等の『老子』を解釋した考義類を案て見ると、此「太上」に四ありといふ。即ち伏羲、神農、黃帝の三皇と、堯舜を合して一となし、四太上といふ。其意味はと云へば、上古の時代には、是等の徳の高い聖人が上にありて、萬民に君臨せられたといふので、太上と名けたといふ。郭莊のいふには、其時代の民衆が、其人の徳に懐き、賢者として崇敬する者を君主となし、智徳を備へてゐても、其名聲が世に顯はれない者は、君王を補佐する臣となる。是が實の意味に於ける君と臣とである云々。

今、道家に云ふ所謂太上老君を考へて見るに、老子は、堯舜のやうな帝王でもなければ、伏羲神農等の三皇の班に列すべき人物でもない。さすれば四種の太上に洩れた人である。何の典據に依りて輕々しく太上の尊稱を冠するのであるか。更に道家の書と稱せらるゝ、

『玄妙』、『中台』、『朱輅』、『玉机』等の經典并に『出塞記』等を繕いて見るに、唯老子は母李氏の生む所というて、玄妙玉女のことに關しては一言も述べてない。さすれば玉女云々の説は、道教部内に於いても正しい傳説といふことは出来ない。非常なる假謬の談である。更に玉女に就いて考へて見るに、『仙人玉籙』には、仙人は世を捨て、道を修めてゐる人であるから妻はない。又玉女は夫を持たない。故に女の形相をもつて生れても、決して子を産むといふことはない。もしかやうな希瑞あらば誠に嘉賞べきものである云々と云うてある。されば老子が玉女を母として生れたといふことは、不合理の甚しいものでないか。更に正史に就いて見ても、既に玉女云々のことは、『史記』にも『周書』にも記載してない。左様な虚を土臺として實事を非難するならば、矯妄者の言葉を信すると同じことである。

『禮記』に云はく、官職をやめて無位となつた人は左遷せられたものであると。『論語』に云はく、左衽は正しい禮に背いてをる。かくの如く古書によりても右の勝つてゐることは明かである。若し夫にも係らず尙ほ左を以つて勝れりとするならば、道士が儀式の際に行道する際に、何故に左方に旋らずして、右方に回轉るのであるか。國家の詔書を見ても、

右の如しと云うでないか。是等は皆天理自然の常道に順うてゐるので、自とかやうに右を主として來たのである。至乃

外、四異曰、

老君、文王之日爲、隆周之宗師、

釋迦、莊王之時爲、闍寶之教主、

内、四喻曰

伯陽、職處、小臣、忝、充、藏、吏、不在、文王之日、亦非、隆周之師、

牟尼、位居、太子、身證、特、尊、當、昭王之盛年、爲、閻浮、教主、至乃

【讀方】 外の四異にいはいはく。老君は文王の日、隆周の宗師たり。

釋迦は莊王のとき、闍寶の教主たり。

内の四喻にいはいはく。

伯陽は職小臣に處り、忝く藏吏にあたり。文王の日に在らず。また隆周の師にあらず。

牟尼はくらゐ太子に居して、身特尊を證したまへり。昭王の盛年にあたり、閻浮の教主たり。至乃



【字解】 藏吏 周の官名。又は柱史、柱下ともいふ。儒官にして、日本の大内記に類す。

【文科】 四異四喻の文。老子と釋尊の時代と地位の優劣論。

【講義】 外論の四異の中に云はく、老子は周の文王の世、即ち周代の初めであるから最も隆盛を極めた周朝の國師であるが、釋迦は是よりすつと後れて、周の第十六代莊王の時、印度の一小國たる屬賓國の教主に過ぎないと貶めてゐる。

之に對して内道の第四喻に云はく、老子の職は低く、僅に周の小役人を忝なうした丈で初代文王の世隆周の國師どころではなかつた。然るに釋尊は、出家以前には一國の王位を繼ぐべき太子の身分であり、出家しては天上天下に嚙むなき獨尊の證りを獲られた。そして支那の年代に配當すれば、周の第四世昭王の全盛時である。又小國の教主にあらずして閻浮提の凡てに行亘りて教へを布き給ふ大教主にて在す。至乃

外六異曰

老君降世始自周文之日訖于孔丘之時釋迦下生肇於淨飯之家當我莊王之世

内六喻曰

迦葉生桓王丁卯之歲終景王壬午之年雖訖孔丘之時不出姬

昌之世

調御誕昭王甲寅之年終穆王壬申之歲是爲淨飯之胤本出莊

王之前

開士曰孔子至周見老聃而問禮焉史記具顯爲文王師則無典

證出於周末其事可尋周初史文不載至乃

【讀方】 外の六異にいはいはく。

老君は世に降して、はじめ周文の日より孔丘のときになはれり。釋迦は生をくだして淨飯の家にはじまりて、わが莊王の世にあたり。

内の六喻にいはいはく。

迦葉は桓王丁卯の歳に生れて、景王壬午の年になふ。孔丘の時に訖ふといへども、姬昌の世にいでず。調御は昭王甲寅の年に誕して、穆王壬申の歳になふ。これ淨飯の胤なり。もと莊王の前にいでたまへり。開士のいはいはく。孔子、周にいたりて老聃をみて禮を問ふ。史記につぶさにあらはる。文王の師たることすなはち典證なし。周の末に出でたり。そのことたづねべし。周の初めの史文にのせず。至乃

【字解】一。迦葉 老子を指していふ。老子の本名は迦葉瞿摩羅であるといふ説による。

二。姬昌 周の文王のこと。文王の姓は姫、名は昌であるから。

三。調御 佛十號の一。具には無上士調御丈夫といふ。佛は猛獸を調順するやうに、一切の有情等の心を調へ給ふ故にこの名あり。

【文科】 六異六喻の文。老子と釋尊の時代の前後優劣論。

【講義】 外論の第六異に云はく、太上老君の此世に降誕あらせられたのは、周の文王の時代に始まり、そして終りの日は、實に孔子の時代である。此間數百年の間、老君は教へを垂れ給うたのであるが、釋迦の生れたのは、印度の一小國主たる淨飯王の家であつて、我々の周の莊王の治世に當つてゐるのである。

之に對して内道の第六喻に云はく、老子の生れたのは、周の第十九世桓王之丁卯の歳であつて、第廿世景王之壬午の歳に終つてゐる。孔子の時代まで生きてはゐたけれども、文王の時代なぞでは斷じてない。

然るに釋尊は、周の第四世昭王之二十六年即ち甲寅の年に誕生せられ、第五代穆王の五十二年即ち壬申の歳に入滅せられた。淨飯大王の後繼者であつても、其時代を云へば老子の生れた莊王の時代とは、遙以前である。

開士、説をなして云はく、孔子が魯より周に赴きて、禮のことに關して老子に問うたといふことは、『史記』に委しく記載してあるけれども、文王の師匠であつたといふやうなことは、何處にも其典據を求めるとは出來ない。即ち老子の生れた時代は孔子と同時代であるから周末の春秋戰國の時である。其事蹟ならば蹟けることが出来る。併し周の初代の文王の時代であるといふことは、どの文書にも記載する所はない。

外七異曰

老君初生周代。晚適流沙。不測始終。莫知方所。釋迦生於西國。終彼提河。弟子隄胸。群胡大叫。

内七喻曰

老子生於賴鄉。葬於槐里。詳乎秦佚之弔。責在通天之形。瞿曇出彼王宮。隱慈鵠樹。傳乎漢明之世。秘在蘭臺之書。開士曰。莊子内篇云。老聃死。秦佚弔焉。三號而出。弟子怪問。非夫子之徒。歎秦佚曰。向吾入見。少者哭之。如哭其父。老者哭之。如哭其

其子<sub>一</sub>古者<sub>二</sub>謂<sub>三</sub>之<sub>四</sub>、遁<sub>五</sub>天<sub>六</sub>之<sub>七</sub>形<sub>八</sub>、始<sub>九</sub>以<sub>一〇</sub>爲<sub>一一</sub>其<sub>一二</sub>人<sub>一三</sub>也<sub>一四</sub>、而<sub>一五</sub>今<sub>一六</sub>非<sub>一七</sub>也<sub>一八</sub>、遁<sub>一九</sub>者<sub>二〇</sub>隱<sub>二一</sub>也<sub>二二</sub>、天<sub>二三</sub>者<sub>二四</sub>免<sub>二五</sub>縛<sub>二六</sub>也<sub>二七</sub>、形<sub>二八</sub>者<sub>二九</sub>身<sub>三〇</sub>也<sub>三一</sub>、言<sub>三二</sub>始<sub>三三</sub>以<sub>三四</sub>老<sub>三五</sub>子<sub>三六</sub>爲<sub>三七</sub>免<sub>三八</sub>縛<sub>三九</sub>、隱<sub>四〇</sub>形<sub>四一</sub>之<sub>四二</sub>仙<sub>四三</sub>、今<sub>四四</sub>則<sub>四五</sub>非<sub>四六</sub>也<sub>四七</sub>、嗟<sub>四八</sub>其<sub>四九</sub>詔<sub>五〇</sub>曲<sub>五一</sub>取<sub>五二</sub>人<sub>五三</sub>之<sub>五四</sub>情<sub>五五</sub>、故<sub>五六</sub>不<sub>五七</sub>免<sub>五八</sub>死<sub>五九</sub>、非<sub>六〇</sub>我<sub>六一</sub>友<sub>六二</sub>、至<sub>六三</sub>乃<sub>六四</sub>。

【讀方】 外の七異にいはいく。

老君はじめて周の代に生れて、のちに流沙に遁く。始終をはからず、方所を知ることなし。釋迦は西國に生じて、かの提河にをほりぬ。弟子胸を捉ちて群胡大にさげぶ。内の七喩にいはいく。

老子は魏郷にむまれて、槐里に葬らる。秦佚が用を詳にす。せめて遁天の形にあり。墨墨はかの王宮にいで、慈鶴樹に隠れたまふ。漢明の世に傳はりて、秘に蘭臺の書にまします。開士のいはく、莊士の内篇にいはいく、老聃死して秦佚弔ふ。こゝに三號で出づ。弟子怪んでとふ、夫子の徒にあらざるかと。秦佚がいはいく、向に吾りて少者を見るに、これを哭することその父を哭するがごとし。老者これを哭す。その子を哭するがごとし。古にこれを遁天の形といふ。始はおもへらく、其人なりと。而にいま非なり。遁は隱なり。天は免縛なり。形は身なり。言ふこゝるは、はじめ老子をもて、免縛隱形の仙とす。今すなはち非なり。嗟その詔曲、人の情を取る。かるがゆへに死をまわかれず。わが友にあらず。至乃

【字解】 一。流沙 支那の北方より印度に至る間に於ける大沙漠を指す。『西域記』第十二によれば、墨薩旦那の東境の關防たる尼曠城を通りて東すれば、大流沙に入る。沙は則ち流漫、聚散風に隨ふ。人行迹なく、途に多く路に迷ふ。四遠茫茫として指す所を知るなし。是を以て、往來するに遺骸を聚めて之を記す。林水罕に熱風多し。風起れば、則ち人畜昏迷し、これに因りて病を成す。もつて瘴烟漲る大沙漠の光景の一般を知ることが出来る。

二。提河 具には阿爾多喀底、梵音アヤタワテイ(Ajivata)、無勝河と譯す。略して跋提河、又は提河といふ。ロラヌヤワテイ(Hiranyavati)河の俗稱である。中印度、拘尸那揭羅國にあり。

【文科】 七異七喩の文。老子と釋尊の終焉に關する優劣論。

【講義】 外論の第七異に云はく、太上老君は初の周代に生れ、晩年には『列仙傳』第六に出づる如く、尹喜とともに流沙の西に赴き、草木の實を食して生活したといふことであるが、其後の始終を測り知ることも出来なければ、又何處へ行かれたのやら、其方所も知ることとは出来ない。

老君の晩年はかやうに凡俗を超脱したものであつたが、釋迦は西方印度に生れ、彼の跋提河の畔に逝き、臨終の際彼の弟子達は胸を捉つて悲き、其信者の群胡は、大に其死を働哭した。釋迦の臨終は、かやうに平凡な人情臭いものであつた。

之に對して内道の第七喩に云はく、老子は晩年に往く所を知らずなどいふのは、虚偽

で、彼は頼郷に生れ、槐里といふ處に死んでゐる。夫はあの有名な『莊子』に出でゐる。老子の友人秦佚の弔の話で、詳かにせられてゐる。所謂通天之形云々と非難せられてゐる所が夫である。

然るに釋氏瞿曇は、初め王宮に出現し、終りに鶴林の下に入滅し給ふ。その事は後漢の明帝の世に經典によりて傳へられ、天子の圖書館たる蘭臺の藏書として秘藏せられてゐる。

開士説を立て、曰はく、『莊子』の内篇即ち養生主に云ふやう。老聃が死んだといふことを聞いて、其友人秦佚が悔みにゆき、世間の禮義に順じて三度號泣して、家の奥にも入らず、死體をも見ないで、直に引き返して出て來た。秦佚の弟子がこの卒氣ない有様を見て怪んで問う「老子は先生の舊友ではありませぬか。何故先生は御弔ひになるに、そんな卒氣ない態度をせられるのでありすまか、秦佚の云はく、私が今しがた家へ入つて様子を見ると、小者は老子の死を悲んで、追慕の涙にくれてゐることは、ちやうど其父の死を悲むやう、老者は亦其子を失うたやうに泣いてゐる。之を見て私も興が醒めた。實は古には老子の人物をもつて通天の形である。眞の隠士であると思つてをつたが、今は左様は思はぬ

抑も通天の通は隠である。即ち塵界から姿を隠すことである。天は人情の繫縛を免るゝこと。形は身を意味す。そこで通天の形とは、人情の縛れを免れ、身を塵の世から隠す所の仙人のことである。老子は實にこの免縛隱形之仙人であると思つたことであるが、今はさうではない。嗟かやうに近親の老少をして悲ませることは、老子が生前に、詔曲の心をもつて、常人の人情を迎へた爲めである。かくの如くんば、故意に死を招いたやうなもので死は寧ろ當然のことである。即ち生きてゐても死と選ぶことはない。左様な人は我友達ではない。至乃

【餘義】所引の『莊子』の文、本文と相違してゐる。『莊子』養生主第三に曰く「向吾入而弔焉、有老者哭之如哭其子、少者哭之如哭其母、彼其所以會之必有不斲言而言不斲哭、而哭者、是遁天倍情忘其所受、古者謂之通天之刑、此の意に依れば、老者の人達が老子の死を悲しむのは、特に死を悲めと遺言はせないが、彼の遺風が自と傳はりて此醜狀を演せしめたのである。是は天理に背きて俗情に囚へられたので、天理を通れた爲めに、逃れ難い刑罰を受けるといふ。さすれば「通天刑」とは、老子を貶したことになるのであるが、法琳の解釋には、免縛の仙人として讚めたことになつてゐる。是は上

に引く如く本文の上に相違があるので、彌天の道安の著『二教論』は、法琳の解釋と同じであるから、察する所、其『二教論』に據つたのであらう。其文に曰はく「莊周、稱老子曰、古者謂之遁天之形、始以爲其人、今則非人也、尙非遁天之仙、故有秦佚之弔、死扶風、葬槐里、」云々

但し何れにしても、結局老子を貶してゐることに變りはない。

第三科 十喻篇第五殘文

内、十喻答外十異

外從生左右異 一内從生有勝劣

内喻曰左衽則戎狄所尊右命者爲中華所尙故春秋云冢鄉無命介鄉有之亦左乎史記云蘭相如功大位在廉頗右頗耻之又云張儀相右秦而左魏犀首相右韓而左魏蓋云不便也禮云左道亂群殺之豈非右優而左劣也皇甫謐高士傳云老子楚之相人家于渦水之陰師事常縱子及常子有疾李耳往問疾焉嵇康云李耳從涓子學九仙之術檢太史公等衆書不云老子剖左

腋生既無正出不可承信明矣驗知揮戈操翰蓋文武之先五氣三光寔陰陽之首是以釋門右轉且扶人用張陵左道信逆天常何者釋迦起無緣之慈應有機之召語其迹也

【讀方】 内の十喻、外の十異を答す。外は生より左右となる一なり。内は生より勝劣あり。内に喻していはく。左衽はすなはち戎狄の尊ぶところ、右命は中華のたふところとす。かるがゆへに春秋にいはく。冢郷は命なし。介郷はこれあり。また左すや。史記にいはく。蘭相如は功大にしてくらゐ廉頗が右にあり。頗之を恥づ。又いはく。張儀相秦を右にして魏を左にす。犀首相韓を右にして魏を左にす。蓋しいはく。偏ならず。禮にいはく。左道亂群をばこれを殺す。あに右は優りて左は劣れるにあらすや。皇甫謐が「高士傳」にいはく。老子は楚の相人、渦水の陰に家す。事を常縱子にひとしくす。常子疾あるにおよんで、李耳ゆきて疾をとふ。稽康がいはく。李耳、涓子にしたがひて九仙の術をまなぶ。太子公等が衆書を檢するに、老子左腋をひらきて生るといはず。既に正く出でたることなし。承信すべからざることを明けし。驗に知んぬ。戈をふるひ翰を操るは、けだし文武の先、五氣三光はまことに陰陽の首なり。こゝを以て釋門には右に轉することまた人用を扶く。張陵左道す。まことに天の常に違ふ。何となれば、釋迦無緣の慈を起して、有機の召に應ず。その迹をかたるなり。至乃

【字解】 一、右命 命は命令。凡て上より下に向つて命ぜらるること。故に右命とは右を上とし命令の第四章 眞偽決判と異執誦

一に下る所とすること。

二。冢卿 六卿の長。即ち大宰相のこと。

三。介卿 介は助。左右大臣等の如く宰相を輔佐する公卿。

四。閻相如、廉頗 共に趙の臣。閻相如、藺文王の命を奉じて所謂連城の壁を奉じて秦に使し、

(紀元前二八三年)秦王の城を償ふの意なきを知りて、遂に璧を完うして歸り、又王を奉じて秦王と會飲し

た時、君を辱むることはなかつた。爲めに上卿となつて、將軍廉頗の右に位した。頗之を恥とし争はんとし

たが、後に互に和(紀元前二七九年)して君國の爲めに盡した。

五。張儀 魏の人。蘇秦と師を同うし、蘇が六國に相として合従(紀元前三三三年)して秦に當りたるに

對して、張は其後六國を連衡(紀元前三一一年)して秦に仕へしめた。秦の相となり又魏の相となりて卒す。

六。犀首 魏の公孫、秦に仕へて宰相となる。周の顯王三十七年(紀元前三三二年)秦王の命を受けて、

齊魏を欺いて共に趙を伐たしめた。

七。左道 邪道の意。

八。皇哺謹 名は子安。玄安先生といふ。晋の人である。「高士傳」十卷を著はす。

九。相人 占者のこと。或は曰く、地名、又は應接役のことであるといふ。今は第一説に隨ふ。

一〇。稽康 東晋の大夫、竹林七賢人の一。名は稽叔夜。「賢聖高士傳」三卷を著はす。

一一。五氣 五運のこと。一、太易——未だ氣を見ざる所。二、太初——氣の始。三、太始——形の

始。四、太素——質の始。五、太極——天地の兩儀を生ずるもの。以上の氣と形と質と相離れざる所を渾  
池といふ。五氣通運するを天地の元となす。清は陽をもつて發する故に、氣上りて天となり、濁は陰をもつて凝  
る故に氣は下りて地となる。要するに五氣とは、天地生成の原質である。

一二。三光 日、月、星。

一三。張陵 後漢の順帝の世の人。沛に生る。鶴鳴山に登りて鬼神を使ふ術を得、道書を作り、病  
人をして米を寄贈せしめて、悔過せしめ、五斗米を取りて弟子となし、男女合氣の術を教へた。かくして愚民  
を惑亂した。米賊又は五斗米道と稱せらる。陵死し、涼張魯祖父の術を傳へ、漢中において自ら師君と  
稱し、亂をなし魏の曹操に滅さる。又中元年中鉅鹿の人、張角自ら黃天部師と稱し、皆な黃巾を着  
けて印となし、遂に張魯に應じた。之を道教の三張といふ。

【文科】 標章、第一異論の文左(道教)右(佛教)の優劣論。

【講義】 内道の十論、是は外論の十異に對する解答である。

外論は、老子と釋迦との生れ方が左右の異ひがあることを第一の問題として擧げてある。  
是に對して内道は其左右の生れ方に於いて勝劣がある。右脇より生れた釋尊は勝れ、左脇  
より生れた老子は劣つてゐるといふのである。

直に内論を明す、内論に云はく、左衽は文化の開けない戎狄の尊める所で、右命は支那

中國の尙むる所である。夫故に『春秋』には「大宰相には上下の命令はないが、左右の大臣には、上下の命令がある。即ち上下の別がある。それでは道理上左ふではないか云々。」とある『史記』に云ふやう。趙の蘭相如は王を補けて秦王に會合した時、王をして少しも負を取らせなかつた功の大きいなる爲めに、上卿の位となり、將軍廉頗の右(上位)に出た。廉頗は之を自分の恥とした。又云はく、宰相張儀は、秦國を右とし、魏國を左とした。又犀首相は韓國を右にし、魏國を左とした。之といふは外のことではない。親しい國を右とし疎い國を左とするので、疎い國には不親切であるといふのである。

『禮記』に云はく、「左道の者が徒黨を結んで亂を醸せば、夫等を撃つて殺す」とある。以上の例によりても右は優り、左は劣つてゐるでないか。

皇傭諡といふ人の著はした『高士傳』に依れば、老子は楚國の占人で渦水の北に住居し常椀子といふ人を師として事へた。常子が病氣に罹つた時に、老子が行いて師の疾を見舞うたと書いてある。又老莊の流れを汲んだ竹林七賢人の一人たる嵇康は「老聃は涓子といふ人から九仙の術を學んだ」と云うてをる。

かやうに『史記』を書いた太史公司馬遷等の衆の典籍を檢べて見ても、老子は楚國の相

人であるとか、九仙の術を學んだと云ふやうなことを記載してをるが、玉女の左腋を割いて産れたといふやうなことは書いてない。既に正しい出據がない以上は、左様な説は妄誕不稽の甚しいものであつて、信するに足らぬものであることは明かである。

驗かに知る、武人の戈を揮ひ、文人の翰を執る皆な右を先としてゐる。是れかの太易、太初等の五氣、日月星辰の三光が陰陽の首めであると相應してゐるのである。夫であるから釋尊が摩耶夫人の右脇から轉生れ給ふたのは、また右を尙ぶ世間の習俗と相應したのである。彼の張陵なぞの左道の教は、天理に逆うてをることが解る。何故に釋尊が右脇より生れ給ふたかと云へば、元釋尊の目的とし給ふ所は、恰も一月天に耀いて萬水に其影を宿すやうに無縁平等の大慈悲をもつて、自然の理に従つて有縁の機の召請に應じて攝化を施し給ふの外はない爲めに、其根本の意味から流れ出た迹を示したものである。

【餘義】本文初めの『春秋』(左傳昭公四年の下)の文「冢卿無命、介卿有之不亦左乎」は現行の文には「南遺謂三季孫曰、叔孫未乘路、葬焉用之、且冢卿無路、介卿以葬不亦左乎」とあり、此文意は、「南遺が主君の季孫に申すやうは、叔孫は生前すら路車に乗ることの出来ない身分なるに、葬るに路を用ゐるはどうして出来ませうぞ。

且つ上卿すら路車がないのに、次卿の身分で路を用ひて葬るは、道理に違ひはありませぬかであるから、全く意味は違ひてゐるのである。法琳師の用ゐられしは別本なるか、後の君子を俟つ。

夫釋氏者天上天下介然居其尊三界六道卓爾推其妙至

【讀方】 釋氏は天上天下に介然としてその尊に居す。三界六道卓爾としてその妙を推す。至乃

【文科】 第三喻の文。釋尊の獨尊を示し給ふ。

【講義】 夫れ大聖釋尊は、天上、天下、さながら雪山の天に沖るやうに其至尊の位にゐらせられ、三界六道の中にありて、並ぶものなき卓越者として、皆その妙なる威徳を仰ぎ奉るものである。至乃

外論曰老君作範唯孝唯忠救世度人極慈極愛是以聲教永傳百王不改玄風長被萬古無差所以治國治家常然格式釋教棄義棄親不仁不孝閻王殺父翻得無愆調達射兒無聞得罪以此

導凡更爲長惡用斯範世何能生善此逆順之異十也

内喻曰義乃道德所卑禮生忠信之薄瓊仁譏於匹婦大孝存平不價然對凶歌笑乘中夏之容臨喪扣盆非華俗之訓原壤母死相視而笑莊子妻死扣盆而歌也故教之以孝所以敬天下之爲人父

也教之以忠敬天下之爲人君也化周萬國乃明辟之至仁形于四海實聖王之巨孝佛經言識體輪廻六趣無非父母生死變易

三界孰辨怨親又言無明覆慧眼來往生死中往來多所作更互爲父子怨親數爲知識知識數爲怨親是以沙門捨俗趣真均庶

類於天屬遺榮卽道等含氣於己親行普正之心且道尙清虛爾重恩愛法貴平等爾簡怨親豈非惑也勢競遺親文史明事齊桓楚

穆此其流也欲以訾聖豈不謬哉爾道之劣十也至乃

【讀方】 外論にいほく。老君を範となす。たゞ孝に忠、世を教ひ人を度す。慈をさばめ愛を極む。こゝなもて聲教ながく傳へ、百王改らず。玄風ながく被らしめて、萬古差ことなし。このゆへに國をなさめ家をなさむるに常然たり。格式たり。釋教は義をすて、親をすて、仁ならず、孝ならず、閻王父を殺せる、翻して



徳なしとく。調達兄を射て罪を得たりと聞ことなし。此をもて凡を導く、さらに惡を長すことをなす。斯をもて世に範とする。何ぞよく善を生ぜんや。これ逆順の異なり。

内に諭していはく、義はすなはち道徳の卑うするところ、禮は忠信の滑きより生ず。環仁、匹婦をそしり、大孝は不匱に存す。然ふして、凶に對ひて歎ひ笑ふ。中夏の容に乖ふ。喪にのぞんで盆をたたく、華俗のなしへにあらす。原壤、母死して踞してうたふ。孔子まつりをたすけてそしらす。子桑死すると、かるがゆへに之を教ふるに孝をもてす。天下の人父たるを敬するゆへなり。之を教ふるに忠をもてす。天下の人君たるを敬するゆへなり。化萬國にあまれし、すなはち明辟の至るなり。仁四海にあらはる、まことに聖王の巨擘なり。佛經にいはく、識體六趣に輪廻す。父母にあらざることをなし。生死三界に變易す。たれか怨親を辨へん。又いはく、無明慧眼をおほふて生死の中に来往す。往き來りて多く所作す。さらに互に父子たり、怨親しばん、知識たり。知識しばん、怨親たり。こゝをもて沙門、俗をすて、眞におもむく。庶類を天屬にひとしくす。榮をすて、道につく、含氣を己親にひとしくす。普く正しき心を行じて、普く親志を等しくす。また道は清虛を尙ふ。それ恩愛を重くせんや。法は平等をたふとぶ、それ怨親を簡はんや。豈惑にあらすや。勢競親をわすれ、文史事をあかす。齊桓楚種、これ其流なり。もて聖を替んとおもふ。豈譲れるにあらすや。それ道の劣なり。乃至

- 【字解】一。闍王 阿闍世王、釋尊當時の王舍城の主。第二卷五六〇頁参照。
- 二。調達 釋尊の從弟。山邊著「佛弟子傳」に委し。
- 三。環仁 小仁の意。

四。不匱 乏しからずの意。富貴のこと。

五。明辟 辟は天子諸侯の稱。こゝでは明君といふ意。

六。庶類 諸の生類。一切の有情のこと。

七。天屬 父母のこと。

八。含氣 氣を含める者。衆生のこと。含識に同じ。

九。勢競 勢は威力の義。競は争ひの義。然してもものなりゆき。

一〇。齊桓 齊の桓公のこと。桓公の廿七年に公の妹にして魯に魯の魯公に嫁きたる哀姜が、公子の慶父と情を通じて、魯公を殺さしめ、情夫慶父を立てやうとしたが、桓公は交親國の難を救はんが爲めに親を忘れて、妹、哀姜を殺して魯公を立てた。

一一。楚穆 楚の穆王。諱を商臣といふ。宮衛兵をもつて父成王を圍み、遂に父王をして自ら絞れしめ、商臣自身立つて王位に即位した。之を穆王となす。

【文科】第十異喻の文。怨親平等の佛教の眞義を述ぶる一段。

【講義】外論にいふ。太上老君は、萬人の爲めに模範を示して、唯忠孝の道をもつて、邪に奔る世間を救ひ、人々を度ひ、慈みの限をつくして愛の極みを盡された。夫が爲めに其芳ばしい名聲と、尊い教訓は永へに傳へられ、代々の君王も百世の久しきに互りて、此

道を改めることなく、かくて幽玄い遺風は、長く世に行はれて、千萬年に及びても變ることとはない。所以に此教へを以つて大は一國を治めるにも小は一家を齊へるにも、少しも異うことはない。即ちどこまでも正しい規矩である。然るに釋迦の教は之に反して、教主の傳記から見ても、自分の解脱の爲めに、國民に對する義理を捨て、又老いたる父王を棄てた。是は國民に對しては不仁であり、親に對しては不孝の子である。又其教へを奉ずる側から云へば、阿闍世王は父を殺しながらも、廻心すれば罪はないと説き。提婆達多の如きは、從兄たる釋迦を射ても、罪を得たと聞いたことはない。かやうな教へをもつて一般世間の人々を導くならば、益罪惡を増長せしめるばかりである。かゝる惡法を用ゐて、世間の軌範とするならば、どうして善を榮えしめることが出來やうぞ。正に木によりて魚を求めらるやうなものである。此れ道教は正道に順じ、釋教は正道に逆うてゐる相違の第十である。

上の外論に對する内諭に曰はく、今道教の意によれば、義を立てるといふことは眞の道徳から云へば卑しむべきものであり。禮は忠信の薄い所から生じた虚飾に過ぎない。そして小な仁愛は匹婦の行ふ所で、士君子の齒するに足らぬもの、そして大孝即ち大仁は富貴

を得る爲めに外ならぬと。是れ實に汝等の主張する所である。

かやうに向ふ見すの説をなす汝等の實際上のことは、どうであるかと云へば矢張り其説の如く奇矯に陥りてをるのである。即ち近親の不幸に對して歌ふたり笑ふたりするのは、第一に中夏の風俗に背いてをるのでないか。或は喪にありながら盆を叩いて歌うといふことは、華國の風習ではない。——莊子の徒たる原壤は、其母を喪ふや、棺に跨りて歌ふた。孔子は其喪祭に會しながら夫を非難しない。子桑が死んだ時、子貢が弔ひにゆくと、四人の子が相視て歌うてゐた。又莊子は其妻の死んだとき盆を叩いて歌ふた。此中孔子、子桑子貢等は是等の名を假りて莊子が自分の思想を述べたので、是全體が道教の徒の奇矯な例を擧げたのである——かやうな放逸無慚な徒輩の爲めに孝道を教へるのである。即ち天下の民衆をして其父を敬ふことの尊い道たるを知らせん爲めである。又是等に教へるに忠の道を以つてするのは、天下の人君を敬ふ道を知らしめる爲めである。其教化が廣く萬國に行き互ふことは、明君が極度まで其徳を發揚したものであり、仁慈が雨のやうに四海の果までも濕すのは實に聖王の巨いなる孝道である。

佛經に曰はく、吾々の識體は久遠の昔から六道を輪回りて來たのであるから、一切の有

情は皆父母でないことはない。又我等の生死は三界に互りて變易つてをるのであるから三界のどの有情に對しても皆深い因縁を結んである。故にあれには怨がある。是は親しいといふやうに怨親の區別をつける譯にゆかぬ。

又言はく、無明の煩惱が霧のやうに生死をいづる智慧の眼を覆ひ眩して、幾度もく生死の巷に往來するのである。かやうに生死海に往來して互に多くの様々なる業を造り、互に父子となり、敵も味方も數々互に知識となつて教へ導き、知識が亦數怨となり味方となつた。是道理を會得して沙門は世俗の生活を擲つて眞諦の出世間道に入り、怨親平等の天地に悟入るのである。即ち一切衆生をあげて我父母と均しく敬ひ、浮世の榮華を遺て、證りを得る所の智慧に越く。そしてあらゆる有情を自分の親と等しくするのである——平等の心、即ち萬人を等普に親しむ志を實行すること——。また吾等の道として尙むべきものは、人情の穢れを離れた清淨恬淡の心である。然るに汝等は人間の恩愛といふものを重く見て、夫れに囚へられてをる。又法と云へば一味平等を貴ばねばならぬ。然るに汝等は小さい人情に従つて怨親を分ける。夫は惑ひの甚しいものでないか。ものゝ成行により義によりて、親を滅ぼすことは、歴史の明かに記載する所で、彼の齊の桓公、楚の穆王など

が、其流である。教を奉じた者が罪を犯すことは、何も佛敎のみに關することではない。佛敎の主とする所は怨親平等の道である。我等の迷妄の見解を翻せば、そこに平等の一道が感得せられるのである。かゝる深遠なる旨趣を辨へずして、大聖の教へを譬らんとするは、認れるの甚しいものでないか、是れ爾の道の劣つてゐるものゝ第十である。至乃

第四科 九箴篇第六

二皇統レ化 須彌四城經云應聲菩薩爲 居 淳風之初 三聖立言 經云迦葉 爲老子 儒童爲孔子 已澆之末 玄虛沖一之旨 黃老盛其談 詩書禮樂 子光淨爲顏回也 興 明 謙 守 質 乃登 聖之階 梯 三畏 五常 爲 人天之文 周 孔 隆 其 教 明 謙 守 質 乃登 聖之階 梯 三畏 五常 爲 人天之由 漸 蓋 冥 符 於 佛 理 非 正 辯 之 極 談 猶 訪 道 於 瘖 聾 應 方 而 莫 窮 遠 邇 問 津 於 兔 馬 知 濟 而 不 測 淺 深 因 斯 而 談 殷 周 之 世 非 釋 教 所 宜 行 也 猶 下 熾 威 赫 耀 童 子 不 能 正 目 而 視 迅 雷 奮 擊 儒 夫 不 能 張 耳 而 聽 是 以 河 池 涌 泛 昭 王 懼 於 誕 神 雲 霓 變 色 穆 后 欣 亡 聖 周 書 異 記 云 昭 王 二 十 四 年 四 月 八 日 江 河 泉 水 悉 皆 泛 濫 穆 王 五 豈 能 越 葱 河 而 稟 化 驗 雪 嶺 而 效 誠 淨 名 云 是 旨 者 過 非 日 月 咎 適 欲 窮 其

鑿察之辯、恐傷吾子混沌之性、非爾所知、其旨一也

【讀方】二皇化を統べて、須彌四域經にいはく、應覺菩薩を女媧とす。淳風のはじめに居り、三聖言を立て、空寂所問く、迦葉を老子とす。佛童を光淨とす。已澆の末を興す。支虛沖一の旨、黃老その談をさかりにし、詩書禮樂の文、周孔子とす。光淨を顔回とす。已澆の末を興す。支虛沖一の旨、黃老その談をさかりにし、詩書禮樂の文、周孔子とす。その教を降くす。謙を明にし、賢をまもる。すなはち聖にのほる階梯なり。三皇五常は人天の由漸とす。けだし冥に佛理にかなふ。正辨の極談にあらず。なほ道を瘖聵に訪ふがごとし。方を摩いて遠逝を窮ることなし。津を兎馬に問ふ。濟るを知りて淺深をばからず。斯によりて談するに、殷周の世は釋教のよろしく行すべき所にあらず。なほ炎威耀を赫す。童子目を正して視ることあたはず。迅雷奮ひ撃つ。儒夫、耳を張りて聽くことあたはず。是をもて河池湧き浮ぶ。昭王、神を誕することを懼る。雲霓いろを變ず。穆后聖を亡ぼんことを欣ぶ。周書異記にいはく、昭王二十四年四月八日、江河泉水ことごとくみな泛溢せり。穆王、あによく葱河をこえて化五十二年二月十五日、暴風おこりて樹木摧けおれ天くもり雲黒くして、白虹の怪あり。穆王、あによく葱河をこえて化なうけ、雪嶺をこえて誠を效さんや。淨名にいはく、これ盲者の過にして、日月の咎にあらずと。たましくその鑿察の辨を窮めんとす。恐くば吾子混沌の性を傷む。それ知る所にあらず。その旨一なり。

【字解】一、已澆之末、人情薄く澆つた末世。

- 二、支虛沖一、支は玄妙の徳、老子に玄之又玄、衆妙之門といふは是くある。虚は虚無恬淡寂莫無爲の大道。黄老家の極談である。沖は虚の義、道の體は虚であるが、之を用ふれば窮りなし。或時は盈ち、或時は盈たず。上の支虚沖一致の旨は、黄老家の談する所である。
- 三、周孔、周は周の武王の子を輔けたる聖人周公旦のこと。孔は孔夫子。

四、三長、君子に三長あり、天命と大人と聖人の言とである。

五、五常、禮記「三論語」爲政篇に出づ。

六、由漸、由は因、漸は事の由來。故に由漸とは因りて來る基本、階梯といふ程の意。

七、兎馬、經に三獸河を渡る。兎による。兎は水上を渡り、馬は兎よりも深く身を没して泳ぐけれども、足は尙ほ水底に届かぬ。然るに象はドンシ〜と水底を踏んで渡る。兎馬は法河を渡れども象のやうに佛性の源底を盡すことが出来ないといふのである。

八、淨名、維摩居士の稱。こゝでは「維摩經」を指す。

【文科】周世無機の文、周世に佛敎を信する機類なかりしことを述ぶ。

【講義】伏羲、女媧の二皇が萬民の教化を司り——「須彌四域經」に云はく、伏羲氏は應聲菩薩の垂迹、女媧氏は吉祥菩薩の垂迹と——淳朴な風俗の初期にありて敎を垂れ、老子、孔子、顔回の三聖は言敎を立て——「空寂所問經」に云はく、老子は迦葉菩薩、孔子は儒童菩薩、顔回は光淨菩薩の垂迹である——末世の濁つた時代にありて、道を興した。騒がしい人爲の多端を離れて、幽玄い虚無恬淡の旨趣を盛んに談するは黃帝、老子であり、詩書禮樂等の六藝の文敎をもつて親しく一般人を敎へ導かんとするは、周公、孔子である。即ち傲慢を離れて、謙遜の意義を明かにし、浮華を避けて質朴の氣風を守ることは、聖人

の域に登る階梯である。君子の三の畏れ、仁義禮智信の五常の如きは、人間天上の人々がよつてもつて道に進む階段である。そして願うには暗々裏に佛教の道理に叶ふてゐるのである。さりとて元より正しい道の極談ではない。云はゞ瘡や腫に道を訪ねるやうなもので、方角丈は指し示して呉れても、遠い近い等の細な點を窮め盡して教へてくれないやうなものである。かの津を兔や馬に問ふが如く、彼等は河を渡れども、大象のやうに底を極めて渡らず、唯水の表面を泳ぐ丈であるから、水の深淺を知らして呉れる譯にはゆかぬ。儒教や道教はこの兔と馬に當るのである。是によりて思うに、殷や周の時代には未だ機縁が熟しない爲めに、佛教が弘まることが出来ないのである。譬へて云へば、炎威焼くが如き太陽に向へば、童子などは正視することが出来ず、又は迅雷はためきて、雲を劈き鳴り轟く時には、臆病な人間は、耳を張つて聞くことが出来ないやうなものである。夫であるから釋尊印度に誕生せらるゝの日、此地の河や池の水が溢れた奇瑞を見て、周の昭王が、西方に神が誕生したと懼れ、入滅の日暴風樹木を折り、天日暗く、白虹空にかゝるといふ怪異を見て、穆王が西方の聖人が隠れるといふて欣ばれたといふことは、上述の時機純熟せぬことを證據立てゝゐるのである。されば此時代に於いては、どうして葱嶺流沙の難を

越えてくる佛教の化益に浴し、雪山の險を踰えて渡來する大法の眞實に觸れることが出来やうぞ。

『維摩經』佛國品に云はく、日月の光りの見えないのは、盲者の爲であつて、日月の咎ではないと。佛教の光りに浴することの出来ないのは、佛教の過ではなくして、機の咎である、尙ほ是等の事に關し、進んで細な點に立ち至りて言論を弄するならば、ちやうど『莊子』にある喩へのやうに、儻と忽の二帝が中央の帝渾沌の徳に報せんとて、彼の耳目等のなきを見て、夫等の七竅を穿ち終ると渾沌は遂に死んだといふやうに、今も餘り微に互り細を穿つならば、汝等の混沌の性を傷げんことを恐れることである。即ち却つて汝等の佛性を破る恐れがある。誠に佛教の深い道理は汝等の知ることの出来ないものである。即ち上に擧げた日月を見ることの出来ない盲人と一つである。

内建造像塔指二

自漢明已下訖于齊梁王公守牧清信士女及比丘比丘尼等冥感至聖目覩神光者凡二百餘人至如見迹萬山浮漚滬瀆清臺

之下觀ニ滿月之容ニ雍門之外觀ニ相輪之影ニ南平獲ニ應於瑞像ニ文宣感ニ夢於聖牙蕭后一鑄而剋成宋皇四摸而不就其例甚衆不可具陳豈以爾之無目而斥彼之有靈哉

【讀方】 内に像塔を建造する指の二。漢明より已下、齊梁に在るまで、王公守牧清信の士女、および比丘比丘尼等、冥に至聖を感じ、目に神光を視る者およそ二百餘人、あとを萬山に見、羅漢潭濱にうかべ、清盤のもとに滿月の容を觀、雍門の外に相輪の影をみるが如きに至る、南平は應を瑞像にえ、文宣は夢を聖牙に感ず。蕭后ひとたび鑄て剋成し、宋皇四摸して就す。その例はなほた衆し。具に陳ぶべからず。豈なんちが無目をもて、しかもかの有靈を斥はんや。

【字解】 一。觀ニ神光者凡二百餘人 于寶の「搜神記」臨川の「冥驗錄」、微應の「冥祥幽明錄」、太宗の「感應傳」等に載する奇瑞不思議の事實を指す。

二。萬山 地名、嘉州檀溪寺の金像は、彌天の道安の作であるが、夜なく萬山に赴かれ、明ければ檀溪寺に歸る。山の一石山に一足相を現せられたといふ傳説あり。「廣巧明集」第十七。

三。潭濱 水江、四晉の愍帝建興元年に吳郡の松江に石像二體浮び上る。朱應といふ居士ありて之を支通寺に安置した。この石佛に背銘あり、一は惟衛、二は迦葉。「廣弘明集」十七「法苑珠林」廿等參照。

四。清臺 清涼臺のこと。後漢の明帝の時に、天竺の摩騰法師が釋迦像を將來せるを、帝は之を畫工に

描かせて清涼臺中に安置された。「佛祖統記」第五十四「法苑珠林」第廿。

五。滿月之容 佛像、釋尊の相好は衆星の間をゆく滿月のやうであらせられたと經文にあるによる。

六。雍門之外 洛陽の西門のこと。後漢の明帝の時、摩騰法師の爲めに城の西雍門の外に白馬寺を建てた。是れ支那伽藍の初めである。

七。相輪 佛塔のこと。「釋譯名義集」七に「僧祈」の文を引いて曰く「佛、迦葉佛の塔を造り、上に盤蓋を施し、長へに輪相を表はす。經中多く相輪といふ。人仰望して瞻相するを以てなり。」之によりて見れば、相は觀るの意にて、輪相を仰ぎ觀るといふ意味で、その種の佛塔を相輪塔といふ。

八。南平 南平王のこと。「辨正論」三「十代奉佛篇」に王の瘦信感應を載す。

九。文宣 齊の文宣皇帝のこと。「法苑珠林」三十に帝が佛牙を夢みし後に、正しく佛牙の渡漢となりしことを記載す。

一〇。蕭后 齊の大祖高皇帝を指す。帝「法華經」を手寫し、般若を誦し四月八日には常に金像を鑄た。帝は蘭陵の人にして性は蕭である。后は君であるから帝を蕭后と稱したものであらう。「辨正論」三參照。

一一。宗皇 宋太宗明皇帝、南宋の第六代の君、文帝の第十一子である。帝嘗つて丈八の金銅像四軀を鑄造せられたが成らず、更に丈四の像を鑄成して功成る。

【文科】 内建造像塔指の文中、外論細末注文佛敎流布の奇瑞を述ぶる一段。

【講義】 内道に於いて、佛像、佛塔を建立するに就いて、其趣意を指定する第二篇。

抑も佛教渡來の時、即ち後漢の明帝から齊梁の時代まで大凡五百年の間、諸王、公卿、群守、又は信男、信女、比丘、比丘尼等が、心に如來の御心を感得して、まのあたり神光を視まつた者は凡そ二百餘人と稱せられてある。佛陀の遺跡を萬山の地に現はし奉り、滬濱の地に佛像の光りを輝かして、萬人の崇敬をいたし、又明帝の時代には、清臺殿に佛像を安置して、さながら清涼なる満月の容を見奉り、宮門の一なる雍門の外に白馬寺の相輪塔の影を仰ぐといふ盛大を來したことである。南平王の如きは奇瑞ある佛像に向ひ奉りて感應を得、齊の文宣帝は、佛牙の渡來せんとする前に夫を夢み、齊の蕭王即ち太宗は、一度大佛像を鑄んと企て、直ちに完成し。宋の太宗の如きは、四度までも佛像を鑄奉つたが遂に出來上らなかつた。かやうな例は甚だ多くして擧げて數へることの出來ない程である。是等は決して無意味に像塔を建立したのではない、如來の御心が其人々の心に感應し、其喜びの餘り發現せられたものである。爾等はこの佛光を拜む眼をもとめ心靈上の盲人の癖に、どうして彼等像塔した人々の尊い信念を斥けることが出來やうぞ。

然德無不備者、謂之爲涅槃、道無不通者、名之爲菩提、智無不周

者、稱之爲佛陀、以此漢語譯彼梵言、則彼此之佛照然可信也、何以明之、夫佛陀者、漢言大覺也、菩提者、漢言大道也、涅槃者、漢言無爲也、而吾子終日踐菩提之地、不知大道、即菩提異號也、稟形於大覺之境、未聞大覺、即佛陀之譯名也、故莊周云、且有覺者、而後知其大夢也、郭註云、覺者、聖人也、言患在懷者、皆夢也、註云、夫子與子游、未能忘言、而神解、故非大覺也、君子曰、孔丘之談、茲亦盡矣、涅槃、寂照、不可思議、不可智知、則言語斷而心行滅、故忘言也、法身、乃三點四德之所成、蕭然無累、故稱解脫、此其神解而患息也、夫子雖聖、遙以推功、佛何者、按劉向古舊二錄云、佛經流於中夏、一百五十年、後老子方說五千文、然則周之與老、並見佛經所說、言教往、往可驗、至乃

【讀方】 しかるに德として備らざる者なし。之をいって涅槃とす。道として通ぜざるものなし。之を名けて菩提とす。智として周からざる者なし。之を稱して佛陀とす。この漢語をもてかの梵言を譯す。すなはち彼此の佛、昭然として信すべきなり。何を以てか之を明すとすれば、それ佛陀といふは、漢には大覺といふ。菩提といふは、

漢には大道といふ、涅槃といふは。漢には無爲といふ。しかるに晋子ひめもすに菩提の地をふんで大道すなはち菩提の異號なるを知らず。形を大覺の境にうけて、未だ大覺すなはち佛陀の譯名なることを閑はず。かゝるがゆへに莊周云また大覺あれば而して後にその大夢をしろ。郭が註にいはいはく、覺は聖人なり。いふこゝろは愚癡にあるはみな夢なり。註にいはいはく、夫子と子游といまだ言を忘れて神解することあたはず。かゝるがゆへに大覺にあらず。君子のいはいはく、孔丘の談こゝに亦つきぬ。涅槃寂照、識として識るべからず。智として知るべからず。すなはち言語たえてしかも心行滅す。かゝるがゆへに言を忘るゝなり。法身はすなはち三點四徳の成するところ、蕭然として死累なり。かゝるがゆへに解脫と稱す。これその神解として愚息するなり。夫子聖なりといへども、はるかにもて功を佛にゆづれり。何んとなれば、劉向が古書二録を按ずるに、いはいはく、佛經中夏に流れて一百五十年の後、老子まさに五千文をとく。然れば則ち周と老とならびに佛敎の所説をみる言教往々に驗つべし。

【字解】 一。三點 佛の三徳のこと。第一、法身の徳、佛は法性に隨つて成佛する故に普遍平等にして不増不減である。之を法身徳といふ。第二、般若徳、佛は絶對平等の智慧を有する方面をいふ。三、解脫徳、佛は生死を脱して一切に自在を得たまへる方面をいふ。この三徳は相關して離れず、恰も伊字(伊)の三點のやうであるといふので此三徳を三點といふ。

二。四徳 佛の四徳。淨、樂、我、常をいふ。

三。劉向古書二録 劉向は前漢成帝の時の部水使者、光祿大夫であつた。普く古書を涉獵して『列仙傳』を著す。黃帝より以來二代の間に仙道を得し者七百餘人を得、その中虚實を檢閲して一百四十六人

を撰した。而もその中に佛經を見たものが七十四人あつたとのことである。『廣弘明集』第十一卷參照。古書二録といふは解し難し。『列仙傳』を指すか、或はこの書の外に他の一書ありしか、明かでない。

【文科】 内、建造、像、塔、指の文中、正しく内蔵の文である。菩提、涅槃の意義を明す一段。

【講義】 然るに苟も徳と名けらるゝものならば、如何なる徳をも備へないものはないと云ふのが佛敎に云ふ所の涅槃である。又如何なる敎にも行互つてをらぬことのないのが、佛敎に云ふ菩提である。即ち菩提とは眞證に至るべき智慧をいふ。そして此一切智を周く備へてゐる人格が佛陀である。此等の漢語をもつて彼涅槃、菩提等の梵語を譯すれば、印度と支那に云ふ所の佛陀の意義は明かに信受することが出来るのである。何故かと云へば、佛陀は漢には大覺と譯す。菩提は大道と譯す、涅槃は無爲と譯す、さすれば汝等老子の徒は、既に菩提の地を踐んでゐるのである。即ち日がな一日菩提と離れることは出来ない。夫にも係らず、汝等のいふ所の大道が菩提の別名であることを知らずにある。又大地から樹木の生へるやうに、其身を大覺の境地から稟けてゐながら、其大覺といふものは、佛陀の譯名であることに閑れない爲めに、佛陀を毀らんとするのである。

故に莊周は、「大覺をもつてゐる者にして初めて大夢を知る」というてをる。郭象は之を



註釋して、「覺とは聖人のことである。其意味は、懐に心配をもつてゐるものは皆な夢である」と云ふ。是は聖人にして始めて迷夢の迷夢たるを知りわけるといふのである。夢に没してゐるものは、夢を知らない。夢から醒めた所で、初めて夢を知る。夢とは患へのことを指すといふ。

更に『郭註』にいふ。「孔子と其弟子の子游とが、未だ言葉に拘泥んで、神に深く解了することが出来ない。だから大覺といふことは出来ない」と。此に公平なる君子説をなして云はく、孔子の教は、こゝまで盡きてゐる。此上一步も出ることには出来ない。抑も佛教に云ふ所の涅槃の境、寂なる智慧の照す所は、いかなる凡人の識も識することは出来ない。凡夫の智慧では如何なる智慧でも知るとは出来ない。則ち言語断へ、心の行きの滅び盡した天地である。即ち全く言を忘れた所である。この境地に悟入した所が法身であるが、此法身は法身、般若、解脱の三徳、常樂我常の四徳が圓に備つた所で、大虚空の如く何物にも累はされることはない。夫故に解脱といふ。この心に證解るといふことは、患への夢が消えることである。老子、いかに聖人と呼ばれても、其勝れた功績を釋尊に譲りて、遙かに後に墮若たらねばならぬ。何故かと云へば、前漢の劉向の古録を案て見るに、佛經が支那

に渡りて一百五十年後に、老子がかの道德五千文を説いたと云ふてある。そして又『莊子』、『老子』の内容を検べて見るに、佛典を見て、其影響を受けた跡が處々に見えてある。是は一考すべき問題である。至乃

正法念經云、人不持戒、諸天減少、阿修羅盛、善龍無力、惡龍有力、惡龍有力、則降霜雹、非時暴風、疾雨五穀不登、疫疫競起、人民飢饉、互相殘害、若人持戒多、諸天增足、威光修羅減少、惡龍無力、善龍有力、善龍有力、風雨順時、四氣和暢、甘雨時降、百穀稔豐、人民安樂、兵戈戢息、疾疫不行也。至乃

【讀方】 至正法念經にのたまはく、人戒をたもたざれば、諸天減少し阿修羅盛きかんなり、善龍からなし惡龍からあり。惡龍からあれば則ち霜雹をくだし、非時の暴風疾雨ありて、五穀少のらす。疾疫さほひ起りて、人民飢饉し、たがひにあひ殘害す。もし人戒をたもてば、おほく諸天威光を増足し、修羅減少す。惡龍からなし善龍からあり。善龍力あれば、風雨とくに順し、四氣和暢なり。甘雨時にくだりて百穀ゆたかなり。人民安樂にして兵戈戢息し、疾疫行せざるなり。至乃

【文科】 内教爲治本指の文、正法世に行はるれば、人民榮え、邪法行はるれば人民衰頹することを明す

一段である。

【講義】『正法念經』に云はく、人々が戒法を守らずして、放逸無慚なれば、諸天の勢力衰へ、阿修羅の力が盛んとなり、善龍力を失ひ、惡龍が跋扈する。かやうに惡龍が力を獲るに至れば、時ならぬ霜や雹を降らし、時ならぬ暴風大雨荒れさすびて、五穀實す惡疫流行して人民飢に勞れ、疾に仆れ、互に食を争ひて獸のやうに殘害ひ合ふ。然るに之に反して人若し戒法を持つならば、多くの人民保護の諸天は威光を増す、阿修羅の勢力は衰へてくる、惡龍力を失ひ、善龍力を獲る。かやうに善龍が力を獲れば、風雨時に順ひ、春夏秋冬の四時和暢ぎ、時に甘雨大地を濕して五穀豊に稔り、人民安樂に家業を勵み、兵戰は全く止み、惡疫の流行を見ることはない。至乃

第五科 氣爲道本第七

君子曰、道士大霄隱書無上眞書等云、無上大道君治在五十五重無極大羅天、中玉京之上七寶玄臺金牀玉机、仙童玉女之所侍衛、住在三十三天三界之外、按神仙五嶽圖云、大道天尊治大玄之都、玉光之州、金眞之郡、天保之縣、元明之鄉、定志之里、災所不及靈書經云、大羅是五億五萬五千五百五十五重天之上天也、五嶽圖云、都者觀也、太上大道道中之道神明君最守靜居、太玄之都、諸天內音云、天與諸仙鳴樓都之鼓、朝宴玉京、以樂道君

【讀方】君子のいはく、道士大霄が「隱書」「無上眞書」等には、無上大道君、治、五十五重無極大羅天の中、玉京のうへ、七寶玄臺、金牀玉机にあり。仙童玉女の侍衛するところ、三十三天三界のほかに存在す。「神仙五嶽の圖」を按ずるに、いはく大道天尊は大玄の都、玉光の州、金眞の郡、天保の縣、元明の郷、定志の里を治す。災およびさるところなり。「靈書經」には、大羅はこれ五億五萬五千五百五十五重天の上天なり。五嶽の圖には、都は觀なり。大上は大道なり。道中の道神なり。明君もとも靜をまもりて大玄の都に居る。「諸天內音」には、天と諸仙と樓都の鼓をならす、玉京に朝宴して、道君を樂ましむ。

【字解】一。大霄 傳記不明。

二。「隱書」「無上眞書」「神仙五嶽圖」「靈書經」「諸天內音」 皆道教に作る所の偽教。

三。朝宴 「祝文」に宴は安也といふ。平和に來朝すること。

【文科】 道教の傳ふる偽經の所説をあげ、もつて其妄誕を知らしむる一段。

【講義】 (略)

第六科 出道偽經篇第十

案道士所上經目皆云依宋人陸修靜而列一千二百二十八卷本無雜書諸子之名而道士今列乃有二十四卷其多取漢書藝文志目妄注八百八十四卷爲道經論至案陶朱者即是范蠡親事越王勾踐君臣悉囚於吳嘗屎飲尿亦以甚矣又復范蠡之子被戮於齊父既有變化之術何以不能變化免之案造立天地記稱老子託生幽王皇后腹中即是幽王之子又身爲柱史復是幽王之臣化胡經言老子在漢爲東方朔若審爾者知幽王爲犬戎所殺豈可不愛君父與神符令君父不死耶至指陸修靜目錄既無正本何謬之甚也然修靜爲目已是大僞今玄都錄復是僞中之僞矣至乃

【讀方】道士のあぐるところの經の目を按ずるに、みないはく、宋人陸修靜によりてしかも一千二百二十八卷を列れたり。もと雜書諸子の名なし。しかるに道士いま列ぬるに、すなはち二十四卷あり。その中におほく漢書、藝文志の目をととりて、妄に八百八十四卷を註して道の經論とす。至按ずるに陶朱は、すなはちこれ范蠡なり。まのあたり越王勾踐につかへて、君臣とくく吳に囚れて、屎をなめ尿をのんで、亦もて

甚だし。また、范蠡が子に齊にころさる。父すでに變化の術あらば、なんぞもて變化して、之を免る。こゝとあたはざる。造立天地記を按ずるに、稱すらく、老子、幽王の皇后の腹の中に託生す。すなはちこれ幽王の子なり。また身柱史たり。またこれ幽王の臣なり。化胡經にいはいく、老子漢にありては東方朔なり。もし審にしからば、いしんぬ、幽王大戎の爲に殺る。あに君父を愛して、神符をあたへて、君父をして死せざらしめざるべけんや。至陸修靜が目錄をさす。すでに正本なし。何ぞ謬の甚だしきや。しかるに修靜、目をなすこと、すでにこれ大僞なり。いま玄都錄またこれ僞のなかの僞なり。至乃

【文科】道經目錄の誤謬を指摘し、眞妄説を難破する一段。  
 【講義】いま道士玄都觀が天子に上つた道經目錄を案て見るに、宋の陸修靜の編纂した書籍目錄に依つたとして一千二百二十八卷を列ねてをる。然るに其中には『韓非子』、『淮南子』といふやうな諸子やその他の雜書は入つてをらぬ。然るに現存の道家の經は大凡二千四百卷を數へてをる。其中千五百十六卷は道家の經典や傳記等の道書にして、他の八百八十四卷は諸子百家の書籍である。是等を『漢書』、『藝文志』の目錄から取り出して、自分で勝手に道經の經論であると數へ立てゝゐるのである。至乃  
 更に道家は、陶朱公の著作と稱して『變術經』を擧げてゐるが、其陶朱公は親しくかの越王勾踐に事へて吳を伐つた人である。若し彼がそんな神變不思議の術を知つてゐたな

らば、嘗つて越王が吳王に破られて、君臣悉く吳に囚へられ、尿を嘗め尿を飲んだといふ甚しい悲境に陥つたこともあり。復范蠡の子が齊に殺されたこともあつた。是等の場合、其父范蠡に變化不思議の術があつたならば、なせ變化の術をもつて其子を救はなかつたのであるか。越王の悲境に沈んだ時も其通りの非難を受けねばなるまい。

『道立天地一記』といふ道教の書を案べて見るに、老子は周の幽王の皇后の胎内に宿つたと稱してをる。さすれば彼は幽王の子である。又彼自身周の柱史となつたと云へば幽王の臣である。『化胡經』といふ道書によれば、老子は漢時代には東方朔であつたといふ。若し其説が眞實であるならば、幽王が犬戎の爲めに殺される時に、何故に君父たる幽王の爲めに神符を與へて犬戎の毒手から免れしめなかつたのであるか。

先に道家に於いて、陸修靜の目錄に依ると指定してあるが、其目錄の正本がない。誤謬の甚しいものである。即ち陸修靜の目錄が既に大なる偽作である。されば其に依れる支都觀の目錄なるものは、偽中の偽と云はねばならぬ。

第七科 歸心有地篇第十二

又云大經中說道有九十六種唯佛一道是於正道其餘九十五

種皆是外道朕捨外道以事如來若有公卿能入此誓者各可發菩提心老子周公孔子等雖是如來弟子而爲化既邪止是世間之善不能隔凡成聖公卿百官侯王宗室宜反僞就眞捨邪入正故經敎成實論說云若事外道心重佛法心輕即是邪見若心一等是無記不當善惡事佛心強老子心弱者乃是清信言清信者清是表裏俱淨垢穢惑累皆盡信是信正不邪故言清信佛弟子其餘等皆邪見不得稱清信也至乃捨老孔之邪風入法流之眞教

已上抄出

【讀方】 又いはく大經の中にとかく、道に九十六種あり。たゞ佛の一道これ正道なり。その餘の九十五種においては皆これ外道なりと。朕、外道をすてゝもて如來につかふ。もし公卿ありてよく此の誓に入らん者は、おのゝ菩提の心をおこすべし。老子、周公、孔子等、これ如來の弟子として、しかも化をなすといへどもすでに邪なり。たゞこれ世間の善なり。凡を隔てて聖と成すこと能はず。公卿百官侯王宗室よろしく僞をかへして眞につき、邪をすてゝ正に入るべし。かゝるがゆへに經敎成實論に説いていはく、もし外道につかへて、心おもく、佛法は心かろし。すなはちこれ邪見なり。もし心一等なるこれ無記にして善惡に當らず。佛に事へて、心強く、老子に心弱きは乃ちこれ清信なり。清信といふは清はこれ表裏ともによくきよく、

垢穢惑累みなつくす。信はこれ正を信じて邪ならざるがゆへに清信佛弟子といふ。その餘ひとしくみな邪見なり。清信と稱することをえざるなり。乃至老孔の邪風をすて、法流の眞教に入れよとなり。抄出

【字解】一。成實論 梵音サトヤ、シツドヒ、シャーストラ(Satyasthiti-shastra)、廿卷。詞梨跋摩造、鳩摩羅什譯。内容を百二品に分ち、四阿含經の文を引證して問答體に我法二空の理を述示せるもの。

【文科】終りに外道を捨て、佛法歸依することを勸むる一段。

【講義】又梁の武帝の捨老歸佛の誓に云はく、『涅槃經』に説く、九十六種の教法の中、唯佛教のみが正しい道である。餘の九十五種は外道の法である。朕いま外道の教へを棄て、如來に歸命し奉る。若し三公九卿の輩にして、朕の歸佛の誓ひに入らんと思はん者は、各菩提心を發すがよい。この道を求める心を起すならば、必ずや朕ともにも正道に歸するであらう。かの老子、周公、孔子等の聖人は、みな如來の弟子として、萬民に化益を施してゐるけれども、眞實の如來の道より云へば邪道と云はねばならぬ。即ち夫等の教へは此世に於ける善にして、出世無漏の善といふことは出來ない。凡夫を超えて聖果を成ずることが出來ない。公卿、文武の百官、諸侯、並に王家の宗族達は、宜しく僞教に反いて眞實教に就き、邪道を棄て、正道に歸入するが宜しい。

故に『經教成實論』に説いて云はく、若し外道の教を奉ずること慙慙にして、佛教を信

奉することが薄いならば、夫は邪見である。若し外道佛教の何れにも、均等の心をもつて信奉するならば、無記にして善でも惡でもない。故に佛教を信奉する心強く、老子の教へを信する心が弱いならば、夫は清信である。清信とは、清は裏表ともに淨らかに、煩惱の垢穢や、惑ひの累ひが残らず盡きてゐる所をいふ。信とは正しい道理を信じて邪を離れるをいふ。かくの如き心をもつ者を清信の佛弟子といふのである。其餘は盡く邪見である。清信と稱することは出來ない。至乃

老子、孔子の邪まの化風を捨て、佛法の眞實なる法流に歸入せよと云ふのである。抄出

第二項 『法事讚』の文

光明寺和尚云、上方諸佛如恒沙、還舒舌相爲娑婆十惡五逆多疑、誘信邪事、鬼饑神魔、妄想求恩、謂有福災、障禍橫轉、彌多連年臥病、於牀枕、聾盲脚折、手攀、撥承事、神明得此報、如何不捨念彌陀。上巳

【讀方】光明寺の和尚のたまはく、上方の諸佛恒沙のごとし。かへりて舌相をのべたまふことは、要

婆の十惡五逆おほく疑謗し、邪を信じ、鬼につかへ、神鬼を侮めて、みだりに想うて、恩をもとめ福あらんとおもへば、災障禍横うた、いよくおほし。連年に病の床枕に臥す。瞽盲脚をれ手擧振り、神明に承事してこの報をうるものためなり。如何ぞすて、彌陀を念せざらん。上巳

【文科】「法華證」の文によりて、諸佛の證誠は邪神邪魔に歸依せざれといふことであると宣給ふ一段。

【講義】光明寺の善導和尚云はく、餘の五方の諸佛と等しく上方の諸佛も亦恒沙の如くましまして、還舌相をいだして、彌陀の本願を證誠し給ふ所以は、娑婆世界の十惡五逆の人々が、多く疑ひを起して佛法を謗り、邪道を信じ鬼神に奉仕へ、魔神を饒めて、自分の目の前の欲を満さんが爲めに、妄想を擅にして、恩恵を求むれば、福社が來るであらうと思へば、さうではなくして、災障、禍が思ひがけなく起つて、彌多くなり。年を経て病の牀枕に臥し、聾となり、盲となり、脚折れ手擧振る。是等は實に邪神に承事へた報である。是等の衆生の爲めに、上方恒沙の諸佛が舌相を示し給ふのである。されば何ぞ是等の迷信を棄て、彌陀の本願を信せざる。上巳

第三項 『法界次第』の文

天台法界次第云一歸依佛經云歸依於佛者終不更歸依其餘

諸外天神也又云謂歸依佛者終不墮惡趣云二歸依法謂大聖所說若教若理歸依修習也三歸依僧謂歸心出家三乘正行之伴故經云永不復更歸依其餘諸外道上巳

【讀方】天台の法界次第にはく。一には佛に歸依す。經にはく、佛に歸依せん者、つひに更りてその餘のものゝの外天神に歸依せざれ。又いはく、佛に歸依せん者、つひに惡趣に墮せじといへり。二には法に歸依す。いはく大聖の所說、もしは教もしは理、歸依し修習せよとなり。三には僧に歸依す。いはく心、家を出でたる三乘正行の伴に歸するがゆへに、經にのたまはく、永また更りてその餘のものゝの外道に歸依せざるなり。上巳

【字解】一。法界次第 六卷。具に『法界次第初門』天台智者大師智願の撰。法門の淺深次第を解せざるもの、又は名數に迷ふ者の爲めに、自然に三諦三觀の妙理を觀することの出來るやうにといふ意にて、述作せられた典籍である。述ぶる所の法門三百科、四禪、四諦、十二因緣、六度等多くの名數を集む。

【文科】「法界次第」の文によりて、外道天神の歸依を誡め、三寶歸依を勧むる一段である。

【講義】天台大師の著「法界次第」に三歸依を明してある。一に佛に歸依し奉る。經に説き給ふやう、佛に歸依し奉るものは、どうしても佛以外の諸天鬼神等に歸依してはならぬ。又云はく、佛に歸依し奉る者は、結局三惡道に墮つることはない。二に法に歸

依し奉る。そは大聖釋尊の説かれたる教理に歸依し、實の如く修習めよと云ふのである。三に僧に歸依し奉る。そは心、煩惱の家をいで、正しく三乘（聲、緣、善）の法を修めてゐる佛道の伴侶に歸依することをいふ。故に經に云はく、眞實の僧實に歸依する者は永へに復佛教以外の外道の法に歸依することはないと。

第四項 『往生略傳』の文

慈雲大師云然祭祀之法天竺韋陀支那祀典既未逃於世論眞誘俗之權方上巳

【讀方】慈雲大師のいはく、しかるに祭祀の法は、天竺には韋陀、支那には祀典といへり。既にいまだ世に逃れず。眞を論すれば俗を誘ふる權方なり。上巳

【字解】一。慈雲大師 名は遵式、支那天台郡寧海の人。慈雲大師はその號である。初に禪を學び、後天台を學び、大に台宗を振興す。明道元年十月十日、(西紀一〇三二)寂す。壽六十九。著はす所。『誓生西方記』、『淨土行願法門』、『淨土略傳』、『教藏隨逐目錄』等である。

二。韋陀 梵音エーダ(Veda)。吠陀論のこと。印度最古の聖典。アールヤ民族が中央高原から下りて、印度五河の流域より雪山の西麓恆河の流域に居を占むる間に成立せる靈歌を集めしものにて、婆羅門教の根

本聖典である。その成立年代は學者によりて説を異にしてゐるが、大凡紀元前千五百年より千年の間に成立せるものらし。これに四種あり。一、リグ吠陀(Rig-Veda) 二、ヤジュル吠陀(Yajur-Veda) 三、マナス吠陀(Mantra-Veda) 四、サーヤ吠陀(Sama-Veda) 【文科】『往生略傳』によりて、祭祀の意義を示したまふ一段である。

【講義】慈雲大師遵式の『往生略傳』に云はく、鬼神死者等を祭祀する法は、印度にては吠陀の聖典があり、支那には祀典があるけれども、是等祭祀法は、未だ世間の道に關する所論に過ぎないので、眞實の所を云へば、世俗の人々の性に同じて出世間道に入らしめんが爲めの權化方便である。

第五項 『四教儀』の文

高麗觀法師云餓鬼道梵語闍黎多此道亦徧諸趣有三福德者作山林塚廟神無三福德者居不淨處不得飲食常受鞭打墮河塞海受苦無量詭詐心意作下品五逆十惡感此道身已

【讀方】高麗の觀法師のいはく、餓鬼道、梵語には、闍黎多、この道また諸趣に徧す。福德あるものは山林塚廟神となる。福德なきものは不淨處に居し飲食をえず。つれに鞭打をうく。河をふさぎ海をふさぎ

て、苦をうくること無量なり。詔誑の心意に、下品の五逆十惡を作りてこの道の身を感ず。上巳

【字解】一。觀法師 高麗の人。名は諦觀、支那の吳越王使を高麗に遣はして經疏を求むるに會し、國人の望みに應じて經疏を奉じて行き、四層九一年、天台第十五祖義寂師の講述を聞いて心服し師の禮を執る。有名なる『天台四教儀』は其遺著である。『佛祖統紀』第十に委し。

二。闍黎多 梵音プレータ (Prata)、畢利多、薛荔多、閉黎多、彌多等とも音譯す。餓鬼と譯す。

【文科】鬼神に詔びる者の果報は餓鬼道なりと示し給ふ。

【講義】高麗國の諦觀法師の著『四教儀集註』上の文に云はく、餓鬼道の梵語は闍黎多といふ。此界の有情は人間、天上等の各趣に行き亘つてゐる。即ち福德の因をもつてゐる餓鬼は、山林や塚廟の神となり、福德をもつてをらぬ餓鬼は、不淨處に住ひて、飲食を取ることが出來ず、常に諸天の爲めに驅使はれ、鞭打たれ、河を填めたり、海を塞いだりする。果なき苦役に使はれ、限りない苦みを受ける。

この餓鬼道に墮する者は、誑誑ひ、心意から軽い五逆十惡の罪を作つた爲めに、此界の身を受けたのである。

### 第六項 『四教儀集解』の文

神智法師釋云餓鬼道常飢曰餓鬼之言歸尸子曰古者名人死爲歸人又天神云鬼地神曰祇也至形成似人或如獸等心不正直名爲誑誑誑

【讀方】神智法師釋していはく、餓鬼道はつれに飢乏たるを餓といふ。鬼の言は歸なり。尸子にいはく、いしへは人死を名けて、歸人とす。また天神を鬼といひ、地神を祇といふ。乃形成るひは人に似たり。あるひは獸等のごとし。心正直ならざればなづけて誑誑とす。

【字解】一。神智法師 支那平陽の人。姓は葉氏、名は從義、神智は其諡號である。學を扶宗に受け、天台宗山の系統に屬し、後山化と稱せらる一人である。大雲、五峰、寶鏡等の諸寺に歴住し、晩年壽聖寺に居して大に宗風を張る。元祐六年(西紀一〇九二)寂す。『天台四教儀集解』は其著である。

【講義】神智法師の『四教儀集解』中に上に餓鬼道を解釋して云はく、餓鬼道の餓はいつも飢餓に苦しんでゐると。又鬼は歸の意味である。『尸子』といふ書に、古は人の死ぬるを歸人というたとあるは此意である。されば餓鬼とは、死んで飢餓の身となつたといふ意味である。又天神を鬼と云ひ、地神を祇と名けるといふ説もある。この意味によれば飢餓の天神となつたといふ意味である。元より天神というても、天部に屬する鬼神の意味で、



常に飢に苦んで天人に驅使せらるゝ鬼をいふ。至乃

其餓鬼の形は人に似た者もあり。獸等に似たものもある。又この餓鬼道に落ちる因として詔誑といふ煩惱があげてあつたが、それは心の正直くないことをいふ。此不正直の心から、強者に對しては誑ひとなり、弱者に對しては誑といふことになるのである。

### 第七項 『孟蘭盆經新記』の文

大智律師云、神謂鬼神總收四趣天修鬼獄。

【讀方】大智律師のいはく、神はいはく鬼神なり。すべて四趣、天修、鬼獄にをさむ。

【字解】一、大智律師 元照律師のこと。支那餘杭の人、宋の元符元年に四明開元寺に戒壇を創立したが、後病により淨土門に歸依す。四分律行事抄資持記「阿彌陀經義疏」等の著あり。政和六年(西曆一一一六)寂。壽六十九。本書第二卷、三九〇頁參照。

【文科】鬼神の所屬を示して貶黜し給ふ一段。

【講義】大智律師元照の『孟蘭盆經新記』上に云はく、神と云ふのは鬼神のことである。この鬼神は餓鬼道に屬するのである。この道の所在を云へば、總べて四修に收められる。

即ち天界、修羅、餓鬼、地獄である。それは劣つた餓鬼は餓鬼界に屬し、勝れたものでは天界に屬する。又地獄に屬するといふのは、閻浮提の下五百由旬なる閻摩王界に餓飢道ありて閻羅王に領せらる。

### 第八項 『觀經扶新論』の文

度律師云、魔即惡道所收。

【讀方】度律師のいはく、魔は即ち惡道の所收なり。

【字解】一、度律師 戒度律師の略稱。元照律師の弟子。宋の人、四明龍山沙門にして「四分律」に通達す。晚年餘姚の極樂寺に住し、一意四方に歸依す。「觀經扶新論」三卷、「阿彌陀經開持記」三卷、「觀經扶新論」等の著あり。

【文科】魔の所屬を示し給ふ。

【講義】戒度律師は其著『觀經扶新論』に云はく、修道を妨げる魔は、六道の何れに收められるかと云へば、矢張り鬼神等と等しく三惡道に屬する。

止觀魔事境云二明魔發相者通管屬皆種爲魔細尋枝異不出三種一者慢悵鬼二者時媚鬼三者魔羅鬼三種發相各不同

【讀方】止觀の魔事境には、二に魔の發相をあかさば、管屬に通じてみな稱して魔とす。くほしく枝異をたづねれば、三種をいす。一には慢悵鬼、二には時媚鬼、三には魔羅鬼なり。三種の發相各々不同なり。

【字解】一。止觀 天台智者大師の著『摩訶止觀』十卷を指す。弟子章安記。天台宗の觀心を説ける書にして天台一家の修道の本據とする所である。全篇十章に分つ。第一、止觀大意。第二、止觀の釋名。第三、止觀の體相。第四、止觀の一切法を攝持すること。第五偏教と圓教の區別。第六、廿五方便。第七十乘觀法。後の三章は講說一夏に滿ちた故に説いてない。

二。慢悵鬼 『止觀』本文には慢悵鬼としてあり。此下の『六要』には「慢悵鬼未見、有異本一歎」というて、慢悵鬼の相を明す。この魔の現はるゝ有様は、修道者が座つてゐると、頭を摩でたり、身體に觸れたり、又は抱いたり、振つたりして、こそばいやうな、嫌な氣分がして堪へ難い。別段苦痛を感じる程烈しくはないが、時には耳や眼鼻に故障を興へ、變な聲を發して追つてくるから、捉へて見るが風のやうに取り留めることが出来ない。此鬼の面は批把に似て四目兩口である。

三。時媚鬼 又は時魅ともいふ。修道者が邪想の座禪をやつてゐると、老苦男女、けたいな禽獸なぞ

の姿した魔が現はれて、時には人を樂ませる。この魔は晝夜十二時の時に應じて一定の奴が出るのであるから、例せば、丑の時ならば丑と呼び、寅の時ならば寅と云へば魔は去るといふのである。

四。魔羅鬼 正しく善を破り、惡を増長せしむる惡魔にして、修道者の感官や意識を惑亂して、修行を退廢せしめる。

【文科】此文は度律師の文を證する爲めに引く。故に上文に感ずる。

【講義】『摩訶止觀』第八、魔事境に五科をあげて種々の魔相を明す中、其第二科に魔の起る模様を云へば、魔にも様々ありて、皆夫々部屬する所があるが、夫を總じて魔といふのである。夫で細に枝葉に互りて案べて見るに、大凡三種に分類せられる。一には慢悵鬼、二には時媚鬼、三には魔羅鬼である。是等の三種の魔が修道を妨げる有様は夫々違うてゐる。

第九項 『往生要集』の文

源信 依止觀云魔者依煩惱而妨苦提鬼者起病惡奪命根上

【讀方】源信、止觀によりていはく、魔は煩惱によりて苦提をさまたぐ。鬼は病惡をおこして命根をうばふ。上

【文科】 魔衆の障礙を示し給ふ。

【講義】 源信和尚は其著『往生要集』中末に、『摩訶止観』に依りて云はく、魔とは如何なるものかと云へば、煩惱に依りて菩提を妨げるものをいふ。即ち出世間道を妨げるものである。次に鬼とは如何なるものかと云へば、身體の病氣を起して命根を奪ふものをいふのである。魔は菩提心を妨げ、鬼は其菩提心を宿す所の肉身を毀る。上巳

### 第五節 外典

#### 第一項 『論語』の文

論語云季路問事鬼神子曰不能事人焉能事鬼神抄出

【論語】 論語にいはく、季路とはく、鬼神に事へんかと。子のたまはく、人に事ふること能はず。いづくんぞよく鬼神につかへんや。抄出

【文科】 鬼神を祀ることに關する外典の説の代表として論語を引き、もつて鬼神に仕ふることの無意味なることを示し給ふ。

【講義】 『論語』に云はく、季路、孔子に問うやう。「鬼神に奉仕へても宜しいでせうか。」

孔子答へて、「吾々は日常自分の最も親しくしてゐる人間に對してさへ、誠心をもつて交際ふことは出来ないでゐる。さればどうして眼に見えぬ鬼神に事へる資格があらうぞ。」

# 第四編 流通分

【大意】本篇は正しく「化巻」全部の結文である。こゝに聖人は自ら其修道生涯に於ける尤も重大時期を叙して、師弟障難、恩師入滅、師資相承、本典製作の理由を述べ給ふ。是れ聖人の略自叙傳である。熾烈なる信仰的權威、謙虛なる修道者の襟度、長に欽仰尊崇すべき聖文である。

## 第一章 黒谷障難

### 第一節 緇素昏迷

竊以聖道諸教行證久廢淨土真宗證道今盛然諸寺釋門昏教  
今不知真假門戶洛都儒林迷行今無辨邪正道路斯以興福寺  
學徒奏達

太上天皇

號後鳥羽院

今上

號爲仁門院 聖曆承元丁卯歲仲春上旬之候 主上

第一章 黒谷障難

臣下背法違義成忿結怨

【證方】竊に以みれば、聖道の諸教は行證ひさしく廢れ、淨土の眞宗は證道いま盛なり。しかるに諸寺の釋門、教に昏くして眞假の門戸を知らず。洛都の儒林、行に迷ひて邪正の道路を辨ふることなし。斯をもて興福寺の學徒、大上天皇親臨監成。今上號す諱爲仁。聖曆承元丁卯の卯の歲、仲春上旬の候に奏達す。主上臣下、法にそむき義に違し、忿をなし怨を結ぶ。

【字解】一。行證 佛果を得べき修行と、修行によりてうる證果のこと。

二。證道 往生成佛の證りを得る本願の大道のこと。現實に證りなうる教へといふこと。

三。諸寺の釋門 奈良の興福寺、東大寺、比叡の延曆寺、三井の園城寺等、當時の俗的勢力のありし寺々の僧侶のこと。僧は皆な釋を姓とする故に釋門といふ。

四。眞假門戸 佛の本願を信じて成佛するは眞實の教にして、萬行の自力修善を修して佛果を獲んとする教は、方便の教である。教は人を導いて道の奥旨に達せしむる故に門戸といふ。

五。洛都儒林 洛都は京都、儒林は儒家、江家等の儒者達のこと。

六。興福寺 法相宗の大本山。大和奈良市にあり。藤原鎌足公の夫人鏡女王の創立にかはり、藤原氏の氏寺である。始めは山科寺又は厩坂寺と稱せしが、和銅三年、不比等いまの地に移し興福寺と稱す。元慶二年以來、同祿に罹りしこと八回。

七。大上天皇 位を禪り給ひし天皇の稱。

【文科】 緇素通俗の昏迷を極威ある筆にて叙し給ふ一段。

【講義】 竊に思をめぐらせば、聖道自力の諸教は、其教の如く實修することと、並に其證果を得ることは、もう遠い以前から廢れて、ほんの名ばかりとなつてをるのであるが、之に反して淨土眞宗の他力易行の教へは、今や時機相應の法として、一天四海に盛んに弘まりつゝあるのである。然るに南都北嶺の諸大寺の僧侶達は、釋尊の教法が三時に亘りて興廢する道理に昏い爲めに、淨土門は眞實、聖道門は權假方便の教へであることを知らずにある。又京都の儒者達も實際に行ふべき行法の取捨に迷つて見分けがつかない爲めに、現世祈禱等を中心とする邪道と、正しい佛敎の道理とを區別することが出來ずにある。かやうな有様であるから、南都興福寺の學僧達が、時は承元六年丁卯歲四月上旬、大上天皇即ち後鳥羽院、並に今上天皇即ち土御門院に奏上し奉りて、念佛禁止を訴へるに至つた。

第二節 師弟障難

因茲眞宗興隆、大祖源空法師并門徒數輩不考罪科、狼坐死罪。

或改僧儀賜姓名處遠流予其一也爾者已非僧非俗是故以禿  
字爲姓空師并弟子等坐諸方邊州經五年居緒

【讀方】茲によりて眞宗興隆の太祖、源空法師、ならびに門徒數輩、罪科を考へず狼がはしく死罪に坐す。  
あるは僧儀を改め、姓名をたまうて遠流に處す。予はその一なり。爾はすでに僧にあらす俗にあらす。この  
故に禿の字をもて姓とす。空師ならびに弟子等、諸方の邊州に坐して五年の居緒をへたり。

【字解】一。居緒 日月。「詩經」の「日居月緒」から出たもので、居緒は添字で、何の意味もない。今は  
月日の異名として用ひらる。

【文科】 光耀進る文字をもつて師弟遺難を叙し給ふ一段。

【講義】 あ、何等の非法であらう。主上も臣下も、天下の大法に背き、正義に違ひ、叨  
りに無法の忿を起し、怨を結び、遂に彼等無法の學徒等が、訴を容れ給ひて、遂に淨土眞  
宗を初めて我國に興隆し給ひし太祖源空聖人を初めとして、門下の秀俊なる人々に對して  
罪科の如何を考へもせず、擅まゝに死罪を行ひ、又は僧侶の資格を奪うて俗姓を賜ひ、遠  
國に流竄した。我愚禿親鸞も其一人である。さればかやうな擯罰を蒙つた上は、もう僧侶  
でもなければ、又在俗者の班に列することも出来ない身分である。夫故に彼戒僧の異名と

稱せらるゝ禿の字をもつて自分の姓としたのである。源空聖人並びに弟子達は、邊國の配  
所に坐せられて、五年の星霜を経るに至つた。

### 第三節 空師の歸洛入滅

皇帝 諱佐土院 聖代建曆辛未歲子月中旬第七日蒙勅免入洛已  
後空居洛陽東山西麓鳥部野北邊大谷同二年壬申寅月下旬  
第五日午時入滅奇瑞不可稱計見別傳

【讀方】 皇帝(佐波の院。諱守成)聖代建曆辛の未の歲、子月中旬第七日、勅免を蒙りて、入洛已  
後、空、洛陽東山の西の麓、鳥部野北の邊大谷に居したまひき。同二年壬の申寅月下旬第五日午の時  
に入滅したまふ。奇瑞稱計すべからず。別傳にみえたり。

【字解】 別傳 聖覺法印の「十六門記」とする説あれども、同書は安貞元年の作なれば、元仁元年より  
は三年後なれば此説用難し。

【文科】 師聖人の歸洛入滅を述べ給ふ。

【講義】 かくて順德天皇の聖代、建曆元年辛未歲十一月中旬、空聖人は勅氣御免

の勅命を蒙りて御歸洛となり、其後は京都東山の西麓、鳥部野の北邊なる大谷に御住居になり、同二年壬申の正月廿五日午時に入滅になつた。御臨終の際、様々の奇瑞があつて稱へまつる違もない。委しくは源空聖人の別傳に載せてある。

## 第二章 聖人の入宗と稟教

### 第一節 入宗稟教

然愚禿釋、鸞建仁辛酉、曆棄雜行、今歸本願、元久乙丑、歲蒙恩恕、今書選擇、同年初夏中旬第四日、選擇本願念佛集、內題、字并南無阿彌陀佛往生之業念佛爲本、與釋、綽空、字以空、真筆、令書之、同日空之真影申、預奉圖畫、同二年閏七月下旬第九日真影、銘以真筆、令書南無阿彌陀佛、與若我成佛十方衆生稱我名號、下至十聲、若不生者、不取正覺、彼佛今現在成佛、當知本誓、重願不虛、衆生稱念、必得往生之真文、又依夢告、改綽空、字同日、以御筆、令書名之字、畢、本師聖人、今年七旬三、御歲也、選擇本願念佛集、者依禪定博陸、法名圓照、兼實之敎命、所令撰集也、真宗、簡要念佛、與義攝在于斯、見者易論、誠是希有最勝之華文、無上甚深之寶典也、涉年、涉日、蒙其敎誨、之人雖千萬、云親、云疎、獲此、見寫之、徒甚

以難爾既書寫製作圖畫真影是專念正業之德也是決定往生之徵也仍抑悲喜之淚註由來之緣

【讀方】 しかるに愚禿釋の鸞、建仁辛の酉の屠、雜行をすて、本願に歸す。元久乙の丑の歲、恩恕を蒙りて選擇を書しき。同きとし、初夏中旬第四日、選擇本願念佛集の内題の字、ならびに南無阿彌陀佛往生之業念佛爲本と、釋の禪空の字と、空の眞筆をもて之を書しめたまひき。おなじき日、空の眞影まうし預りて圖畫したてまつる。おなじき二年閏七月下旬第九日、眞影の銘は、眞筆をもて南無阿彌陀佛と、若我成佛十方衆生、稱我名號下至十聲、若不生者不取正覺、彼佛今現在成佛、當知本誓重願不虛、衆生稱念必得往生の眞文とを書しめたまひき。又夢の告によりて、禪空の字を改めておなじき日、御筆をもて名の字を書しめたまひをはんぬ。本師聖人今年七旬三の御歳なり。選擇本願念佛集は、禪定博陸(月輪殿兼實法名圖照)の教命によりて選集せしめたまふ所なり。眞宗の簡要、念佛の奧義、これに攝在せり。見るもの驗やすし。誠にこれ希有寂勝の華文、無上甚深の寶典なり。年を涉り日を涉りて、その教誨を蒙ふる人千萬なりといへども、親といひ疎といひ、この見寫を獲る徒はなばた以てかたし。爾るにすて製作を書寫し眞影を圖畫せり。これ專念正業の徳なり。これ決定往生の徵なり。よりて悲喜の涙を抑へて由來の縁をしるす。

【字解】 一。恩恕 師の許しであるから、恩恕といふ。恩惠深い、お怒しといふこと。

二。選擇 法然聖人の『選擇集』この親鸞聖人御淨寫の本は、高田温本山にありと傳ふ。  
三。禪空 聖人の名。吉水入室前までは範宴と云はれしが、入室後師法然聖人より、この禪空の命名を受く、後救世菩薩の告命によりて善信と改む。  
四。内題 書籍の本文の初めに書かれた書名。外題(表紙に書かれた書名)に對していふ。  
五。空眞筆 空は源空の空にて法然聖人のこと。即ち聖人の眞筆といふこと。  
六。銘 讀、又は自誠の爲めに記しおく文。  
七。本誓重願 彌陀如來の四十八願、正しくは第十八願を指す。本誓は本弘誓願、彌陀が因位に衆生を助けすばおくまいと誓ひ給ひし廣大(弘)なる本願であるから本弘誓願といふ。そしてその願は深重の大悲から出たるものであるから重願といふ。

八。禪定博陸 禪定は禪定門の略。禪門ともいふ。入道ともいふ。曠しい世を脱れて、禪に佛道を修する故にいふ。博陸は攝政關白の唐名。前漢の光昭帝が幼かつた爲めに霍光が政を攝めた。光の徳を譽めて博陸侯と呼んだことから起る。博は大、陸は平の義。  
九。專念正業 專念は信心、正業は念佛の修行、信は行を孕み、行は信を具へて、一體である。之を眞實の信といひ、眞實の行といふ。正しく如來廻向の信心が、聖人の人格の上に表はれて、進つた御言葉である。

一〇。決定往生 定めて淨土往生の分に住すること。上の眞實の修行を、果に望めて云はれたので



【文科】敬虔流るゝ如き心懐をもつて師資相承の喜びを叙し給ふ一段である。

【講義】然るに我愚禿釋の親鸞は建仁元年辛酉の歳二十九歳にして自力の難行を修める心を棄て、他力本願に基き、元久二年三十三歳の時、師法然聖人から『選擇集』書寫の恩恵を蒙つたが、同年の夏七月十四日に、師聖人は『選擇本願念佛集』といふ内題の字と、並に南無阿彌陀佛往生之業念佛爲本、釋綽空といふ文字を、手づからこの書寫の本に御染筆遊ばされた。同日に又御許しを得て源空聖人の御眞影を圖畫き奉つた。同年閏七月二十九日、其眞影の銘として、空聖人は亦南無阿彌陀佛と、「若我成佛十方衆生、稱我名號下至十聲、若不生者不取正覺」(第一卷四七)等の善導大師の第十八願加減の御文を御認め下された。又觀音菩薩の肉食妻帶の夢の御告げに善信と呼びかけられしことから、綽空の名を改めて、御銘御染筆の日に、善信と御書き遊ばされた。

本師源空聖人は今年(元久二年)七十三歳にてゐらせられる。『選擇本願念佛集』は月輪殿關白兼實公の御敎命を受けて、撰述遊ばされた御著述である。淨土眞宗の簡要、他力念佛の奥義は、此書の中に缺目なく攝められてある。一度此書を拜見すれば、何人も念佛

の奥旨を會得することが出来る。良に世にも稀有なる最勝大文字である。意味甚深なる無上の寶典である。本書によりて淨土他力の獨立の旗幟は我國に樹立せられ、久しく聖道權化に覆はれた佛日はこゝに鮮なる光りを放つて、普く一般民衆を潤はすに至つたのである。されば年月を経て聖人の敎誨を蒙つた人々は、千萬人の多きに達するけれども、親疎に關せず此書の書寫を許された人々は甚だ罕である。即ち聖覺法印、聖光上人、隆寛律師等の數人に過ぎない。爾るに自分ももう師聖人の御鑑識によりて此寶典の書寫を許され御眞影まで御附屬を頂いた。是れ良に私が師敎によりて、専ら信念佛の一道を修めた徳の致す所である。そして又必ず往生一定の身に定められた證據である。夫故に佛恩師恩の忝さを感じ、慶喜の涙を抑へて、ことのこゝに至れる緣由を書き註すことである。

第二節 本典製作の因由

慶哉樹心弘誓佛地流念難思法海深知如來矜哀良仰師敎恩厚慶喜彌至至孝彌重因茲鈔眞宗詮撰淨土要唯念佛恩深不恥人倫嘲若見聞斯書者信順爲因疑謗爲緣信樂彰於願力妙

果顯於安養一矣

安樂集云探集真言一助修往益何者欲使前生者導後後生者訪前連續無窮願不休止爲盡無邊生死海故上爾者末代道俗可仰信敬也可知如華嚴經偈云若有見菩薩修三行種種行起善不善心菩薩皆攝取上巳

【讀方】慶しき哉、心を弘誓の佛地にて、念を難思の法海にながす。ふかく如來の利益をしりて、まことに師教の恩厚をあふぐ。慶喜いよく至り、至孝いよく重し。茲によりて眞宗の詮を鈔し、淨土の要を摭ふ。たゞ佛恩の深きことを念うて、人倫の嘲をはずす。もしこの書を見聞せんものは、信願を因とし、疑謗を縁として信樂を願力にあらはし、妙果を安養にあらはさん。安樂集にいはいく、真言を採り集めて往益を助修せん。何となれば、前に生ぜん者は後の導き、後に生ぜん者は前の訪ひ、連續無窮にして、願くば休止せざらしめんと欲す。无邊の生死海を盡さんが爲のゆへなり。(已上)爾れば末代の道俗あふいで信敬すべきなり。しるべし。華嚴經の偈にいふがごとし。もし菩薩種々の行を修行するを見て、善不善の心を起すことあれども、菩薩みな攝取す。已上

【文科】慶喜至孝の念をもつて本典製作の因縁を述べ給ふ。自然法爾の至誠瀝りて天地を包むの趣きがある。

【講義】あゝ慶ばしい哉、樹木が日光を浴びて大地に樹つやうに心を本願他力の大地に樹て、又憶念の喜びを、洋々として果なき難思の本願海に流すことである。深く如來の矜哀みを感じし奉り、師教の厚き恩徳を仰ぎ奉る。慶喜の思ひは彌心に溢れ、至孝の念は益重くなりゆく。是れ實に他力本願の然らしむる所である。この慶喜報恩の思ひから眞宗の詮を鈔出だし、淨土眞實教の肝要を摭ひ集めたことである。唯佛恩の深重なることを念じて、世間の人々の嘲り笑ふことを少しも恥とは思ひませぬ。されば此書を披見しなれば、疑ひ謗るも宜しい、夫等の人々は疑謗が縁となりて遂に信願の人となるであらう。そして如來の本願力の上に吾等の信念を彰はせ、即ち本願は信念に彰はれ、信念は本願に彰はれて、機法一體、佛凡一體の妙を感じ得るのである。さすれば無上の妙果の華は、安養淨土に開くであらう。

【安樂集】上に云はく、如來の眞實の御言を採集めて、往生の利益を助け修めしむる。何故かと云へば前に本願を信じて往生一定の身となつた者は、後に來る人々を導き、後に信する人々は、前の人々の恩恵を感謝し、どこ迄も先人後人手を取りて暫くも休止む時なく



無我山房發行書目

金子大榮著	眞宗の教義及其歴史(二)	定價一圓半錢郵稅十二錢
大草慧實著	英文眞宗要旨(一)	定價八十錢郵稅六錢
南條博士著	梵本和譯支那五譯對照佛說無量壽經(二) 梵本和譯支那二譯對照佛說阿彌陀經(版)	定價一圓半錢郵稅八錢
柏原祐義著	淨土三部經講義(五)	定價二圓半錢郵稅十二錢
山邊智善著	赤沼智善著 教行信證講義(二)	定價八圓十錢郵稅卅六錢
柏原祐義著	正信偈講義(二)	定價一圓半錢郵稅八錢
柏原祐義著	三帖和讚講義(近)	定價二圓郵稅十二錢
隈部慈明著	淨文類聚鈔講義(近)	定價一圓半錢郵稅十二錢
佐々木月樵著	支那淨土教史(二)	定價三圓半錢郵稅十六錢
柏原祐義著	眞宗通解全書(行發中)	定價金二圓半錢郵稅十二錢

無我山房發行書目

佐々木月樵著	親鸞聖人傳(四)	定價二圓半錢郵稅十二錢
多田鼎著	親鸞聖人(三)	定價七十錢郵稅八錢
佐々木月樵著	親鸞傳繪記(三)	定價一圓郵稅八錢
同編	親鸞傳叢書(二)	定價二圓半錢郵稅十二錢
浩々洞同人著	親鸞御傳鈔講話(三)	定價二圓郵稅十二錢
覺如上人著	親鸞御傳鈔(三)	定價六錢郵稅二錢
佐々木月樵 鈴木貞太郎譯	英文親鸞傳(新)	定價三圓郵稅八錢
富士川博士著	親鸞聖人(新)	定價二十錢郵稅二錢
金子大榮著	親鸞聖人の宗教(同)	定價六十錢郵稅六錢
清澤滿之全集 第一編	哲學及宗教(二)	定價二圓半錢郵稅十二錢

無我山房發行書目

清澤滿之全集 第二編 清澤滿之全集 第三編	清澤滿之全集 第一編	浩々洞編	曉鳥敏著	浩々洞編	安藤州一著	清澤滿之著	同	同	同	稻葉昌九譯
信仰及修養	日記及語錄	清澤先生の信念	清澤先生の信仰	清澤先生の教訓	先生清澤	精神主義	精神講話	佛教講話	エピクテタスの教訓	ソクラテスの教訓
定價二圓三錢郵稅十二錢	定價二圓三錢郵稅十二錢	定價六錢郵稅二錢	定價一圓郵稅八錢	定價六十錢郵稅六錢	定價四十錢郵稅四錢	定價四十錢郵稅四錢	定價四十錢郵稅四錢	定價四十錢郵稅四錢	定價七十錢郵稅六錢	定價七十錢郵稅六錢

無我山房發行書目

安藤州一譯	佐々木月樵著	曉鳥敏著	安藤州一著	近角常觀著	山邊習學著	曉鳥敏著	佐々木月樵著	金子大榮著	曉鳥敏著
ソクラテスの教訓	犧	凋	染香	親鸞聖人の信仰	聖者の後から	求道	救濟	讚仰	佛敎入門
定價七十錢郵稅六錢	定價七十錢郵稅六錢	定價七十錢郵稅六錢	定價八十錢郵稅八錢	定價八十五錢郵稅八錢	定價七十錢郵稅六錢	定價四十錢郵稅四錢	定價三十五錢郵稅四錢	定價二十五錢郵稅二錢	定價二十五錢郵稅二錢

無我山房發行書目

清水俊榮著	力	の	宗	教	版(二)	定價六十錢郵稅六錢	
多田鼎著	恩	寵	の	宗	教	版(三)	定價三十錢郵稅二錢
曉鳥敏著	人	々	の	死	版(三)	定價七十錢郵稅六錢	
齋藤唯信著	佛	教	倫	理	刊(新)	定價二十五錢郵稅二錢	
佐々木月樵著	安	心	坐	談	版(三)	定價八錢郵稅二錢	
安藤州一著	生	活	問	題	版(三)	定價十二錢郵稅二錢	
和田龍造著	宗	教	問	題	版(二)	定價七十五錢郵稅八錢	
曉鳥敏著	吾	人	の	宗	教	版(五)	定價四十錢郵稅四錢
多田鼎著	正	信	偈	講	話	版(八)	定價一圓半錢郵稅十二錢
南條博士著	歎	異	鈔	講	話	版(五)	定價一圓郵稅八錢

無我山房發行書目

浩々洞編	眞	宗	聖	典	並(製)	定價一圓郵稅八錢	
同	眞	宗	聖	典	並(製)	定價一圓半錢郵稅八錢	
同	眞	宗	聖	典	並(製)	定價一圓半錢郵稅八錢	
來馬琢道編	禪	宗	聖	典	並(製)	定價一圓十錢郵稅八錢	
同	禪	宗	聖	典	並(製)	定價一圓半錢郵稅八錢	
同	禪	宗	聖	典	並(製)	定價一圓半錢郵稅八錢	
望月信道編	淨	土	宗	聖	典	並(製)	定價一圓半錢郵稅八錢
同	淨	土	宗	聖	典	並(製)	定價一圓半錢郵稅十二錢
同	淨	土	宗	聖	典	並(製)	定價一圓半錢郵稅十二錢
柴田一英編	日	蓮	宗	聖	典	並(製)	定價一圓廿錢郵稅八錢

無我山房發行書目

同	日蓮宗聖典 <small>(皮製)</small>	定價一圓半錢郵稅八錢
同	日蓮宗聖典 <small>(金欄)</small>	定價一圓半錢郵稅八錢
長松俊恭編	眞言宗聖典 <small>(並製)</small>	定價一圓半錢郵稅十二錢
同	眞言宗聖典 <small>(皮製)</small>	定價一圓半錢郵稅十二錢
同	眞言宗聖典 <small>(金欄)</small>	定價二圓郵稅十二錢
神保如天編	禪宗聖典 <small>(續編)</small>	近刊

無我山房發行書目

浩々洞編	佛教辭典 <small>(七版)</small>	定價二圓卅錢郵稅十二錢
神保如天著 安藤文英著	禪學辭典 <small>(二版)</small>	定價四圓郵稅十六錢
柏原祐義著	眞宗辭典 <small>(近刊)</small>	定價三圓以內
同	佛教小辭典 <small>(近刊)</small>	定價一圓以內

無我山房發行書目

今津洪嶽講義	碧巖集講義	來馬琢道著	大智禪師偈頌講話	白隱禪師著	參禪要訣	遠羅天	神保如天著	從容錄講話	安藤文英編	正法眼藏註解全書	神保如天著	禪學通解全書	從容錄通解	安藤文英著	碧巖集通解
今津洪嶽講義	碧巖集講義	來馬琢道著	大智禪師偈頌講話	白隱禪師著	參禪要訣	遠羅天	神保如天著	從容錄講話	安藤文英編	正法眼藏註解全書	神保如天著	禪學通解全書	從容錄通解	安藤文英著	碧巖集通解
定價五圓十錢郵稅二十四錢	定價五圓十錢郵稅二十四錢	定價一圓半錢郵稅十二錢	定價一圓半錢郵稅十二錢	定價廿錢郵稅四錢	定價廿錢郵稅四錢	定價二圓郵稅十二錢	定價二圓郵稅十二錢	定價二圓郵稅十二錢	定價廿六圓郵稅六十錢	定價廿六圓郵稅六十錢	定價二圓半錢郵稅十二錢	定價二圓半錢郵稅十二錢	定價二圓半錢郵稅十二錢	定價二圓半錢郵稅十二錢	定價二圓半錢郵稅十二錢

無我山房發行書目

曉島敏著	歎異鈔講話	多田鼎著	歎異鈔講話	南條博士著	同朋心得	十夕條講話	丹山順藝著	赤尾道宗	廿一夕條講話	淺井秀玄著	赤尾道宗	廿一條讚說	佐々木月樵編	秀存語錄	柏原祐義編	香樹院語錄	曉島敏編	惠空語錄	赤沼智善編	七里老師語錄	禿義峰編	安心小話
曉島敏著	歎異鈔講話	多田鼎著	歎異鈔講話	南條博士著	同朋心得	十夕條講話	丹山順藝著	赤尾道宗	廿一夕條講話	淺井秀玄著	赤尾道宗	廿一條讚說	佐々木月樵編	秀存語錄	柏原祐義編	香樹院語錄	曉島敏編	惠空語錄	赤沼智善編	七里老師語錄	禿義峰編	安心小話
定價二圓郵稅十二錢	定價五十五錢郵稅六錢	定價二十錢郵稅二錢	定價五十五錢郵稅六錢	定價二十錢郵稅二錢	定價二十錢郵稅二錢	定價十五錢郵稅二錢	定價十五錢郵稅二錢	定價三錢郵稅二錢	定價十五錢郵稅二錢	定價三錢郵稅二錢	定價三錢郵稅二錢	定價七十五錢郵稅六錢	定價七十五錢郵稅六錢	定價八十五錢郵稅八錢	定價八十五錢郵稅八錢	定價八十五錢郵稅八錢	定價一圓郵稅八錢	定價一圓郵稅八錢	定價六十錢郵稅六錢	定價六十錢郵稅六錢	定價六十錢郵稅六錢	定價六十錢郵稅六錢



無我山房發行書目

佐々木月樵編	秀	存	法	話	(二版)	定價 一圓郵稅八錢				
柏原祐義編	香	樹	院	法	話	(二版) 定價四十錢郵稅四錢				
加藤智學編	易	眞	宗	聖	教	(新版) 定價二圓九十錢郵稅十六錢				
浩々洞編	眞	宗	勤	行	集	(並製) 定價十錢郵稅二錢				
同	眞	宗	勤	行	集	(特製) 定價廿錢郵稅二錢				
比叡義國著	俳	味	と	佛	法	味	(新版) 定價七十錢郵稅六錢			
白山謙致著	化	物	と	信	仰	(新版) 定價四十錢郵稅四錢				
同	人	生	觀	上	の	二	大	問	題	(新版) 定價六錢郵稅二錢
清水俊榮著	近	代	宗	教	思	想	講	話	(新版) 定價一圓郵稅八錢	
高楠博士著	眞	宗	教	と	實	人	生	(新版) 定價六十錢郵稅六錢		

無我山房發行書目

加藤智學著	修	道	の	第	一	步	(全)	定價十二錢郵稅二錢				
大谷大學編	宗	教	と	教	育	に	關	する	及	實	際	(四版) 定價一圓卅錢郵稅八錢
赤沼智善譯	ウ	パ	ニ	シ	ヤ	ッ	ド	(二版) 定價一圓十錢郵稅八錢				



毎月一回

# 精神界

一日發行

新 年 號 參 拾 一 年 一 月 七 十 七 號

□精神界は傳習に囚はれずして眞實の自己の道を探むる者の道場也

□私はどうしてよいか人生の方向がちつともわからぬので困つてゐます

□私はいつも浮き／＼してしつかりした落付がなくて困ります

□精神界は生死の囹圄を解脱して眞實の自由を求むる者の道場也

□私は病身で常に死に襲はれて苦しんでゐます

□私は日夜に襲ふて來る罪惡にせめられて死なうかと思ふことがあります

□精神界は堪へがたき自己の罪惡に身心を刺されて泣いて居る者の宿也

□私は佛が有難い様にも思ひますが、ほんとうに難有ふなれんで困つてゐます

□私は今まで持つてゐた信仰も佛様もなくなつて困つてゐます

□精神界は自己の内幕に聞き得たる佛語を傳へ、佛徳を讃嘆する講壇也

324  
399

終